
魔法少女リリカルなのはStrikerS 緋色の風

鯉太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 緋色の風

【Nコード】

N4544T

【作者名】

鯉太郎

【あらすじ】

8年前、初めて知った本当の恐怖。そして、自分の出生。絶望の中にたたき落とされた少年は、戦うことをやめてしまう。それでも心の中にあつた、決して失わなかったものとは・・・8年後、青年は再び空を舞う。『魔法少女リリカルなのはStrikers』の二次創作です。楽しんでいただければ幸いです

はやての誕生日（前書き）

一週間ほど遅れましたが、はやての誕生日記念小説です

本編はもう少しお待ちください

それでは、どうぞ

はやての誕生日

「は、はやて！はやてえ〜！！」

気持ちのいい朝を迎え、仲間たちと朝食をとったあと、珍しく書類もたまっておらずゆったりとした時間を過ごしていたはやての前に、ヴィータが息を切らしながら飛び込んできた。

「どうしたんやヴィータ？そんなに急いで。一回深呼吸しいや」
「う、うん。すうー、はー、すうー、はー」

ヴィータが少し落ち着いたところで、はやては用件を聞いた

「で、どないしたんや？」

「そ、そうだった！し、シグナムが・・・」

「シグナムがどないしたんや？」

「シグナムがゲイルと出かけて行ったんだ！しかも、いままで見たことないくらいにおしゃれして！！」

「ね、ねえはやて、本当にやるの?」

「当たり前や!」

フェイトの心配そうな声に、はやては自信満々に答える

「シグナムとゲイル君のデートやで?こんな面白そうなイベント、ほっとかれへんわ。二人が健全なデートをできるかどうか見守らな!」

はやてはそういつているが、実際は違うのをフェイトやなのは、それに他のメンバーもわかっている

『自分の好きな男が他の女性と出かける』

この事実がはやてを突き動かしているのは明らかだった

実際のところ、気になっているのははやてだけではない。フェイトやなのは、それに他のメンバーも気にはなっているのだが、あいにくと彼女たちにはやらなければならない大事な仕事があるのだ

「ほな行くでシャル!準備はええな?」

「はい!」

シャルもノリノリである。どうやら、守護騎士の中では思考回路がはやてにもっとも近いらしい

「ほな行ってくるわ。安心しい、ホテルやらに入りそうならちゃんと止めたるから(私のためにも)」

ホテルという単語に何を想像したのか、一部の隊員がピクッと反応したのをはやては見逃さなかった。その反応を見てはやてはにやりとした後、シヤマルと二人で出ていくのだった

「・・・行つたね」

「みたいだね。じゃあみんな、そろそろ準備にかかろうか」

「「「「「「はい！」「「「「「「」

「それぞれの役割は昨日のうちに端末に転送したから、その通りに動いてね」

なのはとフェイトの合図で、フォワード人とそこにいた数名のロングアーチの人員もそれぞれの仕事へと向かう。が、一人残っていたグリフィスだ

「どうしたの？グリフィス君」

「あ、高町教導官。自分のところにはそういったデータが来ていないのですが・・・」

「ああ、ええ」と

グリフィスの言葉に、なのはは申し訳なさそうに返す

「実ははやてちゃんには回していない書類が少しあるんだよね」

「・・・わかりました。僕はそれをやればいいんですね？」

「ごめんねグリフィス君」

なのはは申し訳なさそうに言う。が今のグリフィスはそれぐらいでは止まらない

「いいんですよ。どうせ僕にはこういった裏方が似合ってるんですよ。作者によつては全く出番がない小説もあるくらいの、僕には」

「グ、グリフィス？元氣出してね」

フェイトの言葉を背に受けて、グリフィスはいつもの席へと向かう。そう、いつも通りに

「今度、どこか食事でもつれて行ってあげようか」

「そ、そうだね」

そんな会話が二人の間であつたのは、また別の話だ

はやてとシャマルは今、人ごみに紛れてゲイルとシグナムを追跡していた

「ほう、ゲイル君、ちゃんとシグナムをリードしとるみたいやな。ヘタレのくせに」

「そうみたいね、ヘタレのくせに」

二人の視線の先では、喫茶店で会話をしているシグナムとゲイルがいた。

シグナムはこういったところに慣れていないらしく、多少緊張はしているが、ゲイルがうまく間を取りながら会話を展開しているため、浮いてはいない。二人を監視していたはやての耳に、店内の他の女性客の会話が聞こえてきた

『ねえねえ、見てよあのカップル。アツアツじゃない?』

『ほんとだ。女の人のほうはなんか緊張してるみたいだけど、男のほうがうまくリードできてるよね』

『いいなあ、ああやって気配りができる男の人。うらやましいなあ』

そんな会話を聞きながら、はやては考えていた

「（確かにゲイル君は人のことをよお見とるよなあ。私が疲れとると、いつも『大丈夫か?』とかさりげなく聞いてくれるし。でも、そういうところがいいんよなあ／＼／＼／＼）」

「はやてちゃん?大丈夫?」

「ひゃわ?!ど、どないしたんやシャル?」

一人でトリップしていると、シャルが話しかけてきた

「いや、シグナムとゲイル君、もう出ちゃったんだけど」

「へ?」

そういわれて先ほどまで二人が座っていた席を見ると、そこにはもう誰もいなかった

はやてとシャルは、あわてて二人の後を追った

「所とところでティア」

「なによ」

昼食をとりながら、スバルはティアナに何気なく聞いた

「もしシグナム副隊長とゲイルさんがホテルとか行ってきたらどうする？」

「ぶー」

「うわ！ティア、汚いよ」

「あ、アンタが悪いんでしょ！」

思わず吹き出してしまったティアナは、口元をふきながら文句を言うのだった

「別に関係ないわよ。お二人がどこに行ってナニやってきたって」

「わーい、ティアのツンデレ」

「・・・」

「ティアさん？あの、クロスミラージュはしまってください」

「そ、そうですよ。ここ、他にもみんないますから」

「・・・はあ、わかったわよ・・・?!」

そうエリオキヤロに言われ、しぶしぶクロスミラージュをしまったティアナは、不意に背後からさつきを感じて振り返る

そこには、鬼が二人いた

「だめだよ、ゲイル。シグナムと二人でホテルなんて」

「ゲイル君、少し、頭冷やそうか」

ティアナは願った。ゲイルが間違いを起こさないことを

はやては、何かが胸につかえるような感じがした
最初はぎこちなかったものの、デパートや洋服店など、いろいろな
場所を回るうちにシグナムとゲイルは自然に楽しむようになってい
った。あれは、誰が見てもデートに見えるだろう。もちろん、はや
てにも

「やっぱり、いややなあ」

ふっと、はやてはもらした

ゲイルもシグナムも、自分にとっては大切な人だ。だから、二人が
そういう関係になるなら、自分は祝福するつもりだった。でも・・・

「やっぱり、私は隣にいたいな」

19歳にしての、ようやく自覚した初恋。よく、初恋は甘酸っぱい
ものだというが、自分のものもそうだったようだ

「お幸せにな。二人とも。シャル。帰るか」

「あ、はい」

そういうと、二人は機動六課へと帰って行った

とある宝石店へと入っていった、ゲイルとシグナムを残して

「行ってみたんだな」

「ああ」

宝石店に入った二人は、シャマルとはやてが帰っていくのを見ていた。

「まあ、もう4時だし、ここから六課にはリニアを使えば1時間かかる。時間はしっかり稼げただろ」

「ああ。だが、私たちはどうする？リニアを使ったんでは、主よりも遅れてしまうぞ」

「そこはあれだよ」

そう言つて、店の外にあるバイクを指す。ゲイルのものだ

「ここを最後にするのは決まってたからな。ユーノに頼んで昨日のうちにここに転送魔法で送ってもらったんだ。ちよつと道を考えれ

ば、30分でつける」

「そうか。だがゲイル」

「なんだ？」

「もう右折はできるようになったのか？」

「シグナム、結構きついこと言うな」

はやてとシャルマルは、機動六課へと帰ってきた。

「あの、はやてちゃん。元気出してね？」

「ああ、大丈夫や。ただ、ちょっとショックが大きくてな」

シャルマルが何とか元気づけようとすると、はやては笑って見せる。
しかし、無理をしているのは明らかだった

「（ゲイル君ったら、ちょっとやりすぎじゃないかしら）ああ、はやてちゃん」

「うん？なんや？」

「おなかも減ったし、このまま食堂に行かない？」

シャルマルにそういわれ、自分も少し空腹を感じていることにははやては気づいた

「そうやね。ごはん食べに行こうか」

そういつて、食堂に向かう途中で、はやてはあることに気が付いた

「なんや、だれもおらんなあ。みんな食堂におるんか？」

「さあ、どうなんでしょうね？」

そういいながらも、シャマルはニコニコと笑っている。それを見て、はやては不振に思いながらも、食堂へと続くドアを開けた。その時だった

パ
パ
パ
パ
パ
パ
パ
ア
ア
ン
！
！

いきなり、はやてに向けてクラッカーが鳴らされた。

食堂には、おそらく職員全員がであろう人数がいた。さきほどまで尾行していた、ゲイルとシグナムもいる。

いつもは机でいっぱいの食堂だが、この日は両端に寄せられ、その上にはたくさんの料理が所狭しと乗せられていた

$$\begin{matrix} \neg \\ \wedge \\ ? \\ \neg \end{matrix}$$

いきなりで状況が呑み込めないはやてに、そこに集まっていた一同は大きな声で告げた

「はやてちゃん（八神部隊長）、誕生日おめでと
う（いげます）！……」

そういわれて、壁にかけてあるカレンダーを見る。6月4日。自分の誕生日だ

「わ、忘れとつた・・・」

「やっぱり。そう思って、ゲイル君が企画してくれたんだよ」

「バ、バカ、なのは、余計なこと言うなって！」

「ゲイル君が？」

なのはの言葉に、ゲイルはあわて、目を丸くする

「ちなみに、私とゲイルが出かけていたのはあなたを隊舎から引き離すためです、主はやて」

「そ、そうやったんか」

シグナムに言われ、はやてはゲイルの前まで近寄っていく

「ゲイル君、ありがとな」

「あ、ああ」

素直に礼を言われ、顔を赤くしてそっぽを向いてしまった

「ゲイル、まだ渡すものがあるのではないか？」

「う。ええっと・・・ああ、もう！」

ゲイルはシグナムに言われ、やけになりながら小さな箱を渡す

「お、俺からのプレゼントだ」

「あ、ありがとう。開けてもええか？」

「ああ」

そう言って、はやては包み紙をゆっくりとあける。

「どうしたんだ？」

「いや、お礼をしようと思って」

そう言つて、はやてはゲイルの顔に自分の顔を近づける

二人の息が互いにかかる距離だ。はやても、ゲイルも、顔が真っ赤だ
それでもはやてはにっこりと笑い

「ありがとうな、ゲイル君」

自分の唇をゲイルの唇に重ねる。いわゆるキスというやつだ

「……………// // //」

ゆっくりと、唇が離れる。二人はさっきよりも顔が赤い。もう沸騰
寸前だ

「あ、えと、ほ、ほなら料理取りに行こうか！」

「そ、そうだな、早くいかないとなくなるもんな！」

そう言つて、ゲイルははやての後を追う。さっきの気まずさはもう
ない

料理をとつて、二人で食べているとはやてがもう一度呼びかけてきた

「なあ、ゲイル君」

「なんだ？」

「私、ゲイル君のことが大好きや！」

翌日、訓練場にて

「じゃあ、今日は模擬戦するよ！組み合わせは、ゲイル君対それ以外のフォワード陣ね！」

「ちょ、おかしいだろ！」

「文句言ってちゃだめですよゲイルさん」

「そうですよ。これは私たちの憂さ晴ら・・・じゃなかった、コンピネーションの訓練なんですから」

「いま憂さ晴らしって言ったよなあ！」

「しつこいよゲイル。さあ、始めるよ」

「ええっと、ゲイルさん」

「その、頑張ってくださいね？」

「俺に味方はいないのか！」

「ゲイル（君）（さん）、少し、頭冷やそうか（冷やしまし
ようか）」

「え、ちよつと、待て！」

「スターライトオオオ・・・ブレイカー！」

「プラズマザンバー・・・ブレイカー！」

「ファントムブレイザー！」

「デイベイイイン・・・バスター！」

「ぎゃあああああああああああ！！！」

はやての誕生日（後書き）

鯉「ああ、ゲイル、生きてるかなあ。で、はやてさん、どうでしたか？」

は「あう、あうううう・・・／＼／」

鯉「だめだ、こっちも使えない。というわけで、今回はここまでです。感想など、お待ちしております。それでは」

は「これは、うちの時代か・・・？」

鯉「あ、別にヒロインがはやてに決まったわけではないので悪しからず。今後もリクエストを受け付けておりますので」

は「なんやて?!」

プロローグ（前書き）

はじめまして、鯉太郎です。よろしくお願いします。

ブローグ

もう一度、会いたかった先輩ひとがいる

もう二度と、会いたくなかった後輩ひとたちがいる

今の私たちを、見てほしくて

今の自分を、見てほしくなくて

あの人は、私たちの憧れだから

今の自分は、誰かの憧れになっていい存在ではないから

もう二度と、会えないと思っていた

もう二度と、会わなくていいと思っていた

だけど、出会うことができた

だけど、出会ってしまった

だから、私たちは運命というものに感謝する

だから、俺は運命というものを呪う

魔法少女リリカルなのはStrikers 緋色の風

始まります

第一話 お酒、ホンネ、そして親友

機動六課

この春から一年間の試験運用が始まる、『ある目的』のために設立された部隊だ

だが、今はまだ稼働しておらず、この隊舎にいるのは一握りの人間だけである。そして、隊長室にいる彼女もまた、その一人だ

「はあ、ようやく持てた・・・私の部隊」

ショートカットの少女・八神はやては、感慨深げに言う。

改めて部隊員の名簿を確認する。そこには、『不屈のエース・オブ・エース』や『金色の閃光』の異名を持つ彼女の友人の名前や、将来を有望視されているホープの名前が連なっている

「集められるだけ集めた。あとは全力でやるだけや」

独特のイントネーションで話す彼女の言葉には、強い決意の色が浮かんでいる。だが、その表情がふっと年相応の少女のそれに戻る

「グリフィス君やルキノ、アルトにヴァイスくん・・・うん、ロングアーチは問題ない。スターズのスカウトは終わってるし、ライトニングも日時の連絡は終わっとる。なのはちゃんやフェイトちゃんも協力してくれる・・・」

もう恐いものなどない。はやてはそう強く思った
そして、同時に今の自分の姿を《あの人》に見てほしいとも思った

そこに、通信が入った。はやては考えるのを一時止めて、その相手を確認する

「ええっと、あら、リンディ提督やないですか。どうかされたんですか？」

『お久しぶりね、はやてさん。今日はちょっと聞きたいことがあって連絡したの。』

何だろう、運営に関することかな？

そう思うはやてに、リンディは続ける

『もう一人、前線部隊に戦力いらないかしら？』
「へ？」

はやては、思わず間抜けな声をあげてしまった。
それは、戦力があるにこしたことはない。だが、今の部隊の構成上、それはほぼ不可能だ。

保有制限

有能な魔導師が一か所に集まるのを防ぐための制度だが、この機動六課ではかなりのネックになっている。

何を隠そう、はやて自信を含めた隊長陣が軒並みニアス、またはオーバーSランクなのだ。リミッターを使用し、前線部隊を将来有望な新人で固めることで、何とかバランスを保っているこの状況は、リンディも知っているはずだ

「リンディ提督、ありがたいんですけどうちは保有制限が・・・」
『ええ、わかってるわ。だから、元の部隊からの出向という形にしているわ。それなら保有制限には引っ掛からないはずよ』

「確かに・・・」

はやては迷っていた。戦力はほしい。しかし、この部隊の目的のためには、生半可な能力では生き残れない

『まあ、資料だけは送っておくわ。よく考えて決めて頂戴』

「あ、はい。ありがとうございます」

『どういたしまして。それじゃあ、またね』

リンディはそれだけ言うとお通信を切ってしまった。

それを確認すると、はやては送られてきたファイルを展開し、確認する。

「空戦Bで空曹・・・空戦魔導師とはいえ、あんまり優秀とはいえないなあ」

真っ先に確認したのはランクと階級。そこだけ見れば、別段ほしいという人材ではない。だが、名前を確認したはやては、眼を見開き、言葉を失う。

「え、うそ・・・？何で・・・？」

そこに映ってるのは、はやてがよく知っている人物だった。あわてて、所属を確認する。そして、さらに驚くことを発見する。

「所属・・・無限書庫？」

同日 無限書庫

「司書長、作業終わりました」

「うん、お疲れ様。時間だし、みんなあがっていいよ」

「了解しました。司書長もあんまり無理なさらないでくださいね」

「はは、そうするよ」

司書長と呼ばれた金髪の少年、ユーノ・スクライアは部下たちが帰ったのを見て、自分の部屋に入ろうとして

「どうもお疲れ様でございます！スクライア司書長殿！」

不意に誰かに呼びとめられた。いや、誰か、など考えなくてもわかる。こんな風にバカにしたように自分を呼ぶのはただ一人だ

「もう就業時間は終わりだよ、ゲイル。それに、君にそんな敬語は似合わないよ。それとも、僕をバカにしてる？」

「んなわけねえだろ？」

ユーノは振り返り、自分に話しかけてきた相手に向き直る

自分よりはかなり大きい、175cmはゆうに超えているであろう長身もそうだが、何より目を引くのは適度な長さの緋色の髪、そして同色の瞳だろう。

ゲイル・スカーレット

それが男の名だ。年は自分よりも二つ上の21歳で、付き合いは割と長いほうだ。

まあ、ユーノ自身は出会う以前から彼のことを知ってはいたのだが。

「で、何かな？今日はもう仕事は終わりだよ？」

「ああ、少しどうだ？」

それだけで、ユーノは彼の言わんとしていることが分かる。つまり、こういったことは度々あるのだ。

「わかった。まあ、僕も明日は休みだし付き合うよ。先に出口のところまで行つて」

そう言つてユーノは自室に戻り、財布などが入った上着を着ると、端末に通信が入っていることに気がついた。そして、それを確認すると、その表情は驚きに変わった

「おまたせ。どこに行く？」

「そうだな。前行ったところでいいんじゃないか？」

「ああ、あそこね。でも、今日はどうしたの？何か相談事？」

ゲイルが誘ってくるときは、大抵愚痴が入る。それを相談といい意味で受け取るところがユーノのやさしさだろう

「ん、まあちよつとな。ここじゃなんだから、店に着いてからな」
「？うん、わかった」

歯切れの悪いゲイルに違和感を感じながらも、ユーノは歩を進め、目的の店へと到着した

そこは、俗に言う居酒屋と呼ばれる店だった。もともとは、ミッドチルダにはなかったのだが、『エース・オブ・エース』や『夜天の主』のような97管理外世界の人間が増えたため、試しに開店してみたら大当たりして、今ではそれなりのシェアを獲得している。

ドアを開け、店の中に入ると、すぐさま店員が対応しにきたので人数を伝えると、すぐに席へと案内された。注文し、一息ついたところでユーノが口を開く

「でも、よほどこのお店が気に入ったんだね。同じ店に二回来るのなんて初めてでしょ？」

「まあそうだな。『居酒屋』だったか？この楽な雰囲気がいい。愚痴を言うには持って来いだ」

「ていうことは、また愚痴かい？長いこと仕事してるんだからいい加減に慣れてよ」

「いや、今日は仕事に関してじゃないんだ・・・っと、来たな」

ゲイルがそう言うと、店員がビール二つと、つまみを数品持ってくる。それらを受け取り

「乾杯」

キン、と音を鳴らし、互いのジョッキを当てると、それを一気に煽る。

「ぶはあ。で、なんなのさ。相談事って？」

「ん、ああ。その事なんだが・・・」

ユーノは、静かにゲイルの次の言葉を待つ

「リンディさ・・・じゃなかった、リンディ統括官から、依頼がきた。新しい部隊に所属しないかって」

その言葉を、ユーノは黙って受け止める。ゲイルが、以前は将来を有望視された男が、なぜ無限書庫にいるのかを、ユーノは知っている。おそらく、知っているのは自分とクロノぐらいだろう。そして、それを乗り越えるために、無限書庫に所属しながらも、日々の鍛錬を忘れてはいないことも

「・・・で、どうするの？」

ユーノはゆっくりと確認するように話しかける。ゲイルは、残っていたビールを一気に流し込み、ぽつりぽつりと話し始めた。

「このままじゃいけないのは分かってる。そのための訓練もしている」

ゲイルはゆっくりと話し始める

「でも、まだときどき夢に見る。『あの時』のことを」
「ゲイル……」

その言葉を聞いたとき、ユーノは確信した。この男は、空にかえりたいんだと。

それがわかれば自分のすべきことはただ一つ、背中を押してやることだ。

「ゲイル、これは僕の勝手な言い分だけどね」

そう前置きしてユーノは語り出す

「君は、自分で思ってるほど弱くない。確かに君は一度逃げ出したけど、逃げ出すことすらできずにいる人間だっているはずだ。君は、少し疲れたただけだ」

ゲイルは、うつむいたまま、ユーノの話を聞く

「もう、君は十分休んだ。そろそろ、また羽ばたいてもいいんじゃない？きつと、なのはも君がいつまでもそんな風になってるのは望んでないと思うよ」

『なのは』の言葉が出たところで、ゲイルの肩がピクリと反応した。そして、顔を上げゆっくりと話す

「俺は……もう一度飛べるのか？」

「それは君次第だ」

ユーノは答える。「大丈夫」とは言わない。

「俺はあいつらと同じ空を飛んでもいいのか？」

「それも君次第だ」

今度も「大丈夫」とは答えない。

ゲイルは、ふつと笑いながら言う

「ずいぶんと厳しいな。今日のユーノは」

ユーノも笑いながら答える

「たまにはね。で答えは出た？」

「ああ、行こうと思う」

その言葉を聞いて、ユーノは安心したような、寂しいような微妙な表情になる。

「そう、良かった。でも、寂しくなるね」

「言っな。俺もなんだ。だから今日は思いっきり飲もう」

そう言っつて、ゲイルは一気に注文する。おそらく、かえりは二人とも酔いつぶれているだろう。

「（はやてへの報告は明日でいいか）」

そう決めたユーノは、グラスに残っていたビールを一気に飲み干した

この後、朝方の閉店時間まで飲み明かしていた金髪の少年と緋髪の

青年がいたのは、言うまでもないことだろう。

凍った^{かぜ}緋風は、再び空を目指す

第二話 再会、独白、そして飛翔（前書き）

まだ機動六課に運営は始まっていません。

今回は、あの人が出てきます

それでは、お楽しみください

第二話 再会、独白、そして飛翔

ピピピピピ

「ん・・・ユーノ、通信だぞ」

「うん・・・」

通信の音で目を覚ましたゲイルは、隣で寝ているユーノを起こす。昨日、朝まで飲んでいた二人は、歩いて帰れる範囲にあったユーノの家の向かい、シャワーを浴びた二人は、そのまま寝てしまったようだ。ユーノが通信に対応している間に、ゲイルは時計を確認し、首にかけてある指輪に語りかける

「げ、もう昼じゃねえか・・・おはよう、グレン」

《おはようございますマスター。昨日のことは覚えておいでですか？》

「それは、もう一度空を飛ぶことを決めたことか？」

《そのとおりです。あの時、あなたが深く傷ついたことは分かっています。それでもなお、また戦場へと戻られるのですか？》

それを聞いて、ゲイルは嬉しく思った。このデバイスは、こんなにも自分のことを考えてくれているんだと

「ありがとう。でも、大丈夫だ。これから忙しくなると思うが、よろしく頼むぞ相棒^{グレン}」

《・・・わかりました。あなたのことは、私が全力でお守りいたします》

「ああ、サンキューな」

ゲイルがグレンと会話をしていると、ユーノのほうも通信が終わったようで、ゲイルのところに戻ってきた

「ああ、ゲイル、今リンディ提督から通信があつてね、なんでも、新しく君が配属される部隊の隊長が一度会いたいらしいんだ」

「ん、そうか。で、場所と時間は？」

「それが、今日の15時。あと三時間後なんだけど・・・どうする？」

「ずいぶんと急だな・・・まあ、しょうがない。場所は？」

かなり急だが、これから自分の上官になる人だ。いい関係を築いていくためにも、ここは自分が譲歩したほうがいいだろうと思い、ゲイルは行くことにした

「場所は後でグレンのほうに送っておくよ。じゃあ、もう帰るのかい？」

「ああ、さすがにこのカッコで会うわけにもいかんからな。一回帰って準備しないと」

そう言つてゲイルは帰り支度を始める。それを見ながら、ユーノは心の中で思った

「（これで彼とはしばらく会えなくなるけど・・・まあ、彼が飛んでくれるならしょうがないか）」

「よし、これで荷物は全部か・・・ユーノ？どうした、ボーっとして」

「あ、うつん、なんでもないよ。もういくの？玄関まで送るよ」

「ああ・・・ユーノ、色々ありがとな」

玄関へと向かいながら、ゲイルはおもむろに切り出した。それに対

して、ユーノは当然驚く

「いきなりどうしたんだい？」

「いや、俺が腐ってる間ずっと俺のこと心配してくれてただろ？だから、な」

理由を聞いて、ユーノは納得したような表情で口を開く

「そんなの、友達として当然のことだよ。気にしないで」

「そうか。なら、力になれることがあれば何でも言ってくれ。絶対力になる。じゃあな」

「ありがとう。行つてらっしゃい」

ドアを開けたゲイルの視界には、晴天がこれでもかと言つぐらいに広がっていた

駅に向かいしばらく歩いたところでゲイルはあることに気づいた

「あ、隊長の名前聞いてなかった・・・まあいいか。行けばわかるだろ」

《マスター、相変わらず適当ですね》

ゲイルが出て行った部屋で、ユーノはある人物と通信をつないでいた

『そうか、あいつがもう一度空を、か』

通信の向こう側の人物がいう。声からして、男性のようだ
それにユーノは答える

「うん。無限書庫に来てからも、ずっと訓練はしてたみたいだから
ね。今回のが、いいきっかけになったんじゃないかな」

『まったく、人騒がせな奴だ。7年前はいきなり前線から下がると
か言い出したと思ったら、こんどはいきなり復帰か。いったい何度
僕を驚かせれば気が済むんだ』

通信相手、クロノ・ハラオウンはあきれたような、それでいて嬉し
そうな声で言う。

「クロノ、顔が笑ってる。無理するなよ」

そんなクロノをからかうようにユーノは言って、クロノの言葉を待つ

『だが、大丈夫なのか？ゲイル自身、ふっきたわけではないんだ
ろっ』

クロノは心配そうに言う。彼の言うとおり、ゲイル自身が負った傷
はまだ癒えたわけではない。それはユーノもわかっていることだった

「そうだろうね。でも、ゲイルは自分で歩きだすことを決めたんだ。
なら、僕たちは彼を応援するだけだよ」

ユーノのその言葉を聞いて、クロノもうなずいた。

『まあ、あそこにはフェイト達もいる。どうにかなるだろう』

「そうだね。僕たちができなかったことも、きつとなのはたちならやってくれるよ」

『そう、だな・・・じゃあ、僕は任務に戻る。そろそろ休憩時間も終わりなんぞな』

「ああ。ありがとう。じゃあ」

ユーノはそう言って通信を切った。

「（そろそろついたところかな？ゲイル、新しい部隊長にあつたら驚くだろうなあ）」

ユーノは、ゲイルの驚く様子を思い浮かべながら、休日をおすごすのだった

一方、ゲイルは目的地へ到着していた

「ええっと、ここでもいいんだよな、グレン？」

《ええ、スクライア司書長から頂いたデータによれば、この建物がマスターが所属する『機動六課』のオフィスです》

グレンに確認をとって、受付のような場所で要件を伝える。すると、奥のほうからショートカットで金髪の女性が歩いてきた。なぜか陸士の制服の上から白衣を着ている

「お待たせいたしました。あなたが新しく配属されることになったゲイル・スカーレット空曹ですか？」

「はい。ええっと、あなたが部隊長の方ですか？（美人だなあ。でも、どっかであったこと・・・）」

「いいえ、私は六課では医務官を務めます。よろしく願いしますね」

そう言つてシャルは会釈する。その笑顔に、ゲイルは思わず顔を赤くした。

「あ、え、ええつと、と、ところでぶ、部隊長室はどこですか？」「《マスター、少し落ち着いてください。気持ち悪いですよ？》

自分のデバイスにまでバカにされ、少し悲しくなったのはゲイルだけの内緒である
それを見て、その女性は笑いながら

「はい、実ははやてちゃ・・・じゃなかった、部隊長から、あなたをお連れするようになされてるんです。今から案内しますけど、いいですか？」

「はい、お願いします」

そう言つて、案内された。されたのだが

「あの、何で外に向かつてるんですか？」

そう、女性はゲイルを連れて外へ出ていた

「部隊長が今外にいるんですよ。ええつと、あそこに見える広いスペースにいますので、申し訳ないんですがここからは一人で行つてもられますか？」

シャルにそう言われ、ゲイルは思わず、

「あ、はい。わかりました。ありがとうございます」

と言って一人で向かった。その後ろでは、シャルが

「頑張つてね、はやてちゃん」

と言っていたのだが、ゲイルは聞こえなかった

ゲイルが向かっているのは、訓練場だった

やがて、訓練場に着くと、一人の小柄な女性が立っていた。反対側を向いているため、ゲイルからは顔が見えない

「後ろから失礼いたします。今度、機動六課に配属されるゲイル・スカーレット空曹であります。よろしくお願いします」

女性の部隊長なんて珍しいな、と思いながら挨拶をする。すると、挨拶を返してきたのはゲイルがよく知る声だった

「久しぶりやなあ。7年ぶりか？ゲイル君」

「は？」

聞き覚えのある、独特のイントネーションの言葉に、思わず間拔けな声が出てしまった。女性は、構わず続ける

「なんや、私のこと忘れてしもうたんか？」

そう言いながら、目の前の女性が振り返るのを見ていた

ショートカットにした茶色い髪、そして、赤い髪留め

忘れるわけがない

「あ・・・あ、あ・・・」

「なんや、驚いて声も出えへんのか？」

目の前の女性は、呆れたように言う。そして、自分の所属を告げる

「機動六課部隊長、八神はやて二等陸佐や。改めてよろしゅうな、ゲイル君」

女性「八神はやて」は、自分の身分を明かす

「は、はやて、なのか？（そうだ、思い出した！さっきのシャルサンじゃなか！8年ぶりで全く気付かなかった！）」

「だからそうやってゆうつるやんか」

数瞬して、ようやく反応するゲイルだが、はやては軽く返す
それを聞いた途端、ゲイルはその場を去ろうとする

「ま、まって！」

だが、はやての一言でその動きは止まる。そのまま、はやては語りかける

「なあ、なんでいきなり私らの前からおらんくなったん？」

「・・・・・・・・」

「7年ぶりにあっても、ちゃんと会話すらしてくれへんのか？」

「・・・・・・・・」

はやての詰るような問いにも、ゲイルは答えない。いや、答えられないのだ

「私らのこと、嫌いになってもうたんか？」

「ち、違う！」

ようやく言葉を発したゲイルに、はやては満足げにほほ笑む

「なら教えてや。なんでいなくなったん？」

「・・・恐かつたんだ」

ようやく返ってきた答え。はやては一瞬何のことかわからなかったが、ゲイルの続く言葉を待つ

「『あの事件』で、初めて人が死にかけのを見た」

「自分が死ぬんが恐くなったってことか？」

はやては自分の考えを告げるが、ゲイルは首を横に振る

「そうじゃない。守れないことが、目の前で誰かが傷つくことが・
・そして何より、それでも何も変わらない空が恐かつた」

たとえ一人が死にかけたところで、世界は何一つ変わろうとしない。
それがわかってしまったから

「なるほどな」

はやてはゲイルの言うことが理解できた。彼は、やさしすぎるのだ。
だから、なにも変わらない空が恐いのだろう。

「（なら、私がやるんはひとつや）ゲイル君」

呼ばれて振り返ったゲイルの眼に映ったのは、セツトアップしたはやての姿だった

「一緒に飛ば。私が、空の気持ちよさを思い出させたる！」

そう言つて、はやては先に空へと上がる。しかし、一方でゲイルは立ち尽くしたままだった。不思議と、逃げ出そうとは思わなかった。もともと、覚悟を決めて配属を受けることを決めた。ここで飛ばなければ来た意味はないのに

「（クソ、ここまで来て、せつかくはやてまで手を差し伸べてくれるのに！）」

あと一步、その一步が踏み出せない

《バリアジャケット、セツトアップ》

そんなゲイルの胸元から、不意に声がした。それと同時に、着ていた制服がバリアジャケットへと変わる

「な、グレン？」

《あなたならできます。そのためにここへ来たんでしょう？さあ、はやてさんが空で待ってますよ》

驚きの声を上げるゲイルにグレンが諭すように語りかける。そして、ゲイルは覚悟を決める

「わかった。力を貸してくれるな？グレン」

《もちろんです》

それを聞いて、ゲイルは上をみた。もちろん、はやてしかない。
しかしゲイルは、そこに何人も人間がいるように見えた。みな、
手を差し伸べてくれている。ここで飛べなきゃ、男じゃない！

「行くぞ！」

掛け声とともに、大地をける。ふわり、と体が浮くのを感じた。し
かし、同時に『あの時』の光景がフラッシュバックする

血塗られた手、跳ねる血しぶき、体を貫く刃

それらすべてを、ゲイルは跳ねのける。俺が飛ぶのは、こんな悪夢
じゃない！

「うおおおおおお！……！」

パリン、と音を立てて、それらの光景が碎け散る。目の前に広がる
のは、青く、大きな空

そして、その先にいるのは、かけがえのない人たちの一人

「ゲイル君！」

「はやて！」

ゲイルはようやく、はやてのもとへとたどり着い、あたりを見回し
て感慨深げに言う

「俺、忘れてた」

「何をや？」

一呼吸置いて、続ける

「蒼空^{そら}つて、こんなに気持ち良かったんだな」

「・・・そうか」

二人は、しばらく空を見ていた。そして、はやてが思い出したように言った

「なあ、ゲイル君。私との約束おぼえとるか？」

「・・・ああ」

そして、二人は声を重ねて言った

「「はやて（わたし）が部隊を作ったら、なのは（ちゃん）たちと一緒に手伝う（手伝ってくれる）」」

「改めて、よろしくお願いします。八神部隊長」

「はやて、でええよ。階級も役割も、私らには関係あらへんからな」

「・・・そうだな」

凍っていた緋風^{かぜ}は、この日から少しずつとけだしてゆく

おまけ

「ところではやて？」

「なんや？」

「なんで外で待ってたんだ？普通部隊長室であいさつするだろ」

「ああ、そのことか。一応ちゃんとした理由はあるんよ？」

「なんなんだ？」

「じつはな、うちの騎士たちがな・・・」

「シヤマルさんとはさっき会ったからヴィータとシグナムさんか？」

あの二人がどうかしたか？」

「うん。その子らが言うててん」

「何をだ？」

「『主を寂しがらせたものは私たちがきっちりと教育しておきます』
つて、デバイス持つて」

「・・・・・・・・」

「さすがのゲイル君も、これ見たら逃げるやろな思ったから、外で
待ってたんや」

「・・・・・・・・転属取り消してもいい？」

「ダ・メ・や」

第二話 再会、独白、そして飛翔（後書き）

鯉「というわけで、はやてとの再会、そして久しぶりの飛翔をお送りさせていただきました。作者の鯉太郎です」

ゲ「守護騎士二人の折檻から何とか逃げしてきました、主人公のゲイル・スカーレットです。でも、なんかこうやって改めてみると恥ずかしいな」

鯉「ほんとだよこのヘタレ。お前絶対はやてがいなかったら飛べなかっただろ」

ゲ「否定できないのが辛いな・・・」

鯉「まあ、そのうち君にもかっこいい場面があるはずさ。たとえば一人じゃ飛べなくて、必死で守護騎士の折檻から逃げ回るような君にもね」

ゲ「お前、俺のこと嫌いなのか？」

鯉「そんなことはないよ。それではみなさん。感想やご指摘など、お待ちしております」

ゲ「こんな話が読みたい、この人とのエピソードが見たいなどのリクエストもお待ちしております」

鯉「次回はようやく機動六課の運営が始まります。それではお楽しみに！」

第三話 遅刻、謝罪、そして決意（前書き）

一週間ぶりの更新です。

なお、今回の話の前半では慣れないギャグ展開に挑戦してみました。つまらないかもしれませんが、話の緩急だと思ってお付き合いしていただければ幸いです。

第三話 遅刻、謝罪、そして決意

ゲイルが再び空を飛んでから数週間がたった4月某日
機動六課は、今日この日、運営を開始することとなる。

戦技教導官、およびフォワード分隊『スターズ』隊長としてこの部隊に所属する高町なのはは、結成式に参加していた。だが、今隊員たちの前に立って挨拶をしている10年来の親友である部隊長のはやてに、若干の違和感を覚えていた

『ねえなのは、はやて、なんかちよつとイライラしてない？』

『やっぱりフェイトちゃんもそう思う？なんか、私たちがあいさつに行った時からずっとだよね』

もう一人の親友で法務担当、そしてフォワード分隊『ライトニング』隊長であるフェイト・テストロッサ。ハラウンからの念話に、なのはは答えた

『そうだよね。返事も何処か上の空だったし』

ちなみに、そこに報告に来たグリフィス・ロウランがはやてのまとう空気に恐れていたのは内緒である

『だよね。あ、ところでさ、フェイトちゃん、はやてちゃんが言っていた懐かしい人って誰かわかる？』

なのはは、これ以上詮索しても無駄だと思い、話題を変えることに

した

『いいや。少なくとも、この中にはいないかな。なのは？』

『私も見つからない。誰なのかな』

フェイトも同じことを思ったのか、なのはの話題に乗っていく

一方、壇上で話しているはやてだが、見せる笑顔とは裏腹に、心の中では怒りがたちこめていた

「（全く、ゲイル君は何やつとんのや！まさか初日から遅刻かいな！）」

そう、この結成式に参加している隊員の中に、親友二人に秘密にしていた追加隊員、ゲイル・スカーレットの姿がないのだ。しかも、連絡なしというおまけ付き。さすがのはやても、これには力チンと来たようだ

「それでは、長い挨拶は嫌われるんでこの辺で（いっぺん、O・H A・N A・S H I しないかんみたいやなあ）」

あいさつを終えると同時に、黒い何かがはやてを包む。後のとあるユニゾンデバイスの証言によると「あんなにこわいはやてちゃんを見たのは初めてですう」とのことだ

「へつくしよい！うゝ、風邪か？」

《いいえ、マスターのフィジカルコンディションは万全です》

「・・・グレン、んなこたわかつてる」

《失礼いたしました。ところで、そろそろ結成式が終わるのではないですか？》

「だろうな。クソ、言い訳をする気が起きないレベルの遅刻だ」

一方そのころ、ゲイル・スカーレットは身に降りかかる危険に気づくはずもなく、バイクを飛ばしていた。道はグレンのナビゲートがあるし、時間もちゃんと計算をして出発した。なのに、なぜ未だに機動六課につかないのか。

《まさか、マスターのテクニクがここまで落ちているとは思いませんでした》

「し、仕方ねーだろ！最近時間がなくてなかなか転がせなかったんだからよ！」

答えは、ゲイルの運転テクが、グレンの想像以上に落ちていたからだ以前はやてに会いに行った時はリニアを使ったが、これからは宿泊施設での生活だ

交通の便も少し悪かったのもあり、それならと以前から所持していた大型バイクを足として使えるように隊舎においておこうと思ったのだが、それが間違いだった

《だからといって、何回右折の指示を無視してるんですか。しかも理由が「こわいから」って。昔なら、私が危険だといっても突っ込んで言つてたくせに。ここまで、左折20回に対して右折がたったの2回ですよ？今のマスターの運転からは自信や思い切りと言ったものが全く感じられません。免許取りたてのライダー並ですよ。40キロでビビってるレベルですよ？》

「もうやめろ！俺のライフはゼロだ！」

デバイスに罵倒され、悲しい気分になりながらも反論する

《全く・・・あ、次の信号を右に曲がると到着です。いいですか、絶対ですよ？必ず曲がってくださいよ？》

「グレン、それはフリか？」

《・・・・・・・・》

「すまん、俺が悪かった。だから無言はやめてくれ」

《ならちゃんと曲がってください》

今度はきちんと右折し、しばらく直進したところで六課に到着した。そして、駐車場に向かう途中で、数百メートル先に誰かが立っているのが見えた。

「なんだ？あんなところにだれか立って・・・る・・・ぞ？」

《マスター、ご愁傷様です》

先に見えていたのは、部隊長、八神はやてだった。その顔は笑っていた。だが、眼は笑っていない。そして、なぜかバリアジャケットまで展開している。

「ゆ、リターン・・・だめだ、今の俺じゃんなことできねえ！」

《マスター、諦めが肝心ですよ》

そうして、なすすべなく、はやての前で停車するゲイル。すぐにバイクから下りて、敬礼する。慌てすぎて、エンストを起こしてしまったのはご愛嬌だ。

「おはようございます！八神二佐！本日より一年間、よろしく願います！」

模範的な上官へのあいさつだった。ちゃんと時間通りに来ていればの話だが。ちなみに、今はもう正午を回っている。あいさつとしては「こんにちは」が当てはまる時間だ。そんなゲイルに、やんわりとはやては返す

「おはようさん。何で遅れたんや？理由ぐらいあるんやろ？」

これはチャンスだ、とゲイルは思った。問答無用で怒られるならどうしようもないが、聞いてくれるなら大丈夫だと思った

「はい、実は、自分の運転テクニクが落ちておりまして・・・」
「うんうん、それで？」

だが、当然それは大きな間違いだった

「右折をためらっているうちに遠回りをしてしまい時間が・・・つてあれ？はやては？」

《マスター、上です》

グレンに促され、上を見る。そこには、はやての魔法の一つ、デアボリック・エミッションが展開されていた。広域魔法だ、逃げ場はない

「は・・・ははは・・・」

「ゲイル君、少し、頭冷やそうか」

「ま、まで、まだそれははやぎゃあああああああああああ

「あああああ！！！」

なんかメタな発言をしかけたゲイルを、デアボリック・エミッショ
ンが飲みこんだ

「あれ？シグナム、今なんか揺れませんでした」

「なに、おそらくバカな男が一人折檻されただけだろう」

「？なんですか、それ」

「いや、なんでもない」

「は、はあ」

シグナムとともに廊下を歩いていたフェイトだが、どうもシグナム
の言葉は容量を得ない。そこに、館内放送が入った

『フェイト・テストロッサ・ハラウン執務官、並びに高町なのは
一等空尉、隊長室までお越しください』

「あれ、私だ。シグナム、すみません、ちょっと行ってきます」

「ああ、急ぐんだな」

フェイトが去った廊下で、シグナムはひとり呟いた

「8年ぶりの再会、か」

―部隊長室前―

「あ、フェイトちゃん」

「なのは」

部屋の前で二人は合流した

「でも、いきなり呼び出すなんて、どうしたんだろうね、はやて」
「そうだね。これから、フォワード陣の訓練だったのに」

そう言いながら、はやてに許可をもらい、二人は部屋に入る

「おお、二人ともいきなりごめんなあ。でも、どうしてもあつてほしい人がいたんや」

「あつてほしい人？それって、前言ってた私たちが驚くって人？」
「そうや。と、言うわけで、自己紹介しいや」

はやてがなのはの質問に答え、合図をすると二人が入ってきたのは違うドアが開く。そこにいたのは、8年前、二人の前から姿を消した少年だった

「え、ゲイル……くん？」

「ああ。久しぶりだな、なのは、フェイト」

なのはの言葉に、相槌を打つゲイル
あれから8年、背格好は変わっても、その緋色の瞳と髪は、決して間違えることはない

「今まで……今までどこに行ってたの！連絡もくれないし……心配したんだよ？」

フェイトが泣きそうになりながら問いかける。その涙は、無事を確認した安堵か、再会した感動か。それはフェイト本人にもわからない

「無限書庫で司書やってた。なのは、ユーノがよろしくだよ」

「え、あ、うん」

フェイトの問いに答え、ユーノの伝言を伝えると、一気に無音になる。はやては、ただの一言も発することなく成り行きを見守る。

「（さあ、こっからやで、ゲイル君）」

そんなはやての心の声を通じたわけではないのだろうが、ゲイルはゆっくりと話し始めた

「なのは」

「え、な、なにかな？」

いきなり呼ばれ、驚くのはだが、次のゲイルの行動にもっと驚くことになる

「すまなかった」

そう言つて、なのはに対して頭を下げるゲイル

「え、な、何してるのゲイル君！？い、いきなり謝られてもわけわかんないよ！」

当然、なのははいきなりの展開にたじろぐ

そんななのはをしり目に、ゲイルは語り始める

「あの時・・・お前が墜ちた時、俺は何もしてやれなかった。それどころか、ビビってそれ以来飛ぶことをやめちゃった」

「「「・・・」」」

三人は、黙ってゲイルの言葉を待つ

「本当なら、もう二度とみんなと会うつもりはなかった」

そこで、三人は少し悲しそうな顔になった。それでも、ゲイルの独白は止まらない

「でも、ユーノやリンディさんがチャンスくれた。償うチャンスを。だから・・・」

そこで言葉を切り、大きく息を吸い込む。そして、告げる

「もう一度、みんなと同じ空を飛ばせてくれ」

それは、過去の償いと未来への決意

「ゲイル君」

それを聞いたなのは、ゲイルに告げる

「また、よろしくね」

ただ一言

だが、その一言で、ゲイルには十分だった。そして、ゲイルはさらなる決意をなのはに告げる

「ああ、もう二度と、お前を墜とさせはしない。俺が必ず守ってやる」

「ふえ!？」

それを聞いた瞬間、なのはの顔は真っ赤になる

「（ええっと、今ゲイル君なんて言った？必ず守るって言ったよね!？これってもしかして告白!？わ、わ、どうしよ、どうししよう!？）」

目の前で真っ赤になり、混乱しているのはを見て、同じく焦るゲイル

「なのは、どうした？」

「ひゃい!？」

「フェイト、どうすればいいんだ・・・って、フェイト、どうかしたのか」

見れば、若干不機嫌そうにしているフェイトがいた

「・・・・・・ないの？」

「はい？」

「私は守ってくれないの？って聞いたの！私だって、いっぱい心配したのに・・・」

「・・・あゝ」

そう呻いて、助けを求めるようにはやてを見る。が、はやてはにやにやしながら追い打ちをかけてくる

「そっぴゃ、私の時も何もゆつてくれんかったなあ」

「はやてまで・・・あゝ、もう！」

ゲイルはやけになって叫ぶ

「なのは！」

「ひゃい！？」

「フェイト！」

「な、なに？」

「はやて！」

「ん？」

「それから、六課の他の隊員も！」

「みんな、俺が守ってやる！！！」

機動六課に一陣の^{かせ}緋風が強く駆け抜けた

おまけ

「でも、これで同級生が四人になったね」

「何言ってるんだ？なのは」

「え？」

「俺は21だ。お前らより2つ年上だぞ」

「え〜〜〜!？」

「二人とも驚きすぎやで。（まあ、私もこないだ書類で初めて知ったんやけどな）」

「だ、だって」

「8年前は、私たちよりも背低かったし・・・」

「でも呼び捨てにするから同じ年だと思ってたんだけど・・・」

「・・・なあ、グレン。俺、こんなときどんな顔すればいいのかわからない」

《笑えばいいと思うよ》

「笑えるか！」

第三話 遅刻、謝罪、そして決意（後書き）

鯉「バイクで右折できないとかw このヘタレ」

ゲ「やかましい！お前こそ、ついこないだまでできるだけ左折だけで目的地まで着こうとしてたくせに！」

鯉「な、何のことかな？（・・）まあ、そんなことより・・・この旗男が」

ゲ「旗男？何のことだ？」

鯉「こいつ、本気で気づいてねえ。まあそう書いたのはこっちなんだけど」

ゲ「？ 変な作者だな。まあいいや。そう言えば、お前神埼はやて先生のところの企画に参加したんだって？」

鯉「そうだよ。他の先生の企画に参加するなんて初めてだから、すげえドキドキしてる」

ゲ「神埼先生が書きやすいように、早く話を進めろよ」

鯉「わかってるよ。それでは皆さん、お付き合いいただきありがとうございます」

ゲ「ご意見、ご感想、ご指摘などありましたらぜひお願いします」

鯉「あと、読んでみたいエピソードなんてのも募集しています」

ゲ・鯉「それでは、次回の更新でお会いしましょう」

第四話 新人、名前、そして訓練（前書き）

今回は諸事情によりあとがきは省略させていただきます

第四話 新人、名前、そして訓練

部隊長室でフェイト、なのはと8年ぶりの再会を済ませたゲイルは、なのはとともに訓練スペースへと向かった。もちろん、前線メンバーたちに会うためである

「はやてから少しは聞いたが、前線メンバーは新人たちで固めてるんだって？」

ゲイルは、事前に聞いていた情報の確認の意もこめてなのはに聞く。

「そうだよ。私の部隊、スターズは二人とも救助部隊の出身で、フェイトちゃんのライトニングはふたりともフェイトちゃんの保護児童の子だよ」

「保護児童、か」

ライトニングの説明のところでゲイルの表情が少し暗くなる。それを、なのはは見逃さなかった

「どうしたの？ゲイル君」

「いや、10歳の時から戦ってる俺が言うのも変だけどさ、やつぱり子供が戦うのはな」

ゲイルやなのは、ここにはいないがフェイトやはやては、19歳にして入局10年目という、若くしてベテランでもある。そんな彼らだからこそ、幼くして戦場に立つことの厳しさを知っている

「そうなんだけどね、フェイトちゃんから聞いた話だと、二人とも

どうしてもって聞かなかつたんだって。そういう頑固なところはフ
イトちゃんに似ちゃったみたい。それに、必ず生きて帰ってこれ
るようにするのが、私の仕事だよ」

少し困ったように笑いながらも、しっかりと決意を込めなのは告
げる。

「そうか。まあ、俺も一緒に戦うんだ。誰ひとり死なせねえよ」

「うん、頼りにしてるよ、ゲイル君」

そう言ってなのはがほほ笑む。その微笑みに、ゲイルがすこしドキ
つとしたのは秘密だ

そうこうしているうちに訓練スペースについたようで、反対方向か
ら4人の人影が走ってきた。

「あ、なのはさん！」

そのうちの一人、青い髪の少女がなのはを呼んだ。それに続いて他
の三人もなのはを見るが、その隣いるゲイルをみて不審な顔をして
いる。おおかた、結成式にいなかったゲイルを見て、「誰この人？」
とも思っているのだろう。

「お待たせ。もうアップはすんでるよね」

「はい。ところで、そちらの方は……」

「ああ、みんなは知らないよね。ほら、ゲイル君、自己紹介しなき
や」

おそらく最年長であろうオレンジの髪をツインテールにした少女が
四人を代表してなのはに問いかけ、それを聞いたなのはは、ゲイル

に自己紹介をするように促す

「ああ。ええっと、機動六課でみんなと一緒にフォワードとして戦うことになる、ゲイルスカーレット空曹だ。よろしくな」

「ほら、みんなも自己紹介しなきゃ」

こちらもまたなのはに促されて自己紹介をする

「ティアナ・ランスター二等陸士です」

「スバル・ナカジマ二等陸士です」

「エリオ・モンディアル三等陸士です」

「キャロ・ル・ルシエ三等陸士です」

全員分の自己紹介を聞いたところで、ゲイルがスバルに話しかけた

「ナカジマつつと、108のゲンヤ・ナカジマ三佐の娘か？」

「え、父さ・・・じゃなかった、父をご存じなんですか？」

予想外に父の名を出され、少し驚きながらもゲイルに聞き返す

「ああ、ちよつと前まで無限書庫に勤務してたからな。何回か調査資料を提供したことがあったからな。そうか、お前がやんちゃ姉妹の妹のスバルか」

「や、やんちゃ姉妹!？」

しばらくゲイルの説明を聞いていたスバルだったが、その発言に反応してしまった。そんなスバルをしり目に、ゲイルは続ける

「ナカジマ三佐、愚痴ってたぞ?『二人とも年頃なのに、食い気ばっかで男の話なんざこれっぽっちもききゃしねえ』って」

「う、う〜〜」

初めて会う相手に、自分のことを知られていた気恥ずかしさで、もはや唸るしかできないスバル。そんなスバルを見ながら、一同は少し笑いに包まれた

「う、ティア。スカーレット空曹がひどいよ」

「こ、こらバカスバル！し、失礼しました、スカーレット空曹」

抱きついてきたスバルの階級を無視した発言に、まじめな性格なのだろう、ティアナは姿勢を正してゲイルに謝罪する。だが、ゲイルは特に気にしてはいないようだ

「ああ、そんな階級なんて気にすんな。俺のことはゲイルでいい。

あんまり好きじゃないんだ、この階級ってやつは」

「で、ですが・・・」

そう言われても、ティアナは切りかえれないようだ。まあ、いきなりあつた人間にそう言われても、困ってしまうだろう

「まあ、最初から言われたって難しいと思うがな。まあ、よろしく頼むわ」

「・・・はい、善処します。スカーレット空曹」

「ティアナ・・・言われたそばからそれは少しひどいと思うよ」

「え？・・・あ！」

なのはに言われてティアナがゲイルを見ると、そこにはみんなに背をむけ『どよ〜ん』という効果音が似合いそうな雰囲気で三角座りをしているゲイルがいた

「いや、まあ、初対面であんな言い方した俺が悪いんだよ？わかってるよ？でもさ、『善処します』っていった次の瞬間にそれはないんじゃないかい？さすがの俺も心が折れちゃいそうだよ・・・」

イイ感じに精神にダメージを負っている。ティアナは慌ててフォロ―する

「す、すみません！つい癖で・・・ええっと、じよ、上官をそんな風に呼ぶわけには・・・」

「さっきなのはのことは『なのはさん』って呼んでたくせに・・・」

「わ、わかりました、ちゃんとゲイルさんって呼びますから！機嫌直してください！スカーレット空曹！・・・あ」

呼ぶと言った端から言い間違えたことに気がついたティアナ。それをきいたゲイルは、ゆっくりと立ち上がり、

「ちょっと飛びこんでくる」

いきなり物騒なことを言いだした

「「「「どこに?!」「」「」」」」

いきなり物騒なことを言いだした

その言葉に、フォワード陣はもちろん、それまでなりゆきをゆつくりと見守っていたなのはさえ慌てて止めた

「知ってるか？海の水つてしょっぱいんだぜ・・・」

「いや、みんな知ってるから!!て言うか、戻ってきて!!」

あやつく海に飛び込みかけていたゲイルを止めたのは、ティアナが

ようやく『ゲイルさん』と呼べるようになってからだった。その後
に話しかけられたエリオとキャラが、当然のように『ゲイルさん』
と呼んだのは言うまでもないだろう

「そして今、俺はなのはとあの後來たデバイスマスターのシャリオ・
フィニーノ一等陸士と一緒に新人たちの訓練を見ている」
「なのはさん、ゲイルさん、誰に話してるんですか？」
「さあ？」

ゲイルの発言は置いておくとして、三人は今、新人たちの訓練を見
ている

すると、不意になのはが口を開いた

「そういえば、ゲイル君、さっきはありがとね」

「何のことだ？」

「もう、とぼけないでよ。わざとでしょ？あんなオーバーアクショ
ンとって」

「なんだ、ばれてたのか」

なのはには、ゲイルの先ほどの態度がわざとであることを見抜いて

いたのだ。まあ、冷静に考えれば、部下に名前で呼ばれなかった程度であなる21歳など、あり得ないことだ

「スバルはともかく、他の三人は管理局のことをよく思っていないだろうからな。おまえやフェイト見たいに、以前から面識があるわけじゃないからな」

「どういうこと？」

ゲイルの言うことがなのはには理解できず、聞き返す

「俺は無限書庫にいたんだぞ？ランスター、モンディアル、ル・ルシエ・・・どれも何度か聞いた名前だ。おもに悪い方向でな」
「そう、なんだ・・・」

確かに、無限書庫にいれば事件の関係などで聞いたことはあるだろう。そしてそれは、彼らがここにいる経緯を知っているということだ

「ねえゲイル君。その、あの子たちのこと、あんまり嫌わないであげてね？」

なのはの心配。それはゲイルが新人たちに嫌悪感を示すことだったが、その心配は杞憂に終わることになる

「なにくだらないこと言ってたんだ？」

「へ？」

予想外の言葉に、なのはは思わず間抜けな声をあげてしまう
そんなのはをしり目に、ゲイルは続ける

「いいか、たとえば人がどう生まれ、どう育てられようと俺には関係

ない。大事な今は今だ。俺と会った時のあいつらがどんな奴なのか、それが一番大事なことだ」

「・・・そっか、そうだよな」

ゲイルの言葉に、なのはは納得してしまう。彼女自身、自分の親友にたいして全く偏見を持っていない。それと同じことなのだろう、となのはは思った

「私はゲイル君のそういうところ好きだな」

なのはは笑顔でゲイルにそういうと、ゲイルの顔が一気に顔が赤くなった

「え？ああ、そうか、あ、ありがとな／／／」

「え？・・・！／／／」

顔を赤くしてそっぽを向いているゲイルを見て、なのはは自分が言った内容を思い出し、こっちもまた顔を赤くしている。まあ、なのはに関しては自業自得なのだが

「（・・・お二人とも、私がいること完璧に忘れてる・・・）あ、あのー、フォワードたちの訓練見ていなくていいんですか？」

甘い空気に耐えられず、思わず口を挟んでしまったシャーリーだったが、二人にとってそれは救いの神だった

「そ、そうだな！い、今は訓練中だからな！！ちゃんと見とかなないとな！」

「そ、そうだよな！それに、ゲイル君はこれからシュミレーション

やるからちゃんと見とかないとね！」

二人とも、どうにか体裁を立て直そうとしていた。そして、その中でゲイルは予想外の言葉を耳にした

「・・・え、俺もやんの？」

「うん、そうだよ」

そう言ったなのは顔は、さっきと同じように笑顔なのだが、ゲイルにはその顔は悪魔の笑みに見えたようだ

緋風^{かぜ}は、一瞬行先を見失った

第五話 模擬戦、才能、そして夜の相手？（前書き）

ずっと模擬戦のターン！な第5話です

はやての特別編がユニークもP.Vも伸びず、若干後悔している作者です

本編も番外編も、お楽しみいただけたら幸いです

第五話 模擬戦、才能、そして夜の相手？

「で、どうしてこうなった？」

「にゃ、にゃははは・・・」

ゲイルの問いに、なのはは乾いた笑いで答えるしかないのだった。彼女自身、今の状況についていけないのだから

「はあ・・・」

それはゲイルにもわかってのことなので、ため息をついて目の前の女性、なぜかバリアジャケットを展開し剣を構えているシグナムに視線を向けた。しかもなぜか心底楽しそうに笑っている

いったいなぜこんな状況になっているのか。それは、ティアナたちが指定された数のガジェットを撃破し、さあ次はゲイルの番、となった時までさかのぼる

「さあ、次はゲイル君の番だよ？」

フォワード陣を迎え入れたなのはは、ゲイルに言う。もう逃げられない。そう悟ったゲイルは、仕方なく準備をする

「はあ、わかったよ。で、機数は何機だ？」

「うん、数は新人たちの倍の「まで、高町」シグナムさん？」

なのはの言葉を遮ったのは、なぜかバリアジャケットを展開し殺ル気満々（誤字に非ず）のシグナムだった

「し、シグナムさん？あの、なぜバリアジャケットを・・・？」

ゲイルが不安をバリバリに感じながらも一抹の希望を込めてシグナムに聞くも、

「高町、こいつの訓練だが・・・」

華麗にスルーされる

「私が相手になろう」

その時のシグナの表情は、なのはが首を横に振ることは決して許さないものだった

そして、時間は現在に戻る。

ゲイルは、対峙しているシグナムに聞く

「で、どうしていきなり模擬戦なんですか？シグナムさん」

さすがに、理由も聞かないまま戦わされるのは納得がいかないのだろう。それに対して、シグナムが不敵に笑いながら答える

「スカーレット、こんな話を知っているか？」

そう前置きして、シグナムが話し始める

「あるところに、名の知れた登山家の男がいた。その男はいくつもの山に登った。それでも、飽きることなく、次の山に登る」

「・・・・・・」

ゲイルはその話を黙って聞いている。邪魔してはいけない。そう思っていた。それは。モニターで見ているのはやスバルたちも同じだった

「ある日、その男を訪ねてきた男性が聞いた。『なぜ山に登るのか？』と。そして、男はこう答えたそうだ・・・『そこに山があるからだ』と!!」

「なのは！この人ただのバトルマニアだ！」

シグナムの話を真面目に聞いたことを後悔しながらゲイルは叫ぶ。それに対するなのはの反応は

「あれ、ゲイル君知らなかったの？」

というものだった。後ろでは、フォワード新人たちも苦笑を浮かべている

「はあ・・・もういいよ。さあ、早く始めよう」

戦闘を前にして、ゲイルは大きなダメージを負ってしまった（精神的な意味で）

さすがにかわいそうになったのか、シグナムが声をかける

「しっかりしろスカーレット。そうだ、一つ面白い賭けをしよう」
「賭け、ですか？」

シグナムさんって賭けとかする人だったかな、と思いながらゲイルが聞き返す

「そうだ。負けたほうは勝ったほうのことを一つ聞く、ということはどうだ？」

「なんでも」のところでゲイルがピクツと反応した

「な、なんでも、ですか？」

「ああ、なんでも、だ」

それを聞いてシグナムを見る。ポニーテールにされた艶やかな長い髪、性格を表したような切れ長の目、そして、ゲイルの見た女性の中でもトップクラスのプロポーション

「・・・・・・・・ブハ！！」

いきなり鼻血を吹き出して倒れるゲイル。それを見て、大体察しのついたシグナムが、顔を赤くしながら叫ぶ

「き、貴様！何を想像している！ええいその根性叩き直してやる！早くデバイスを展開しろ！」

「は、はい！グレン、セットアップだ！早くしないとマジで斬られる！」

《All right・Stand by ready・Set up》

今にも斬りかかってきそうなシグナムを前に、ようやくゲイルはバリジャケットを展開する

一般の管理局員と同じデザインだが、デバイスは違っていた

日本刀の形をした刀剣型デバイスは鞘に納められた状態で左腰に装着され、左腕部に金属製の銀色の籠手が装着されている

「それは貴様のデバイスか。私に剣で挑むとは、見上げた根性だ」

「いや、まあ、これが俺の基本的な戦闘スタイルなので・・・」

「そうか。なら・・・行くぞ！」

シグナムの言葉を皮切りに、戦闘が始まった

まず仕掛けてきたのはシグナムだった。まっすぐこちらに接近してくる。が、そのスピードはかなりのものである

「はあ！」

「く！」

間合いに入り、振り下ろされた剣、炎の魔剣レヴァンティンをゲイルは抜刀した日本刀型のグレンで受け止める。そのまま弾き、一度距離をとる

「ふ、さすがに今のでは決められないか」

「そりゃそうですよ。さすがにこれで終わっちゃ、新人たちの手前、恰好がつきませんからね！」

そういいながら今度はゲイルから距離を詰める。まずは袈裟切り。これは簡単に見切られ、交わされてしまう。返す刀で左切り上げ、これも躲される

「いい太刀筋だ。戦場から離れても鍛錬は怠らなかったようだな」
「当たり前ですよ。いつかは戻るつもりでしたからね！」

逆袈裟、唐竹、右薙ぎ左薙ぎ、突き

絶え間なく繰り出される剣撃も、すべて躲され、弾かれ、受け止められる
逆に

「そこ！」
「グッ！」

わずかな隙について繰り出されるシグナムの攻撃は、的確にゲイルを襲う。鞘まで使ってなんとか弾くものの、このままではジリ貧である

攻めているほうが攻められている

そんな斬りあい、もうしばらく続く

モニタールーム

「うわ、すごい、シグナム副隊長と切り結んでる」

エリオの言葉に、だれもすぐには反応できなかった
空戦S-で、管理局でも名うての騎士であるシグナムと空戦B、そ
れも7年のブランクがあるゲイルが切り結んでいる

その光景は、まさに圧巻だった。

「でも、見た目ほど副隊長とスカ・・・ゲイルさんの力は拮抗して
ない」

その中で、ティアナは冷静に戦況を見極めていた

「へえ。どうしてそう思うのかな？」

なのはの問いに、ティアナは答える

「はい。一見ゲイルさんのほうが手数が多くて圧倒してるように見えますけど、とおっている攻撃は全くありません。でも、シグナム副隊長の攻撃は的確にゲイルさんをとらえてる。今は何とか防いでますけど、あれでは勝てないと思います」

的確に戦況を見ているティアナに、なのはは満足したように答える

「正解だよティアナ。今のゲイル君は、『倒すため』に攻撃してるんじゃないよ。攻撃されない』ために攻撃してるんだよ」

「なるほど」

エリオとキャラは納得がいったようにうなずいたが、一人理解できていない少女がいた

「ええっと、ゲイルさんは攻撃が多くて、それは攻撃されないために攻撃がシグナム副隊長で・・・？」

「スバル、アンタ、わかってないなら素直に言いなさい」

モニタールームが笑いに包まれる

「でもね」

そのなか、なのはだけは冷静に告げた

「ゲイル君もシグナムさんも、まだまだ本気は出してないんだよ？」

「……え？」「……」

「うわ?!」

シグナムの攻撃を何とかかわし、そのままゲイルは距離をとる。小休止だ

ここまでやって十分に分かった。このままやっても、勝ち目は無い

この攻防で、結構なダメージを負ってしまった

「どうした? もう終わりか?」

シグナムの挑発ともとれるようなセリフに、ゲイルは冷静に返す

「まだまだ、こっちには奥の手だってあるんですよ!」

そう言つて、ゲイルはいきなり刀を腰の鞘に納めた。同時に籠手からカートリッジが2発ロードされ、ゲイルの体が魔力光である緋色に包まれる。そして、左手で鞘を持ち、右手を柄に添えてかまえる。

「(抜刀術だと? この距離で?)」

抜刀術

鞘走りを使い剣速を上げることで、一撃の威力を高める技だ。だが、シグナムとゲイルの距離は5メートルほど。刀の届く間合いではない。何か来る。そう構えるシグナムだが、不意に吹いた突風でバランスを崩してしまった。その隙をゲイルは逃さない

「風刃一閃！」

一気に振りぬいた日本刀から、斬撃に魔力エネルギーを付加した衝撃は打ち出され、シグナムを襲う。すきを突かれたシグナムは、モロにくらってしまい、ビルにたたきつけられた。その衝撃で砂埃が舞い、視界を追う

「し、シグナム副隊長が！」

スバルがあげた驚きの声に、なのはは丁寧に応えた

「今のゲイル君の能力の一つ、“風の魔力変換資質”だよ」
「風、ですか？」

聞き返したのはティアナだった。そして続ける

「炎や雷、氷なんていうのは聞いたことがありますけど、風の変換資質なんてきいたこともありませんよ？」

「うん、私もゲイル君しか知らないかな」

なのははあつさりと認めてしまった

「たぶん、管理局にいる魔道士の中でも、一人だけなんじゃないかな？」

魔力変換資質は、それを持っているというだけでかなりレアな存在だ
その中でも、たった一人しか持たない力となると、それだけで才能
である。しかも、見たところ完璧に使いこなしているようだ

「才能、か」

つぶやいたティアナの言葉は、この場の誰にも届くことはなかった

「・・・やったと思うか？」

《いいえ、あれで倒せるのなら、ヴォルケンリッターの名折れです》
「だろうな」

ゲイルの問いに、冷静に返すグレン。問い、と言っても、ゲイル自身緊張を解いていない

風刃一閃は、ゲイルの能力である“風の魔力変換資質”を使ったものである。突風で相手の動きを奪い、斬撃を飛ばす。この形態のグレンの得意技である

手ごたえはあったものの、倒せていない。ここからが本番だそう思ったとき、砂塵の向こうから機械的な音声が響いた

「Schlange form」

直後、砂塵を突き破り視界を覆ったのは、連結刃となったレヴァンティンだった

「連結刃か！厄介な！」

叫びながらも、何とかかわすゲイル。だが、躲した先にもすでに刃が迫っている。何とか受け止め、視線をシグナムに向けると、楽しそうに笑っていた

「そうでなくてはな！面白くなってきたぞ！ゲイル・スカーレット！」

「なんか火がついてる?!」

《マスター、後ろです!》

愚痴を言いながらも、空に上がり3次元の動きなんとか躲していく。攻撃できていたさつきまでとは違い、全く手が出なくなってしまう。近づけないのだからしょうがない。

「クソ、グレン、バレットだ！」

《了解しました。モード2バレット、展開します》

ゲイルの命令に応じたグレンが、その形を変える。現れたのは、ハンドガンタイプの2丁拳銃だった

「可変型か！だが、その形態で先ほどの一撃以上の威力が出せるのか？！」

シグナムの言うとおり、この形態、バレットでは高威力は出せない。だが、だからと言って方法がないわけではない

「ウィンドバレット！」

ゲイルの掛け声で、周囲に緋色の魔力弾がいくつも生成される。すべてが風をまとっている

「一発でだめなら数を打ち込むだけだ！ファイア！」

一気に放たれた弾丸は、全方位から進み、シグナムを囲むように打ち落とそうとする。だが、

「甘い！」

その全てはシュランゲの連結刃に阻まれてしまった。だが、それこ

そがゲイルの狙いだっ

破裂したスフィアが、風を生み出した。ランダムに多方向から吹く風は、シュランゲの動きをシグナムから完全に奪い取っていた

一瞬、シグナムを守るものがなくなる。その隙を、ゲイルは見逃さなかった

一気にシグナムの懐にもぐりこみ、武器を振り上げる。両手で握っているのは、拳銃でも刀でもない、ずっしりとしたなハンマーだった

《モード3、ブレイカー展開》

「うおおおりゃああああ！！！！！！」

これで決める、とゲイルが大振りに振り上げる。だが、それが致命的だった。

「がっ！？」

直後、側頭部に衝撃が走った。ゲイルは、意識が遠のいていくのを感じながらも、シグナムを見る。左手には、今まで全く使わなかったために失念していた、鞘が握られていた。それを確認した後、ゲイルの意識は闇へ落ちて行った

『まったく、シグナムさんも手加減してくださいよ・・・』

『す、済まない高町。謝るからレイジングハートをしまつて眼にハイライトを戻してくれ』

ゲイルが意識をぼんやりと取り戻したとき聞こえたのは、なのはの冷たい声とシグナムの本気で謝っている声だった

「うゝん・・・」

「あ、なのはさん、ゲイルさんが目を覚ましたみたいですよ！」

スバルの声が響いたところで、ゲイルは完全に意識を取り戻したようだ

「ゲイル君、大丈夫？」

「いてて、ああ、大丈夫だよ」

なのはに心配されるが、どうやら大事には至らなかったようだ

「よかったあ」

「スカーレット。大丈夫か？」

シグナムにまで心配されてしまうゲイルだった。横目でなのはの顔をうかがっているのは気のせいだ。きっとそうだ

「もう大丈夫ですよ。それにしても・・・」

そこで言葉を切ってフォワード陣を見て、ため息をついた

「かつこ悪いとこ見せちまったなあ」

ゲイルはそういうが、新人たちはねぎらいの声をあげた

「そんなことないですよ！」

「そうですね！シグナム副隊長とあれだけ戦えるなんてすごいですよ！」

「ガンナーの動きなんて、参考にしたいくらいです」

「お？いがいと高評価？」

「「「当たり前ですよ！」「」「」」

尊敬のまなざしを受けながら新人たちと話していると、不意にシグナムとの「賭け」をゲイルは思い出した

「あ、シグナムさん」

「ど、どうしたんだ？」

なぜかどもってしまいうシグナム。ニコニコなのは顔をうかがっているのは気のせいだ

「賭け、どうしますか？なんでも言うこと聞きますよ？夜の相手でもしますか？」

「「「「「な！？」」「」「」」

キヤロを除いたその一言にその場にいた全員が反応した

“夜の相手”の意味が分からないほど子供ではない。ゲイルはまだまだ続ける

「俺も初めてなんで至らないところあると思いますが……」

そんなゲイルにシグナムがあわてて反論する

「い、いや、夜は私は・・・」

「え？ま、まさか今から！？シグナムさん、さすがにそれは「ゲイル君？」・・・」

そこまで言っただけ振り返ったゲイルの眼には、なのはが写っていた。瞳にハイライトなし、バリアジャケット展開済み、収束完了。まさに全力全壊だ

「ス、スカーレット！何とかしろ！」

シグナムが何とかしようとするが、当のゲイルはあきらめの境地に達していた

「いや、ああなったのは止められません。ギャグパート補正にすべてをかけましょう」

ゲイルのその言葉を最後に、訓練スペースは桃色の魔力に包まれた

緋風^{かせ}は、吹き続けられるか？

第五話 模擬戦、才能、そして夜の相手？（後書き）

鯉「お久しぶりでございます」

フェ「あとがきでは初めまして、フェイトです」

鯉「あの、フェイトさん、その血のついたバルディッシュは・・・」

フェ「なんか言っただ？」

鯉「いいえ、なんでもありません。さて、ようやく主人公の能力とデバイスが明らかになりました」

フェ「可変型か。しかも、私のバルディッシュよりも複雑な変形だね」

鯉「全く別物になってるからね。まあ、そこは魔法ってことで！」

フェ「魔法って言ったらなんでもありじゃないんだよ。それから本編の内容、もしゲイルが勝ってたらどうなったの？」

鯉「聞きたい？ノクターンのものになっちゃうけど？」

フェ「聞きた・・・くないよ。それに、だれも読みたくないと思う」

鯉「そうだよな。じゃあ、今日はこの辺で」

フェ「感想、ご指摘、リクエストなんかも待ってます。よろしくお願ひします」

鯉「それでは次回の更新で」

フェ「じゃあ、私は次はシグナムとお話ししてくるね」

主人公設定（前書き）

オリキャラの設定です

今後も、随時追加していきます

主人公設定

名前：ゲイル・スカーレット

年齢：21歳

身長：180？

術式：近代ベル方式

魔力光：緋色

魔導師ランク：空戦B

魔力変換資質：風

レアスキル：強制融合
フォースユニゾン

コールサイン：ハリケン01

資格：普通自動車、大型自動二輪免許、無限書庫司書資格

CV：森久保祥太郎

長すぎず、短すぎない緋色の髪と同色の瞳が特徴の青年。身長は大きい、あまり鍛えていない。

遊撃的な戦闘スタイルで、戦闘中に穴があいた所をカバーするのが主な役割。また、一人独立して行動することもある

腕はかなりのもので、管理局では、将来を有望されていた魔導師だったが、ある事件をきっかけに表舞台から姿を消す。

なのはやフェイト、はやてとはアースラで知り合っており、それぞれが独立してからも交友はしばらく続いていた

フォワード陣との面識はない

気楽で自由な性格で、はやてとは気が合う。休みの日には、一人で

ふらつと出かけることもある。隊長陣を含めたフォワード陣では最年長であり、主に『見守る』立場でいようとしている。

と本人は思っているが、実際は苦勞人キャラで、いろいろ不運が続く。あと、メンタル的に傷つきやすい

デバイスについて

名前：グレン

タイプ：男性型インテリジェントデバイス

ゲイルの戦い方にあわせて、様々な形態をとる。

モード1：ソード

日本刀を模した刀。近接戦闘を行うときの基本形態でもある

モード2：バレット

射撃戦用の銃形態。中距離戦用

任意でツインとシングルの使い分けが可能。

クロスミラージュのような拳銃型で、取り回しに優れている。

モード3：ブレイカー

大きく、重量もあるハンマー。一撃の威力が高いが、高速戦闘には向かない

使用技

ゲイルの使う技は、風の魔力変換資質による属性付加がされているが、ディバインバスターなどの普通の魔法も使用可能。ここでは、ゲイルオリジナルのものだけ記載する

・風刃一閃

突風により相手の動きを奪い、抜刀術によって生まれる斬撃を変換資質によって風の刃を形成し飛ばす技。射程は短くスバルのディバインバスターとほぼ同等。モード1の時のみ使用

・ウィンドバレット

誘導型の射撃魔法。着弾したり撃墜されるなど、弾丸が爆発したときに風を起こし、相手の動きや武器を封じることができこちらモード2の時しか使えない

第六話 秘密、訓練、そしてイメージ（前書き）

今回は少し短めになっております。話の進行度としてはファーストアラートの前半となっております。なお、あとがきにてアンケートがありますのでよろしければご参加ください。感想やご指摘なんかも随時受け付けております

それでは、どうぞ！

第六話 秘密、訓練、そしてイメージ

六課の結成式から二週間がたった

この二週間は大きな事件もなく、新人フォワードたちはなのはの指導のもとで訓練を、指揮管制など、バックアップが主な仕事のロングアーチスタッフは主に部隊の運営にかかわる仕事をしていた。そのほかの部隊員も、皆それぞれの仕事をこなしていた。

そして、ある日の早朝、新人たちの訓練を見守る影が二つあった

「ほお、新人たち、よく走るねえ」

「そうだな。なのはの教導は結構キツイのに、よく頑張ってる」

ゲイルとヴィータである。二人は今、教導に巻き込まれないように少し離れてみていた

「いや、若いっていいな。俺、朝からあんなに走れねえよ。年取るのは嫌だね」

「何ジジくせえこと言ってるんだよ。オメエもまだまだ若いだろうが」

ゲイルの冗談とも本気とも取れないような言葉に、ヴィータが呆れたようにツツコミを入れる

確かに、機動六課の中では年長者であるゲイルだが、管理局全体で見ればまだまだ若いほうである。

「まあ、確かにこの部隊の中じゃ最年長だが…」

「? どうかしたか?」

「い、いや何でもねえ。ほ、ほら、ちょうどシュート・イベーシヨ

ンが始まるみてえだ。いつもアドバイスを頼まれるんだからちゃんと見とけよ」

「お、おう」

ヴィータの返事に釈然としないものを感じながらも、訓練へと目を向けるのだった

S i d e ヴィータ

あ、あぶねえ、危うく最年長はヴォルケンリッター《あたしら》だ
って言いそうになっちまった…

確か、あたしはやてがあいつと初めて会ったのは、管理局に入っ
てすぐ、確かアースラにいたころだ。あのころは事件が解決してす
ぐってこともあったし、むやみにあたしたちのことを詮索してほし
くなくて夜天の書のこととかは言っていないはずだ。それ以降、しば
らく会っていないからまだ知らないだろう。

あいつがそういう人間ではないっていうことはもちろんわかってる。
でも、この10年間、はやてのことをそういう目で見ないやつはい
なかった。『犯罪者』とか『歩くロストロギア』とか陰口をたたく
やつは今でも多い。もし、あいつがそんなことを言い出したら…

「（はやての悲しむ顔は見たくねえ）」

あたしたちにとつても、はやてにとつても、ゲイルは大切な仲間だ。
今の関係を壊す必要なんて、ないんだ

— Side ヴィータ out

「さて、今日の朝の訓練はこれで終わりです」

「「「「お、お疲れ様でした」「」「」」」」

なのはの訓練が終わったところを見計らって、ゲイルは五人のところに
へと向かった。訓練を第三者の視点から見ての問題点を挙げる。
それがゲイルの仕事だった

「おゝ、五人ともお疲れ」

「あ、ゲイルさんだ」

「おはようございます、ゲイルさん」

「「おはようございます」「」」

スバルがまず最初に反応し、ティアナが挨拶をする。それにならつ
て、ライトニングの二人も挨拶をするのだった

「おはようみんな。なのはも」

「うん、おはよう、ゲイル君。で、訓練はどうだった？私的には、結構形になってきたと思うんだけど…」

挨拶もそこそこに、訓練の成果を確認するなのはに、ゲイルは「うん」とうなりながら考え、言葉を選びながら順番に告げていった「まずスバルだけど、まだまだ動きに無駄が多いな。スバルの持ち味は一撃の破壊力なんだから、どうすればその一撃をスムーズにあてられるか、よく考えながら練習しような」

「はい！ありがとうございます！」

「次にティアナ。大分指示が正確になってきたな。この分なら、もう現場に出ても大丈夫だろう」

「あ、ありがとうございます／＼」

「だけど、センターガードとしてできることはまだあるはずだ。せっかく正確な射撃を持ってるんだから、それをいつでもできるように、視野を大きくもってな」

「頑張ります！」

「それからエリオ。お前のスピードは確かに武器だ。でも、まだそれに振り回されてるし、攻撃が素直すぎる。スピードに強弱をつけて、敵を翻弄するんだ。できるな？」

「はい！」

「よし、いい返事だ。最後にキャラ。俺はフルバックのことはよくわからないが、一か所に長居しすぎだ。防御手段がないからこそ、動き回って逃げるんだ。いいな？フリードも、しっかりキャラを守ってやってくれ」

「は、はい！」

「キョクル」

「よし、俺からはこれくらいだ…なのは、他に何かあるか？」

ゲイルの評価が終わると、それまで見守っていたなのはが口を開いた

「さすがゲイル君、よく見てるね。教導官、向いてるかもよ？」

「やめろ。俺は誰かに何かを教えられるような人間じゃねえよ。と
ころでさっきから気になってただけだ…」

「どうしたの？」

「なんか焦げ臭くねえか？」

ゲイルの言葉に、全員が周囲に気を配る。そして、それに最初に気が付いたのはティアナだった

「あ、スバル！アンタのローラー！」

「え？……あ！」

スバルの足元、つまり、ローラーブーツから煙が出ていた。デバイスも機械だ。無理をさせれば、このくらいあり得るだろう

「あちゃー、無理させちゃったなあ」

スバルもそれはわかっているらしく、少し後悔しているようだ

「ティアナのアンカーガンも厳しい？」

「そっぴゃ、訓練中もなんか不調っぱかったな」

訓練中、不発弾があったのはなのはもゲイルもわかっていたようで、ティアナに確認を取っている

「ええと、だましだましです」

ティアナから帰ってきたのは、ある意味予想通りの答えだった。それを聞いて、なのはが一人考え、つぶやいた

「訓練にも慣れてきたし、そろそろ実戦用の新デバイスに切り替えかなあ」

「新デバイス？」

その言葉にいち早く反応したのはスバルだった

「まあ、そうだろうな。いつ出勤があるかわからんし、いいきっかけになったんじゃないか？」

ゲイルも新デバイスへの切り替えは賛成のようだ

「まあ、訓練も終わったし、隊舎に帰りながら話そうぜ」

ゲイルのその言葉を聞いて、一同は隊舎へ向かうことにした

「そういえば、ゲイルさんって所属部隊はどうなるんですか？」
「所属部隊？」

隊舎への道中で、キャラが思い出したように聞いてきた。最初は少し怖がっていたキャラだが、この二週間でだいぶゲイルに慣れてきたらしく、今ではこうやって自分から話しかけてきてくれるように

なっていた

「はい。スターズとライトニング、どっちに入るのになって」

「あ、それ私も気になる！」

キャロの質問にスバルも便乗してきた。エリオもティアナも、気にはなっているようだ

「ああ、おれはどっちにも入らないよ。基本的には独立して動く、遊撃手みたいなもんだ」

「遊撃手？好きに動くってことですか？」

聞きなれない言葉に、ティアナが反応した

「まあそういうことだな。ただ、なのはやフェイトと違って、わりとみんなと一緒に行動することが多くなる。言ってみれば、フォワードのお前らのバックアップだな。ついでに、コールサインはハリケーン01だ」

「ハリケーンですか。なんか、かつこいいですね」

そういったエリオの眼はなぜ輝いていた。局員といっても、まだ10歳の少年である。かつこいいものにあこがれるのはごく自然のことだろう

「ありがとな。っと、もう隊舎か。なのは、これからどうするんだ？」

「うん、じゃあ、いったん寮でシャワー使ってロビーに集まるつか」

なのはが今後の予定を告げると、向かいから黒のスポーツカーがや

つてきて、目の前で止まった。そして、どういう仕組みかわからないがいきなり屋根がなくなり、中に誰が乗っているのか明らかになった

「フェイトさん、八神部隊長！」

「すごい、これフェイト隊長の車だったんですか？」

「うん、地上での足なんだ」

スバルがフェイトの車について聞くとフェイトがその疑問にやさしく答えた

「じゃあ、もしかしてあの黒いバイクもですか？」

今度はティアナがフェイトに質問していた。しかし、それに答えたのはゲイルだった

「ああ、あれは俺のだ」

「え？ゲイルさん、バイク乗れたんですか？なんか意外です…」

キャラが驚きの声を上げる。純粹ゆえの素直な驚き。だが、それはゲイルにとっては違うものに感じられた

「キャラさん、その反応はいささか傷つきます」

「え、い、いや、決してゲイルさんがバイクに乗ってる姿が似合わないとかゲイルさんっておっちょこちょいなのに怪我しないのかなとかそういう意味ではなくて…」

「キャラ、それはフォローになってないよ…」

「え？」

スバルに言われてキャラがゲイルを見ると、そこにはもう落ちるところまで落ちたと言わんばかりのテンションのゲイルがいた

「ああ、ゲイル、大丈夫？」

「ええっと、元気出してね？」

「つらくても生なあかんで？」

「ええっと、頑張ってください！」

「その、きつといいことありますから」

「ゲイルさん、僕はバイクに乗ってるゲイルさんかっこいいと思います！」

隊長陣とフォワード陣が必死でフォローする中、キャロだけは状況を飲み込めず、おろおろしていた

その後、立ち直ったゲイルは「もっと運転の練習しよう」と強く誓うのだった

第六話 秘密、訓練、そしてイメージ（後書き）

鯉「ゲイルが真面目に指摘しているだろ…?」

ゲ「いや、書いたのおまえだろ。ていうか、なんだ最後は。お前俺のことが嫌いなのか?」

鯉「いや、好きだよ」

ゲ「む、なんだ、率直に言われると恥ずかし…」

鯉「他の作家さんたちの主人公さんたちと違って、お前はいじりやすいからな!」

ゲ「やっぱり嫌いだろう!?」

鯉「まあ、それはいいとして」

ゲ「いいのかよ!?」

鯉「前書きで書いたアンケートに行きたいと思います!内容は、ヒロインについてです」

ゲ「読者の皆様、お許しください。このバカ、『みんな好きすぎて誰か一人なんて選べない!』とか言い出しまして…」

鯉「それで、どうせなら読者様に意見を募ろうということになりました」

ゲ「つうわけで、第1回アンケート『ヒロインは誰がいい?』を開催します。選択肢は、基本的に原作キャラならOKです。」

鯉「ただし、キャラ、ルーテシア、チンク、ヴィータはなしです。ロリは個人的に書きたくないので…特にキャラは、エリオがもういますので」

ゲ「あと、あまりに登場回数が少ないのはなしです。もし、『この人はどう?』というようなキャラがいれば、ご相談ください。一考してみます」

鯉「さあ、いったい誰がヒロインの座を射止めるのか!？」

ゲ「ていくかまず票が集まるのか!？」

鯉・ゲ「皆さんの投票、お待ちしております」

投票は、感想、メッセージでお願いします。もちろん、感想もお待ちしています。もうと、鯉太郎がテンションあがります。それでは、よろしく願いします

第七話 教会、デバイス、そしてファーストアラート（前書き）

インターネットに繋がらなくなったため、今回は携帯からの投稿です
初めてなのでみにくいかもしれませんが、お楽しみ下さい

第七話 教会、デバイス、そしてファーストアラート

六課でキャラロがゲイルの心をへし折った後、はやてとフェイトはフォワードと別れ、フェイトの運転でそれぞれの目的地へと向かっていた

「聖王教会のカリム・グラシアさんか…私はお会いしたことないんだけど…はやてはいつから？」

「リンが生まれてすぐやから…8年前ぐらいかな？」

「8年前、か…」

8年前

それは、ここにいる二人となのは、そして、ゲイルにとって、大きな分かれ道となった時間

それを聞いたフェイトは、無意識のうちに黙り込んでしまった

「き、機動六課の立ち上げの実質的などころをやってくれたんはほんとどカリムなんよ。おかげで私は人材集めのほうに集中できたし」

空気が変わったのを敏感に感じ取ったはやては、話題を変えようとまくしたてるように話す。フェイトもそれに「そうなんだ」と返し、

「頼れる上司って感じかな？」

と疑問を投げかけてみた

「うっん、仕事や能力はすごいんやけど…上司っていうよりお姉ちゃんって感じかな。それに…」

「うん？どうしたの？」

少しためたはやてに、先を促すようにフェイトが問いかけると、はやてが笑いながら口を開いた

「ゲイル君を見つけて、資料をリンディ提督に送ってくれたんも、カリムなんよ」

「……そう、なんだ。じゃあ、お会いしたときは、私もお礼したいな。大切な人を見つけてくれてありがとうって」

一瞬表情が固まったフェイトだったが、すぐにやわらかい笑みを浮かべ、うれしそうに話す
それを見たはやては、一緒に笑顔を浮かべ……その笑顔はすぐにその性質を変えた

「そやなあ。それにしても、フェイトちゃんあああん？」

「な、何かなはやて？顔がすごく悪い顔してるよ？しゃべり方もちょつと変わってるし……」

そのはやての、黒い笑顔をみたフェイトは、若干引きながら訪ねる

「いやなあ、フェイトちゃんにとってゲイル君は大切な人なんやなあと思っただけやで？」

はやてのその発言を聞いて、フェイトは先ほどの自分の言葉を思い出し……一気に赤面する

「べ、べつに深い意味はないんだよ！？ただ、私はゲイルと一緒に空を飛べてうれいっていうか……本当に深い意味は無いんだよ！？」
「わかってるわかってる。フェイトちゃんはゲイル君と一緒にいれ

るだけでうれしいんよな？」

「はやて、わかって言ってるよね？そ、それを言うなら、はやてだつてアースラにいたころ、ゲイルの部屋に勝手に入り込んで一緒にベッドで寝てたじゃない！」

「ソ、ソナコトハオボエテヘンナア」

女三人よれば姦しいというが、二人だけでも十分にぎやかである結局二人の言い争いは、はやてが聖王教会で降りるまで続いた

ベルカ自治区 聖王教会 カリム・グラシア執務室

「てなことがあつたんよ。全く、フェイトちゃんも素直になつたらええのに」

「あら、そんなことがあつたの」

はやてが、車中で何があつたかを報告している相手こそが、この部屋の主であるカリム・グラシアである。金髪のロングヘアを背中あたりまで伸ばし、修道服に身を包んだその姿は、どこか威厳を醸し出している。しかし、今はその威厳はなりを潜め、年相応の少女らしさを見せている

「でも、私からすればはやてだつてもっと正直になるべきよ？」

「いや、だから私は……って言っても無駄やな」

そういうと、はやては紅茶を一口すすり、口を開く

「確かに私は、いや、多分なのはちゃんもフェイトちゃんも、ゲイル君にある種の好意はもつとる。でも、それが恋心なんか、友人としてなんかは、たぶん誰にもわからん」

「だから、フェイトさんには自覚してほしいと?」

「できればなのはちゃんにもな。もしかしたらヴォルケンリッターヴォルケンリッターらもそうかもしれない。最近はフォワードの子たちもなかよしとるみたいやし、倍率高すぎや」

そう言つて困つたように笑うはやて。その顔を見て、カリムもつられて笑いながら、こう思ふのだった

「（私としては、そこにあなたも入つてほしいのだけれど。あなたはこの10年間、とても苦しんできたわ。だから、もう幸せになつてもいいはずよ）」

「それで、今日私を呼んだんはなんか用か?」

「え、ええ、実はね…」

二人の会話はそのまま、六課の運営やガジェットについてという、仕事についてのものへとシフトしていった

機動六課隊舎 デバイスルーム

フォワード陣はシャワーを浴びた後、なのは、それに一緒に朝食をとっていたゲイルと共にデバイスルームへ向かっていた

「でも、なんでゲイルさんまで一緒に来るんですか？」

「なんだ？俺と一緒にいたらキャラは嫌か？」

不思議そうに尋ねるキャラは、ゲイルはおどけたように聞き返され、慌てて否定する

「あ、いや、そんな訳じゃないです！ただ、ゲイルさんは自分のデバイスあるのに何でかなって……」

先程のやり取りを思い出し焦るキャラを、ゲイルは楽しそうに笑う

「はは、冗談だよ。素直だなキャラは」

「うっ、ゲイルさん意地悪です……」

「ゲイルさん、あんまりキャラをいじめちゃダメですよ」

「そうですよ。キャラはいい子なんですから」

エリオとスバルに注意され、「悪い悪い」といったところで、今度はティアナが聞いてきた

「でも、実際シャーリーさんになんか用事があるんですか？」

「ああ、グレンのメンテナンスを頼んでたんだ。何せ、こないだの模擬戦が7年ぶりの戦闘だったからな」

今度は真面目に答えたゲイルに、再びキャラが尋ねる

「そういえば、グレンさんってすごいデバイスですね。刀と銃、それにハンマーに変形するなんて。ゲイルさんがご自分で組まれたんですか？」

キヤロの疑問はある意味で当然のものだろう。確かに、変形するデバイスというものは存在する。バルディッシュやレヴァンティン、グラーファイゼンがそうだ。

だが、グレンの変形は異質だ。他のデバイスが、ある意味奥の手として変形するのに対し、グレンは変形させることを前提としているのだ。こんなデバイスは、めったにない。ましてや訓練校では絶対に支給されない

「いや、違うよ。グレンは俺が作った訳じゃない」

キヤロの質問に対するゲイルの返答はNOだった

「というか、俺にも誰が作ったのかわからないんだよ。物心ついた時には一緒にいた気がするし」

「それって、ご両親からもらったってことですか？」

「あゝ、まあ、親と言えば親なんだが……」

スバルの問いに、ゲイルは思わず答えにつまってしまった。どうやら、この話題は彼にとってNGだったらしい

「で、でもすごいですよね！三種類も武器を使いこなすなんて。僕なんかまだ槍一本ロクに扱えないのに」

敏感に空気を感じ取ったエリオが話題を変えた。空気を変えたかったと言うのはあるが、同じベルカの騎士としてゲイルの戦いかたに興味があるのも本当だろう

ゲイルは、エリオの問いに答える

「そんなことはないさ。俺だって、最初から全部上手く扱えた訳じゃないかったし。昔は酷かったんだぞ？」

「へえ、どんなだったんですか？」

今まで弱点なんて見つからなかったゲイルの失敗談に興味があるのか、スバルが興味津津である。

「そうだなあ……」

ゲイルは、しばらく考え込んでから、失敗談を語った

「初めてなのはと模擬戦したとき、バレットで戦ったな」

「……へ？」

五人の間拔けな声が見事に重なった。バレットとは、グレンのモード2、射撃形態のことだ

射撃でなのはと戦おうとするなど、愚の骨頂である

「そ、それでどうなったんですか？」

この話題になってから、沈黙を保ち続けていたティアナが、耐えきれずに先を促された

「もちろんぼろ負け。グレンにこっぴどく叱られたよ。それ以来、形態変化に気を使うようになった……と、もうついたな。入ろつか」

見ると、もうデバイスルームの直ぐ目の前まで来ていた。話に夢中

で、危うく見過ごしてしまつところであつた。順番に入つていこうとしたところで、ゲイルが最後に入つていこうとしたティアナを呼び止めた

「何ですか？早くしないと、シャーリーさん待つてますよ」

「ああ、だから手短に言う」

そこでゲイルは一旦切つて、ティアナの眼を見て言った

「ティアナはティアナにしかないいいところをたくさん持つてる。今はまだ、焦らなくてもいいんだ」

「！！」

他人には、おそらく何の話かわからないだろう。だが、ゲイルは分かっていた。

早い話が焦っているのだ。

10にして自分たちと同じBランクのエリオに、召喚魔法という特別な力のあるキャラ、そして、クロスでの爆発力は逸品のスバル

その中で自分がいかに平凡であるか、ティアナ自信が一番わかつていた

だから先ほどゲイルに聞いたのだ「どうやってガンナーとして戦ったのか」と。自分では見いだせなかった戦いかたがあるのではないか、そう思つての問いだった。藁にもすがるような気持ちだった

「……なんのことだかわかりません。急ぎましょう。皆が待つてますよ」

だが、彼女はそれを認めなかった。認めたくなかった。自分は、まだ目指さなくてはならない場所があるのだから

ティアナはそう告げると、先にデバイスルームへ入ってしまった

ゲイルはひとつため息をつき、そのあとに続いた

「（なのはの教導は成果が見えづらいからな。あんまり焦らなきゃいいんだけど）」

「あれ？ゲイル君も来たんだ？」

ちょうど入ろうとしたところで、なのはと遭遇した

「ああ、シャーリーにメンテナンスを頼んでたんだ」

「へえ、そうなんだ。あ、皆はもう中？」

「ああ、俺も今から入るところだ」

「そっか。じゃあ入ろう」

そうしてデバイスルームに入ると、シャーリーが一番に声をかけてきた

「あ、ゲイルさんになのはさん、待ってました」

「うん、遅れてごめんね」

「すまなかつたな。シャーリー、グレンは？」

遅れたことを謝り、シャーリーにメンテナンスの状況を聞くと

「あ、もう終わってますよ。はい」

と言って差し出してきたそれを礼をいいながら受け取り、グレンに状態を確認する

「ようグレン。調子はどうだ？」

《頗る良好です。最後に本格的なメンテナンスを受けたのが8年前なので、技術の進歩を感じますね》

「そりゃよかった。やっぱり、本職にはかなわないな」「当然ですよ。これからはしっかりメンテナンスするんで任せてください！」

そう会話をしていると、シャーリーが会話に入ってきた

「シャーリー、もうあつちはいいのか？」

「はい、リン曹長となのはさんがやってくれますから。それと、ゲイルさんのバリアジャケットなんですけど……」

そこまで言ったところで、隊舎全域にアラートが鳴り響いた

「このアラートは……」

「第一種警戒体制……」

誰が言ったかわからないその言葉は、一気に場の緊張を高めた

第七話 教会、デバイス、そしてファーストアラート（後書き）

鯉「け、携帯からって書きづらい……」

は「ちゃんと料金払わんからやろ」

鯉「これはこれは、ヒロインアンケートで一票も入ってない部隊長さまじゃないですか」

は「く、事実やから言い返せん……でも、なのはちゃんやフェイトちゃんもやで？」

鯉「そうだよな。正直以外かな」

は「まだしばらくアンケート続けるんやろ？」

鯉「まあ、もうしばらくは。というわけで皆さん、ふるってご応募下さい」

は「ぜひ私に一票を！！はやてからのお・ね・が・い」

鯉「色気ゼロだな」

は「言わんという。結構ダメージでかいんやから」

第八話 星と雷、そして風（前書き）

テストも終わったので、一日中執筆してました

結果が初の1万字オーバー

いつもの倍のボリュームでお送りするファーストアラートをお楽しみください

第八話 星と雷、そして風

「なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君に、ゲイル君、こちらはやて！」

突如なりだしたアラートの対応に追われる機動六課に、聖王教会のはやてから通信が入る

はやてによれば、リニアレールで護送中だったレリックが列車ごとガジェットに襲われ、コントロールが利かなくなっているらしい。それも、内部に侵入したガジェットには飛行型などの未確認型もあるようだ

「そいつはまた、いきなりハードな初出動だなだな」

ゲイルのつぶやきは、おそらくこの通信を聞いている全員の反応だろう。だが、今やれるのは自分たちしかない

『なのは隊長、フェイト隊長、ゲイル君、いけるか？』

『私はいつでも』

『私も』

「ちょうどグレンも戻ってきたし、大丈夫だ」

力強く答えた三人に続き、はやては新人たちにも確認を取る

『スバル、ティアナ、エリオ、キャロ！みんなもオツケーか？』

「……はい！」「……」

『よつしゃ、ええお返事や。シフトはA-3、グリフィス君は隊舎で指揮、リインは現場管制、なのは隊長とフェイト隊長は現場指揮！』

気持ちのいい新人たちの返事に、はやてはそのまま指示を出す

『ほんなら、機動六課フォワード部隊、出動！』

「「「「はい！」「」「」」」

こうして、機動六課の初任務がはじまった

「ちょ、はやて俺は？！俺のこと忘れてない？！」

『あゝゲイル君は……好きにしておいてええよ』

「なんか投げ槍！」

魔法少女リリカルなのはStrikers 緋色の風

第8話 星と雷、そして風

「新デバイスでぶつつけ本番になっちゃったけど、練習通りやれば大丈夫だからね」

現場へと向かうヘリの中で、緊張気味の新人たちを前になのはが言う
隊舎にいなかったフェイトとは現地で合流することとし、なのはた
ちは先に出撃したのだった

「はい、頑張ります！」

なのはの言葉に、ティアナは勢いよく反応する。そこまで緊張もし
ていないし、大丈夫かな、とゲイルは思っていた。スバルも、多少
硬いが、大丈夫そうだ

「（問題は…）」

「エリオにキャラ、フリードも頑張るですよ！」

「はい！」

「きゅくる〜」

「（この二人だな）」

ティアナやスバルと違い、この二人は正真正銘の初出動だ。当然、
並みならぬ緊張感だろう

「危ないときは私やフェイト隊長、リンやゲイル君がちゃんとフ
ォローしてくれるから、思いっきりやってみよう！」

「……はい！」「……」

なのはの鼓舞に、これまた元気よく答える新人たちの前で、ゲイル
はなのはに念話で話しかけた

「（なのは、ちょっといいか？）」

「（ゲイル君、どうかした？）」

突然の呼びかけにも驚いた様子はなくゲイルの話聞く。この辺りは、さすがに場数を踏んでるだけあるな、とゲイルは思った

「あのさ、リニアについてからなんだけど、上空はなのはとフェイトに任せていいか？」

「（え？ いいけど、ゲイル君はどうするの？）」

「（ライトニングにこういうと思う。スターズと違って、ほんとに初めての実戦だからな）」

「（うーん、それもそうだね。お願いできる？）」

「（任せろ。しっかりフォローしてやるさ）」

ゲイルは、フリードとエリオとキャラに心配されているキャラを見ながら念話を終えた。キャラのことはよく知らないが、あまり戦いを好む性格ではないのは確かはずだ。それでも、彼女には戦う理由がある。だから、ここにいるのだ

「（守ってやらなきゃな）」

そう考えて、ゲイルはキャラのところへ近づいた

—— Side キャロ・ル・ルシエ

私は、昔を思い出していた

今思えば、私は才能に恵まれていたのかもしれない。『竜召喚』と

レアスキル
いう稀少能力をもち、黒龍の加護を受けたのは、私だけだった。でも、その才能は私にとって不幸をもたらすものだった

「過ぎた力は争いを呼ぶ」

「おまえをこれ以上村にはおいておけない」

竜召喚は危険な力なんだ。人を傷つける、危険な力…

「キャロ？」

「え？」

自分を呼ぶ声に顔を上げると、そこにいたのはゲイルさんが心配そうに顔をのぞかせていた

「おなかでも痛いのか？もう現場に着いちまうぞ？」

「え？キャロ、どっか悪いの？」

ゲイルさんの声に反応して、スバルさんも私のことを心配してくれた。二人だけじゃない、ティアナさんやなのはさん、エリオ君も、心配そうにこつちを見てる

「は、はい、大丈夫です」

そう言っつて私は無理にでも笑っつて見せた

フォワードたちが現場に向かっている頃、ロングアーチでは、現状の整理が行われていた

「問題の貨物車両、速度70を維持」

「重要貨物室の突破はまだされていないようですが…」

「時間の問題か…」

アルトとルキノの報告を聞きながら、グリフィスが現状を把握する。はやてがいない今、実質的に指揮を執っているのは彼だ

その時。アラートがけたたましく鳴り響く

シャーリーの指示で広域スキャンをかけると、新たな敵影が確認された

「ガジェット反応、空から!？」

「航空型、現地観測隊を捕捉!」

『グリフィス、こちらフェイト』

新たな敵影を発見し、状況が動き出そうとしたところで、フェイトから通信が入った

『今パーキングに到着、車止めて現場に向かうから、飛行許可を』
「了解、市街地個人飛行、承認します」

グリフィスは素早く承認し、それを聞いたフェイトは車から出て、長年の相棒を手に走り出す

《Get set》

「うん！」

相棒の声に力強く頷き、右手を掲げ、唱えた

「バルディッシュ・アサルト、セーット・アップ！」

《Set up・Barrier jacket Impulse form》

右手にバルディッシュを握り、バリアジャケットを身にまとったフェイトは、空へとあがり、現場へと向かった

「ライトニング1、フェイト・テストロッサ・ハラウン、行きます！」

「ヴァイス君、私も出るよ、フェイト隊長と二人で空を抑える！」
「うっす。なのはさん、お願いします」

一方、ヘリで移動中のフォワード陣にも動きがあった。なのはが、出撃するというのだ
フォワードが安全に降下ポイントへと向かうために、上空のガジェットを落とすためだ

空いていくメインハッチを前に、新人たちに向き直った

「じゃあ、ちょっと出てくるけど、みんな頑張ってズバツとやっつけちゃおう」

「「はい!」「」

「はい」

「キャロ」

一人だけ遅れて返事をするキャロになのはは優しく語りかける

「大丈夫だよ、そんなに緊張しなくても」

そう語りかけながら歩み寄り、そつと両手でキャロの顔を包み込む

「離れてても、通信でつながってる。一人じゃないから、ピンチの時は助け合えるし、キャロの魔法は、みんなを守る優しくて強い力なんだよ」

そう言うと、今度はゲイルのほうへと向き直る

「じゃあゲイル君、みんなのことお願いね」

「まかせろ、俺の眼の届く限りは、守り通して見せる」

そう言つて自信満々に笑つたゲイルに微笑み返し、なのはは空いたハッチから飛び出した

《Stand by ready》

「レイジングハート、セット・アップ!」

《Barrier Jacket Aggressor mode》

《Accel Fin》

「スターズ1、高町なのは、行きます！」

ヘリの中ではリインにより、今回の任務の目的は説明されていた

『レリックの確保とガジェットの全機撃墜』
この二つが今回の任務である

「ですから、今回は部隊を二つに分けて行動しますゲイルは、今回
ライトニング分隊と一緒に行動してもらいます」
「了解だ」

スターズとライトニングのどちらにも属していないゲイルは、エリオとキャラのフォローに入る。なのはとの打ち合わせ通りだ

「レリックはここ、7両目にあるので、前後からガジェットを破壊しながら進みライトニングがスターズ、先についたほうがレリックを確保するですよ」

「……はい！」「……」

「私も現場に降りて管制を担当します！」

そう言つて、リインは騎士甲冑を装備する
そんなリインを見て、ゲイルは感心する

「へえ、リインも戦えるのか」

「あ、当たり前ですよ！それでも、魔道士ランクだった持つてるで

すよ！」

そう言つてゲイルのことをその小さな手でポカポカとたたいている。その愛らしい姿を見て、フォワード陣は笑いに包まれる。それを見て、リインはさらに怒る

「な、なんで笑うですかあ!!」

顔を真っ赤にして怒るが、リイン自身緊張が解れているこの雰囲気を知っているのか、あまり強く言えないでいた

そして、とうとう降下ポイントへ到着した

「さあて新人ども、隊長たちのおかげで、安全無事に降下ポイントへ到着だ！」

ヴァイスの声で、再び緊張感が生まれた。しかし、最初のような重苦しいものではなく、いい意味での緊張だ

「さてと、準備はいいか？」

ゲイルが、真剣な表情でフォワード陣に言う。その顔を見て、スバルはティアナの肩をたたいた

「（なによ）」

「（ゲイルさんって、真剣な顔できたんだね）」

「（ちよ、なに失礼なこと言ってるのよ!）」

「（だって、初めて見たよ、あんな顔。ティアだってそう思うでしょ?）」

「（まあ、そう思うけど...）」

「あの〜スバルさん、ティアナさん」
「はい?」

小声で会話していると、隣にいたエリオから声をかけられた

「ええ〜と、聞こえてたみたいですよ」
「え?」

そう言つてゲイルのほうを見ると、少し苦笑いでこっちを見ていたいつものゲイルなら、とつくに隅つこで膝を抱えて落ち込んでいる状況だが、今回は場が場だけになんとか耐えているようだ。額からは大量の汗がとめどなく流れている

「す、すみませんでした!」

慌てて二人が頭を下げると、ゲイルも苦笑いしながら何とか返す

「まあ、緊張してないのはいいことだが…ある程度緊張感を持つと
けよ?」

「はい」

話を続けていいか?と前置きして続ける

「さっきなのはいろいろ言つてたから、俺から言うことは一つだ」

そう言つて、ゲイルは全員の顔を見て、言つた

「お前らは俺が守つてやる。だから、全力で行け!」
「はい!」

力強く返事をした四人は、まずスターズの二人、スバルとティアナから降下する

「スターズ3、スバル・ナカジマ！」

「スターズ4、ティアナ・ランスター！」

「「行きます！」」

そう言つて、二人は一気に降下していき、なのはがやったように空中でセフトアップしていく

「次、ライトニング！」

ヴァイスの声を受けて今度はエリオとキャロがいこうとするが、やはりまだ怖いのか、キャロは表情がすぐれない。生来の性格もあるのだろう

「一緒に降りようか？」

それを見たエリオは、手を差し伸べる。それをキャロは、ためらいながらも握りしめる

「ライトニング3、エリオ・モンディアル！」

「ライトニング4、キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ！」

「「行きます！」」

そう言つて、二人と一匹は飛び、セフトアップしていく
それを眺めながら、ゲイルはつぶやく

「あゝあゝエリオのやつ、男の子してるなあ。キャロのほうもうれ

しそっだし」

それからなにかさびしそうな顔をしながら言う

「ったく、俺も彼女ほしいよ…」

そう言ったとたん、ヘリが大きく揺れた。ヴァイスが操縦を誤ったのだろうか

「とと、どうしたヴァイス？」

「うるせえ！！」

なんとかバランスを維持して操縦席にいる彼に声をかけると、なぜか怒号が飛んできた

「な、なんなんだよ…」

「うるせえコノヤロー！てめえに彼女がどうこう言う言う資格なんかねえ！美人を3人も侍らかしやがって。おまけに最近は姐さんやら新人どもと仲良くやってるらしいじゃねえか！」

「な、まで！なのはやフェイト、それにはやてはそんな仲じゃ…」

「ほお？美人3人てえのがなのはさんとフェイトさん、それに部隊長だって自覚はあるみてえだな」

「あ…」

みずから墓穴を掘ってしまったゲイル。この状況から抜け出すべく、後部ハッチへと向かう

「あ、まで、逃げんな！」

「うるせ！ハリケーン！、ゲイル・スカーレット！行くぞ！」

そう言つてハッチから勢いよく飛び降り、グレンを掲げる

「行くぞグレン！セットアップ！」

《Stand by ready》

いつも通りにモード1、日本刀と左手に籠手が装着される。だが、バリアジャケットはいつもと違っていた

黒のボタンシャツに、白の前の開いた太ももあたりまでのコートのようなもの、そしてズボンも白という、以前まで使っていたジャケットとは全く異なったデザインとなっていた

黒のボタンシャツに、太ももあたりまでの白いジャケット、そして、濃紺のズボンといったデザインだ

ジャケットの淵には、青いラインどりがされている

「グレン、なんだこのバリアジャケット」

なぜこのようなことになっているのかわからないゲイルは、とりあえずグレンに尋ねることにした。グレンは、正直に答えることにする

《フィニーノ陸士がはやてさんに頼んでデザインしていただいたようです。『新人たちでさえオリジナルデザインなんだから、一人だけ一般局員と同じなのはかわいそうだ』と》

「まったく、あいつら」

早い話が、シャーリーとはやての遊びだったようだ。だが、ゲイルとしては悪い気はしない。動機はどうあれ、自分のためにデザインしてくれたのだ。自然と頬が緩んでしまうのも仕方がないというものだろう

「まあいい。とりあえずこのままいくぞ」

《とか何とか言って、本当は嬉しいのでしょうか？最初自分でデザインしたときは『自分にはセンスがない』と言って泣く泣く一般局員と同じものにして、ずっとそのままだったのですから。どうなんですか？素直になったらどうですか？》

「おまえもう黙ってる！」

なおも自分をからかおうとするグレンを黙らせ、エリオとキャロを探す。どうやら二人とも自分のバリアジャケットに驚いていたようだ。その二人に、ゲイルは声をかける

「エリオ、キャロ、ぼさつとしてんな。準備はいいか？」

「はい」

「よし、じゃあ……行くぞ！」

そう言って、刀形態のグレンをハンマー型に変え、今自分が立っている屋根にたたきつけ大穴を開けた。中からは、五体のガジェットがこちらを捕捉したガジェットがビームを飛ばして攻撃してくる

「グレン！」

《ラウンドシールド》

ゲイルがグレンに命じると、目の前にシールドが現れ、ビームをはじく。その横を、エリオがストラーダを構え突進していく。キャロの支援魔法で強化された一撃は、一機のガジェットを貫き、残った一機をフリードのブラストフレアがもう一機を貫く

「エリオ、どけ！」

エリオが振り返ると、そこにいたのは双銃を構えたゲイルだった。周りには、10近い数のスフィアが形成されていた。何をするつもりなのか悟ったエリオは、そこから一気に飛び退く

「ウィンドバレット、ファイア！」

ゲイルの声に合わせ、一気に風をまとった緋色の魔力弾が残った三機に襲い掛かる。が、着弾する前に魔力弾が消えてしまった。AMFだ。だが、ゲイルからしてみればこれも予想済みだ

「ふっ！」

弾幕に合わせて接近し、日本刀へと形態を変えたグレンを両手で握り、近くにいた一機を唐竹に切り伏せ、返す刀で近くにいたもう一機を切りつける。真つ二つにされた二機は爆炎を上げる。だが、一機残ったガジェットが背後から襲い掛かる。ゲイルは気づいた様子はない。もしガジェットに感情があつたなら、その表情は喜色に染まっていただろう。しかし、そうはいかなかった

「でりゃあああああああ！！！」

《スピーアアングリフ》

グシャッと音がして、ガジェットは動力炉を貫かれ、その行動を停止させた。エリオが、とどめを刺したのだ

「ナイスだエリオ！キャロ！フリード！」

「ありがとうございます！」

「ゲイルさんも、すごいです！」

お互いにほめたたえあいながら、前へと進んでいく。そこには、出撃前までのおびえた姿はなかった

「よし、このまま一気に行くぞ！」

「はい！」

三人はそう声を合わせ、次の車両へと向かった。同時に、ゲイルは別行動をしているスターズの二人へと通信をつなぐ

「スバル、ティアナ、そっちはどうだ？」

『今4両目です！ティアナと合流しました！』

『ケープルの破壊も試しましたが、効果はありませんでした！』

「わかった。そっちはリインに任せて、レリックを目指せ！」

『了解！』

そう通信を締めて、戦闘へと戻る。ちょうどエリオとキャロが9両目を突破したようだ

「なんつつか、俺いなくてもいいんじゃない？」

ゲイルは自分の不要性を疑いながらも、二人の後を追った。だが、その気持ちは悪い形で裏切られることとなる。だが、ゲイルは気づいていなかった。撃破されていた中の数機が、致命傷を免れていたことに

「今までと違う！」

エリオの声に敵影を確認すると、そこにいたのは今までの敵より大きく、形も完璧な球状で、触手もこれまでのものより数段太くなっていた

「新型だ！エリオ、キャロ、いったん下がれ！」

ゲイルがそう叫んだとたん、ガジェットからの攻撃が始まった。触手を伸ばし、エリオとキャロを攻撃するが二人はそれを躲すと、屋根へと下がり、キャロの命令でフリードから攻撃が放たれる

「フリード！ブラストフレア！」

「きゅくる〜！」

さっきまでのガジェットには通じていた攻撃だったが、今回の新型は触手を使って弾き返してくる

「でりゃああああ！」

今度はエリオが突っ込み、ストラダをたたきつける。だが

「か、硬い…！」

新型は装甲も厚いのだろうか、ストラダの刃は通らなかった。そして、新型ガジェットはAMFを発生させる。巨大な体から放たれるそれは、効果範囲はさっきまで戦っていたガジェットの比ではなく、車両の屋根にいたキャロにまで届いていた

「AMF？こんな遠くまで…」

「エリオ！　　つてうわ！」

「きゃあ！」

力比べとなっていたエリオのカバーに行こうとしたゲイルだが、足元に予期しない方向からのビームが突き刺さる。それは、先ほどゲ

イルが通信している間に二人が撃破したと思われていた機体だった

「クソ、撃ち漏らしか！エリオ、何とか粘ってるよ！」

「はい……ぐわ！」

なんとか粘ろうとしたエリオだったが、壁にたたきつけられ、とうとう意識を失ってしまった。そんなエリオを、ガジェットはまるでゴミでも捨てるかのように外へと投げ捨てようとしている

それを見ながら、キャロは思い出していた。自分が管理局に入局してから、フェイトに引き取られるまでのことを。はじめて見つけた、ずっといたいと思える場所。そして、自分と同じ年の、優しい男の子のこと

「（守りたい）」

初めて感じた、この感情

「（なのはさんが教えてくれた）」

――キャロの魔法は、みんなを守ってあげる優しい魔法なんだよ――

「（ゲイルさんが言ってくれた）」

――お前たちのことは俺が守ってやる。だから全力で行け――

「（私はみんなを守る！失敗しても、ゲイルさんが守ってくれる！）」

そう思った瞬間、キャロは放られたエリオを追って飛び降りていた

「キャラ？！クソ！」

それを見たゲイルは、刀でガジェットを切り伏せ、飛び降りた二人を追った。だが、それは不要だったことをすぐに知ることになる。キャラと一緒に降りたフリードが光に包まれ、その光が晴れるとフリードは巨大な竜となり、背にエリオとキャラを乗せていた。それを見て、ゲイルは安心し、飛行魔法でフリードのところまで飛んでいく

「よう、二人とも大丈夫か？」

「はい、大丈夫です」

「心配おかけしました」

口調はしっかりしているが、二人とも少し顔が赤い

「どうした？二人とも顔が赤いぞ？」

「「そ、そんなことはありません！」」

軽く尋ねてみたゲイルだったが、力いっぱい否定されてしまった。本当は、フリードに乗ったときにキャラがエリオを思いっきり抱きしめていたことを自覚し真っ赤になっていたのだが、ゲイルはそれを知る由もない

「まあいい。それよりガジェットだ。二人ともいけるな」

「「はい！」」

そう返事をする、フリードはそのまま急上昇し、屋根の上に出現していた新型のガジェットに狙いを合わせる

「フリード！ブラスト・レイ！」

先ほどまでとは比べ物にならないほどのエネルギーを持った炎がガジェットを襲うが、ガジェットを撃破するまでには至らなかった

「やつぱり、堅い……」

「あの形状は砲撃じゃ抜きにくいよ。僕とストラダがやる。ゲイルさん、いいですか？」

エリオがゲイルに確認する。もちろん、ゲイルがそれをことわるわけがない。せつかくやる気になっているのだ、任せてみよう。ゲイルはそう思った

「いいぜ、やってみろ。キャロ、エリオにブラストかけてやれ」

「はい。行くよエリオ君。我が請うは我が乞うは、清銀の剣。若き槍騎士の刃に、祝福の光を」

《エンチャント・フィールドインベイド》

「猛きその身に、力を与える祈りの光を」

《ブーストアップ・ストライクパワー》

キャロの両手に、二つの光がとる

「行くよエリオ君！」

「了解キャロ！でりゃああああ！」

キャロの呼びかけに答え、エリオは勢いよくフリードから飛び上がる

「ツインブースト、スラッシュ&ストライク！」

キャロの掛け声と同時に、両手の光がストラダに向かい、その力を得たストラダが、穂先に魔力刃をまとい、触手を切り裂く。列

車へと着地したエリオは、カートリッジを2発使い、狙いをガジェット本体へと向け、刃を突き出す

「一閃必中！」

《メッサーアングリフ》

ガジェットを貫いた刃をそのまま上方へと振り上げ、一気に切り裂いた。振りぬいたエリオの背後で、ガジェットが炎に包まれた

「やったあ！」

上空では、キャラが喜びの声を上げ、エリオのそばへと降りて行った。それを追って、ゲイルも列車に降り立ち、声をかける。

「二人ともよく頑張った。フリードもありがとうな」

「はい！」

「ありがとうございます！あ、レリック…」

エリオが思い出したように言うが、ゲイルが「心配ない」という

「さっきスターズのほうから通信が入った。無事確保したそうだ」

「そうですか、よかったあ」

そう言っで、二人とも表情がほころぶ。そんな二人を見ながらゲイルは

「二人とも並んでじっとしてろ。あ、キャラはその帽子とってな」

「「？」」

二人は不思議に思いながらも言われたとおりにすると、いきなりゲ

イルが頭を撫でてきた

「う、うわ！ゲイルさん！？」

「い、いきなりなんですか！？」

二人とも慌てる。顔は照れているのか赤い

「二人とも、よく頑張ったな」

その一言に、二人は一瞬動きを止めた。そんな二人に、ゲイルは続ける

「射ち漏らしがあったり、無暗に突っ込んだりまだまだ危なっかしいけど…」

「「うっ」」

この戦闘での反省点を言われ、少し嫌な顔になる二人だが、撫でられている気持ちよさにそれもすぐに消えた

「ふたりとも、よく頑張った」

「「あ、ありがとうございます」」

そう言って、ゲイルは二人から離れる

「さあて、スターズと合流…「あの！」ん？」

合流するか、と言いかけたゲイルに、キャラが声をかける

「どうした？」

「ええっと、もう一回撫でてもらってもいいですか」

少し恥ずかしそうにしながら、キャロはお願いをする。見れば、エリオも同じことを言いたそうにしている

「（そっぴゃこいつら、こういうことされた経験がないのか）」

実は、ゲイルは二人の過去を知っている

無限書庫には、新旧無数の資料がある。その中には、ルシエ一族の記録や、モンディアル家の起こした事件についての資料も当然ある。司書であったゲイルは、それらの資料に目を通したことがあった

だから知っている。二人が、必要以上に「いい子」であることを。

そんな二人が自分に要求した初めての我がままだ。断るわけがない

「ああ、おいで二人とも」

そう優しく言うと、二人に歩み寄っていき、また優しく二人の頭をなでてあげた。すると、キャロが無邪気にゲイルに言った

「えへへ、ゲイルさん、なんかお父さん見たいです」

ピシ！

世界にヒビが入ったような音がした。と同時に、ゲイルが崩れ落ちる

「げ、ゲイルさん！？」

「どうしたんですか？」

慌てて二人がゲイルを覗き込むと、ゲイルがぶつぶつとつぶやいていた

「お父さん…俺、まだ21なのに…10歳のキャロにとつちやお父さん…俺、そんなに老けてるのかなあ…確かに六課じゃほぼ最年長だけど…だからってお父さん…」

「……………」

二人は言葉を失ってしまった。特に、朝に続き本日2回目の失言をしてしまったキャロはもはや涙目である

「と、とにかく中に入りましょう！そろそろ、ロングアーチから指示があるはずですから」

「そ、そうですね。キャロの言うとおりですよ、お父さん！……あ」

キャロに続き、まさかのエリオからのお父さん発言である。ゲイルは、さらに絶望へとたたきこまれた

「エリオにまで……そうか、もう22歳はおっさんなんだな…彼女なんてできない、哀れな人生を送るんだ」

さらにネガティブに落ちてしまったゲイルを二人は必死で励ます

「だ、大丈夫ですって！ゲイルさん、まだまだ若いですよ！」

「そ、そうです！それにゲイルさんカッコいいですって！彼女なんかすぐできますって！」

「はは、二人とも、そんなに気を遣わなくていいんだぜ…18歳でババアって呼ばれてる中佐だっているんだ。21歳でお父さんなら安いもんさ…ほおらキャロ、高い高い」

「お、おろしてください、恥ずかしいですよ」

「はは、エリオは肩車だ」

「わ、ちょ、危ないですって!」

「ああ、楽しいなあ、子供がいるっていいなあ」

「「げ、ゲイルさあ」ん」

結局ゲイルが復活したのは、通信を通してエリオとキャロから助けを求められた他のフォワード陣が来てからだった

—————
??????

どこかはわからない、研究所のような場所で、白衣を着た男が今回の機動六課の映像を見ていた

「ふはははは、この案件はやはり素晴らしい」

そういった男の視線の先には、スバルとキャロ、そしてなのはの映像があった

「この子たちも実に興味深い。それに」

映像が切りかわり、今度はフェイトとエリオの映像に変わった

「生きて動いているプロジェクトFの残滓を手に入れるチャンスだ……そして何より……」

映像がまたも切り替わる。今度はゲイルだ

「まさか成功例があつたとはね……プロジェクト・S」

そういうと、男は振り返り、背後にある生体ポットの中にある何か――に語りかけた

「君も楽しみだろう?」

「――」

生体ポットの中の存在は何も答えない。ただその髪は液体に揺られていた

「ふふふふふ……」

男は、狂気に満ちた笑いを浮かべていた

それでも、その存在は変わらず、ただただ髪が揺れているだけだった

――緋色に染まった、その髪が

おまけ：レリック確保後のスターズ

「ねえねえティア」

「何よスバル」

「あのさあ、さっきの真面目な表情のゲイルさんかつこよかったよね」

「はあ、あんた、何言ってるの？」

「いや、ただ単純にそう思ったただけけど…ティアはどう思う？」

「ま、まあ、カッコいいんじゃないかしら？」

「あれ、ティアが素直に褒めるなんて、珍しいね」

「うっさい！私だってかつこいいと思ったたらそう言うわよ！」

「えへへ、ティアのツンデレ」

「ば、バカなこと言ってるんじゃないわよ！ほら、早くいくわよ！」

この後、エリオを肩車し、キャロを高い高いしているゲイルを見た二人は、口をあんどりとあけることになるのだった

第八話 星と雷、そして風（後書き）

鯉「疲れた…」

ゲ「1万字オーバーか。いつもの倍の量だな」

鯉「どこで切っていいのかわからなくなっちゃって」

ゲ「それでこの量かよ」

鯉「もう絶対ないな。さて、ここでお知らせがあります」

ゲ「お知らせ？ヒロインアンケートについてか？」

鯉「そう。そろそろ区切りをつけようと思って」

ゲ「一か月近くやってんのに、全部で5票だからな」

鯉「想定内さ。さて期限ですが、今日より2週間、8月15日午前0時までです」

ゲ「2週間で増えるのか？」

鯉「さあ、どうだろう…読者の皆様、お願いします」

ゲ「それでは、次回の更新でお会いしましょう」

鯉「感想やメッセージくれると、泣いて喜びます。それでは」

第九話 休日、悩み、そして家族（前編）（前書き）

夏休みだと時間があっていいですね。自分はバイトとサークルでほとんどつぶれてますがw

さて、今回はオリジナルストーリーとなります

一応前後編となっておりますので、今回は前編です

第九話 休日、悩み、そして家族（前編）

「ゲイルさん！おはようございます！」

「おはようございます！」

「お、エリオ、キャラ、おはよう。スバルとティアナも」

「「おはようございます」」

ゲイルとティアナたち新人は、朝の挨拶を終えとなのはの待つ訓練スペースへと向かっていた。先日の初出勤がいい影響になったようで、最近の新人たちの訓練への態度はより良いものへとなっていた。そして、変わったものがまだあった

「えへへ」

「おっと、キャラ、危ないぞ」

キャラがゲイルの腰にいきなり抱きついてきた。ゲイルも怒るようなことはなく、優しく受け入れつつ、抱きとめる。このような光景が、機動六課の中では度々見られるようになっていた。今はスバルやティアナもいる手前おとなしいエリオだが、自室に戻った時などはよくゲイルに甘えるようになっていた

「（ねえティア。キャラって…）」

「（なんか、本当にお父さんに甘えてるって感じよね…）」

キャラやエリオがゲイルに甘えている光景を見た人間は、皆ティアナやスバルと同じような感想を持っていた。それほどまでにその光景は微笑ましいものだったのだ。ゲイルのほうも満更ではない様子で、この状況を楽しんでいるのだった

「さあみんな、なのはが待ってる。少し急ごうか」

「『はい』」

そう言つて五人はなのはの待つ訓練施設へと急ぐのだった

だが、五人は気づかなかつた。その微笑ましい光景を、遠くから見ている存在がいたことに

魔法少女リリカルなのはStrikers 緋色の風

第九話

休日、悩み、そして家族（前編）

ティアナは焦っていた。早朝訓練の締めとしてなのはが提案した5対1の模擬戦は、佳境を迎えていた。もっとも爆発力のあるスバルは真つ先に落とされ、エリオもすでに離脱している。残つたのは自分と、後方支援に徹していたキャロだけだ

「（どこから攻めてくる？この二人なら接近戦に持ち込んでしまえば簡単はず…）」

そう感じたティアナは、キャロにブーストしてもらつた魔力で自分たちの姿をオプティックハイドで隠し、同時にフェイクシルエットを展開してゲイルの接近を待っていた。自分たちの幻影を攻撃した

ところを自分の攻撃で撃墜する。それがティアナの出した作戦だった

「（……………きた！）」

待ち続けた結果、好機は訪れた

ティアナの予想通り標的―ゲイルは日本刀を手に飛び込んで、幻影を攻撃する。もちろん、幻影は消える。今しかない

「クロスファイア、シュート！」

攻撃後の一瞬のすきをついた攻撃。よけきれないタイミングの攻撃が襲い掛かった。爆炎が上がり、あたりを煙が覆った

「獲った」

そう思ったティアナは、オプティックハイドを解いて姿を現してしまった。その時、ティアナとキャロの背後から声がした

「勝ったと思った時こそ気を抜くな。その一瞬が一番危険だ」

「「え！？」」

そういつて振り返った二人の先には、双銃を構えたゲイルがいた。それぞれの銃口がティアナとキャロをとらえている

「……………参りました」

悔しそうにしながらティアナが絞り出すように告げた

「はーい、終了。今日の早朝訓練はここまで。みんな集まって」

そのタイミングで、なのはの声が訓練場に響いた。フィールド全体を空から見ていた彼女が、模擬戦の終了を宣言していた。その声を聞いてゲイルはデバイスを元に戻し、ティアナに声をかける

「いい線まで行ってたんだけどな。俺が近接戦に持ち込むと読んでのフェイクシルエットはよかった」

「はい…あの、どうやって防いだんですか？絶対にあたったと思ったのに」

ティアナは不思議に思っていた。なぜ自分の攻撃はかわされてしまったのか、と。そして、ゲイルの言葉を待った

「まあ、幻術はティアナの得意技だったからな。こういうパターンはあるかも、と思ってたんだ。だからいつでもプロテクションを張れるように待っていたんだ」

「で、予想通りに幻術だったと」

ティアナがゲイルの言葉をつなぎ、先を促す

「そ。あとは普通に爆炎に紛れてソニックムーブで回り込んだってわけだ」

これでゲイルの種明かしは終了だ。それを聞いたティアナは「はあ」とため息をついた

「やっぱり、私はまだまだですね。はめたつもりがはめられてたなんて…」

「まあ、さっきのは俺がティアナが幻術を使えるってわかってたからできたことだ。作戦としては大正解だ」

そう言っ てティアナをほめる。 実際、もしゲイルがティアナに幻術があるのを知らなければ、クロスファイアをくらっていただろう

「 だけど最後のはいけないな。 うまくいったと思った時ほど気を引き締めないと な。 OK? 」

「 はい！ ありがとうございます！ 」

「 よし、それじゃあ戻ろう。 皆が待ってる 」

一通りティアナにアドバイスすると、早く合流することを促した

ここで、ゲイルの六課における仕事の話をしよう

この訓練からもわかるように、ゲイルはなのはの教導に参加している。 このような模擬戦のときもたまにゲイルが担当している。 一人で近接戦闘と中距離戦闘がこなせるゲイルは、新人たちにとってはいい練習になるのだ。 たとえば、なのはを相手にするなら、射砲撃に最大限に注意しなければならない。 だが、ハンマー、刀、双銃を使いこなすゲイルは、弱点を突くのは難しい。 相手がどの武器を使うかわからないからだ。 これにより相手の思考と、こちらの戦力を比べ、相手の行動を予測するという実戦に限りなく近い訓練形式ができるのだ

このように、基本を重視するなのはの教導においてゲイルの存在はいい意味でのスパイスとなっているのだ

「 あ、戻ってきたね。 じゃあ、今日の訓練はこれで終りね 」

全員がそろったところではが言っ たその言葉に、その場がざわ

ついた

「え？今日はもう訓練ないんですか？」

ティアナがその場の全員を代表して聞く。それになのはは笑顔で答える

「うん。こないだの初出勤とか、みんな頑張ってたからご褒美にて。ゲイル君からの提案だよ」

なのはの発言で全員がゲイルを見ると、ゲイルは少し照れくさそうに笑いながら

「まあ、みんな頑張ってるからな。一日くらいそういう日があってもいいんじゃないか？」

そついうと、全員が「ありがとうございます！」と嬉しそうに礼を述べ、ゲイルは「おう」と返す。暖かい空気になったが、なのはの発言が新人たちを絶望にたたき落とした

「明日からは個人スキルがメインになるから、ちょっと辛くなるけど頑張ろうね！」

「……はい……」「……」

「え？みんなどうしたの？いきなり元気なくなっちゃったけど……」

その一言で、新人たちのテンションが目に見えて落ちて行っただけなのはは、自分の言ってしまった内容が理解できていないように不思議がっていた

のちにゲイルは語る。「教える側と教わる側でここまで差があるも

のなのか…」と

「と、とにかく今日の教導はここまで！」

「……ありがとうございます」「……」

空気の変化に焦ったなのはが、被害の拡大を防ぐために場を占め、新人たちも挨拶をする。微妙にいつもより覇気がないのは気のせいだろう。なのははそう思うことにした

「さーて、シャワー浴びて飯行こうぜ。もう腹減ったよ」

ゲイルの言葉を皮切りに、全員で隊舎へと戻っていく。その集団の中でも、ゲイルの両脇にはキャロとエリオが陣取っていた

「二人とも本当にゲイルさんが好きなんだね」

スバルののほのんとした発言に、ゲイルは少し顔を赤くし、エリオとキャロはうれしそうに言う

「はい、大好きです！」

「僕もです！」

余談だが、二人は共通してこの後に「お父さんみたいで！」という言葉をつけたのだが、先日のリニアールの一件があるため、それは心にしまっておいた

「ほんとに仲がいいね。三人は」

なのはまで三人を微笑ましそうに見ている。それに対し、ゲイルは少し恥ずかしそうにしながら返す

「まあな。でも正直フェイトに申し訳……?!」

「どうしたの?ゲイル君?」

いきなり話を途中で切り上げてしまったゲイルを不思議に思いながらなのは尋ねる

「いや、なんか今誰かに見られてるような気がしたんだが……」
「???」

「いや、気のせいだ。さあ、早くいこうぜ」

そう言っただけでゲイルはシャワー室へと向かった

——六課隊舎 ロビー

「ふー、さっぱりした」

「ですね」

ゲイルとエリオはシャワーを浴び終わると、ロビーで女性陣を待っていた

「しかし、女の子ってのはどうしてこんなに時間がかかるんだろ
うな」

「はは、まあ、しょうがないんじゃないですか？髪乾かすのだって、長い分時間がかかるでしょうし。ほら、一番短いスバルさんだって、ゲイルさんと同じくらいだし」

ゲイルの愚痴っぽい言い方にエリオは同意しながらもフォローする。まだ10歳なのにできた子である

「まあ、そうだろうな……と、あそこにいるのフェイトじゃないか」
ゲイルがそう言ってみた先にいたのは、長いストレートの金髪の先のほうをリボンで結び、六課の制服に身を包んだ人物がいた。エリオもその姿を確認して、その人物に声をかけた

「あ、本当ですね。フェイトさん！」

エリオが大きな声で呼ぶと、フェイトはこっちに気が付いた様子で駆け寄ってきた

「おはようございます、フェイトさん」

「おはようエリオ。ゲイルも、おはよう」

「ああ、おはようフェイト」

三人は軽くあいさつを交わすと、フェイトはエリオの横に腰かけた

「今日はどこか行ってたのか？外から帰ってきたみたいだけど」

「え？う、うん、ちよつとね……」

ゲイルは何気なく聞いたつもりだが、フェイトはなにか焦ったように、何かを隠すように歯切れの悪い返事をする。不思議に思ったが、「まあいいか」と思い追求しないことにした

「フェイトさんはもう朝ごはん食べましたか？」

「ううん、まだだよ。エリオは？」

「僕たちもまだです。一緒に食べませんか？」

「うん、いいよ」

エリオとフェイトの会話は、終始笑顔に包まれていた。邪魔してはいけない、と思ったゲイルは、それをゆっくりとみていることにした

「（こうやってると、ほんとに兄弟が親子にしか見えないよなあ）」

保護児童と保護者という関係の二人だが、その絆は言葉以上のものだろう。フェイトの助けになりたくて六課にきた、ということからもそれは明らかだ。もちろん、キャロもそうである

「ゲイルさーん、お待たせしました」

「お、皆来たか。じゃあ、朝飯いくか。フェイト、エリオ、行くぞ」

「はい！」

「あ……」

そうしていると、シャワーを浴び終わったのはとティアナ、スバル、そしてキャロがやってきた。それを確認して、フェイトとエリオに声をかけるが、エリオは返事をしたものの、フェイトは名残惜しそくに声を漏らした

「？ どうしたフェイト」

「う、ううん、なんでもないよ」

そう言ってフェイトは笑うが、その笑顔はどうも何かを隠しているような気がしてならなかった。フェイトはそそくさと食堂へ向かつ

てしまった

「あ、フェイトちゃん、待ってよ」

それを見て、なのははフェイトの後を慌てて追った。それにつられて新人たちも食堂へと向かった
ゲイルも、不審に思いながら後を追った。

食堂

「ええっと、これ、本当にみんなが食べるの？」

「うん、そうだよ」

「あれ、フェイトはこれ見るの初めてだっけ？」

「うん……」

これは食堂について朝食の準備をしていた四人をみたなのは、フェイト、そしてゲイルの会話だ

三人の前には、山のように盛られたパスタと、同じだけ準備されたサラダがあった。ちなみにこれは新人たちの分だけで、ゲイル、なのは、フェイトの分は別にある

「ティアナとキャロは普通なんだけど……残りの二人がかなり食うんだよ」

「そうなんだ……ってエリオも?!」

ゲイルの発言を聞いて、エリオもかなり食べることを知らなかった。フェイトが素つ頓狂な声を上げた。エリート執務官として知られているフェイトは、六課の中以外でも多くの仕事を抱えている。それゆえ、今日のように誰かとそろって朝食、ということは難しいのだ。

「あれ、フェイト隊長知らなかったんですか?」

「うん、私とどこかで食べるときは、そこまで……」

ティアナの意外そうな声に、フェイトは自分の経験を話した。それを聞いていたエリオは

「いや、お金もかかるし、あんまり迷惑かけられないと思って……」

エリオは顔を赤くしながら答えた。秘密にしていたことがばれてしまったような、そんな表情だ。保護してもらっているうえに、余計な負担はかけられないといったエリオなりの心遣いなのだろう。

「もう、そんなに遠慮しなくていいのに……」

フェイトも苦笑いで答えた。エリオに悪気がない分、怒るに怒れないのだろう。

「ま、いいじゃねえか。ここではそんなの心配する必要ねえんだしさ。腹いっぱい食べれば、それでいいだろ?」

ゲイルの一言でこの場は収まり、それぞれの食事にとりかかった。

だが、フェイトだけはどこかすぐれない表情だったのをなのは見落とさなかった

「（フェイトちゃん、悩み事？）」「

（え？なんで？）」「

他の人間に聞こえないよう念話でフェイトに語りかける。フェイトは凶星を突かれながらもなんとかごまかそうとする

「（べべべ、別にななな、なんでもないよ？）」「

「（そんなにどもってたら、何かありますよって言ってるようなもんだよ？）」「

「（うううう……）」「

なのはの指摘に、頬をそめ小さく縮こまってしまふフェイト。目の前でそんなことをされたなのはは、思わず『そっち』に目覚めてしまいそうになる

「（か、可愛いなあ……はっ！だめだめ、しっかりしないと！ただでさえなんか変な噂が立ってるんだから！）」「

当然、なのは自信にそっちの気はない。しかし、世の中の眼はそうは見ない。見目麗しい青春真っ只中の美少女が、ういた噂の一つもないと来れば、『そっち』を疑ってしまうのはしょうがないことだろう。

「（で、何をそんなに悩んでるの？）」「

気を取り直して本題に戻ると、フェイトは観念したかのように口を開いた

「ここではなんだから……またご飯食べたら話すね」

その言葉を最後に、フェイトは食事へと戻り、7人は食事を楽しむのだった

……まあ、エリオとスバルの大食漢ぶりをまざまざと見せつけられたフェイトは、いつもの半分ほどで食事を終えることとなってしまったが

第九話 休日、悩み、そして家族（前編）（後書き）

鯉「このお父さんが！」

ゲ「お父さん言うな！」

鯉「じゃあ、ロリコンとどっちがいい？」

ゲ「……………」

鯉「まで、真剣に悩むな。話が進まん」

は「おーおー悩んでるなあ」

鯉「これはこれは、前回は通信でのみの出演、そして今回は出番ゼロの部隊長殿ではありませんか。出番確保のためにあとがき出演ですか？」

は「誰のせいやねん！あと、狙いがばれとるんが恥ずかしい！」

鯉「まあ、僕のせいですが。でも安心してください、次回はちゃんと出てきますので」

は「ほんとやね？嘘ついたらデアボリックエミッション千発やで？」

鯉「そんなハリセンボン飲ますみたいないわれかたされても……………」

は「それでは、次回の更新をお楽しみに！」

鯉「メッセージ、感想、アンケートお待ちしております」

鯉&は「ありがとうございました！」

ゲ「お父さんは嫌だがロリコンは社会的に困るな……だが、まだお父さんと呼ばれるには……」

第十話 休日、悩み、そして家族（後編）（前書き）

久しぶりの更新！ お待たせしました！

あとがきにてアンケート結果も発表しますので楽しみにしていってください！

それでは、オリジナルストーリー後編、どうぞ

第十話 休日、悩み、そして家族（後編）

「エリオとキャラが？」

ここはなのはとフェイトの自室だ

朝食の後、特に急ぎの仕事がなかったためフェイトの相談に乗ろうとなのはは自室までフェイトを引っ張ってきて話を聞いていた。そこでフェイトの口から出てきたのは、彼女が保護者を務めている二人のことだった

「うん。もともと私に対してはあんまりわがまま言ったりしなかったんだけど……」

そう心配そうに言うのはフェイトだ。日ごろのフェイトに対するキャラやエリオの態度を見ていればわかることだが、二人は『いい子』なのだ。それこそ、必要以上に

「最初は、それでもいいと思ってたんだ。いつか、時間がたてば大丈夫だろうって。でも……」

「……ゲイル君だね」

なのはの指摘に、フェイトは黙ってうなずいた。エリオとキャラのゲイルに対する態度は、第三者であるなのはから見ても仲が良すぎる。本人には言えないが、初対面の人間に『親子です』と紹介しても納得してしまうだろう。それぐらいに仲がいいのだ

「確かに、仲いいよね」

「うん。だから、心配になっちゃうんだ。私、本当に二人の保護者

できてるのになって」

だが、二人と最も長い期間一緒にいたフェイトにとってはその態度を自分にも取ってほしいのだろう。自分がゆっくりと時間をかけて詰めてきた距離を、一気に追い越されてしまったような、そんな感覚にフェイトは陥っていた

「ゲイルが私と違うのはわかってるんだよ？でも、なんかこう、すごく寂しくなっちゃうんだよね」

「フェイトちゃん……」

フェイトはなのはが心配そうに自分の名を呼ぶのを聞いて慌てて付け足す

「あ、別にゲイルに嫉妬してるとかじゃないんだよ？ただ、あの二人を見てると思い出すんだ。昔のこと」

「昔のこと？」

不思議そうに首をかしげるなのはを前に、フェイトは続ける

「そう、ゲイルが、初めてアースラに来た時のこと」

「ああ、そのことか。確かに、ゲイル君と私たちがあったのってエリオやキャロと同じくらいだね……」

なのはも、同じように昔を思い出した

「あのころのゲイル君、私たちより小さかったよね」

「そうそう。で、私もなのはも同じ年って勘違いしちゃったんだよね。しかも、こないだ再開するまでずっと」

小学生の男女を比べれば、女子のほうが成長が早いことが多いが、ゲイルは特にその傾向が大きかったのだろう。二人は、そう思いながら話を続けていた

「で、一緒に任務に何回が出るうちに、いつの間にか私たちの中心にいたんだよね」

「うん。だから、よくわかるんだ。エリオとキャロがゲイルになつくわけが」

そう言いながら、フェイトは話を本題へと戻していった。それを聞いたなのは、本来の目的を思い出した

「でも、フェイトちゃんとしてはもっと自分にも甘えてほしいと」「うん、まあ、言っちゃえばそんなところかな」

なのはは確認したものの、自分にはどうしようもないのではないかと感じ始めていた。自分には本当の子供はもちろん、フェイトのよくな保護児童もいない。ゆえに、母の気持ちはわかり難いものだと、そこまで考えたところで、あることに気が付いた

「（あ、いるじゃん、私たちに年が近くて、お母さんやってる子）」

それに気付くと、その人に相談するのが一番と感じ始めたなのは、迷わず行動することにした

「フェイトちゃん、ちょっと相談しに行こうか」

「？ 誰に」

「私たちと同じ年で、お母さんやってる子のところ」

魔法少女リリカルなのはStrikers 緋色の風

第10話

休日、悩み、そして家族（後編）

「で、私のところに来たんか？」

「うん。はやてちゃん、ヴォルケンリッターにとってはお母さんみたいじゃない？」

なのはが頼ったのはこの部隊の部隊長であるはやてだった。はやてとなのは、そしてフェイトは同じ年だが、幼少時の経験から家事全般をこなし、その上守護騎士たちヴォルケンリッターを「うちの子たち」と呼ぶはやては確かに『母性』は一般的な19歳よりは強いだろう

しかし

「？ どうしたのはやて？」

「ああ、別になんでもないんよ……」

みればはやては何か悟ったような表情をしてつぶやいていた

「お母さん…まだ19で結婚もしてへんのお母さん…うちの子みんな私より年上なのに……」

「ええと、はやてちゃん、ほんとに大丈夫？」

「大丈夫だよ。ただちよっと、現実のあり方に反逆したくなっただけだから…」

「……」

自分より年下の子供たちを引き取ったフェイトと違い、はやてのヴォルケンリッターたちはみな年上だ。それなのに、お母さんと呼ばれることにはやては抵抗があるらしい

「はあ、将来結婚するときはあの子らも引き取ってもらわないかなのやろか…」

「だ、だいじょうぶだよはやて！ゲイルならヴォルケンリッターのみんなも受け入れてくれるよ！」

「なんでゲイル君の名前が出てくるん!？」

はやてを落ち着かせるためにフォローを入れるフェイトだが、そこにゲイルの名前を出したのがいけなかったらしく、逆にヒートアップしてしまった。それを、第三者として見ていたなのは話を本題に戻そうとする

「あの…はやてちゃん？そろそろ本題に入りたいんだけどいいかな？」

「う…まあええやろ。フェイトちゃん。あとでゆつくり話しようか」「????」

わけがわからない、といったような表情のフェイトをひとまず置いておき、「そうやなあ」と考えながらはやてが切り出す

「フェイトちゃんとしては今のエリオたちとの関係がいやなん？」

「うーん、いやって訳じゃないんだけど……」

「でも、ゲイル君と仲良くするんは悔しい、と」

「悔しいっていうか……まあ、ちょっとうらやましいかな」

「なるほどなあ」

話をまとめたところで、小さく息を吐いた後ははやては自分の経験を混ぜて話す

「あの子らがうちに来てしばらくしたところかな？ ヴィータが近所の老人会のゲートボールにすっかりのめりこんでしもつてなあ」

「あ、それ聞いたことあるよ。たしか、まだ海鳴市にいたころの話だよな？」

なのはがはやての話に合いの手を入れると、「そうそう」と答えながらはやては続ける。ヴィータは、海鳴にいたころは近所の老人会で行われているゲートボールに参加していたのだ。

「そのころなんやけど、ヴィータがえらいおじいさんたちになつてしもつてなあ」

老人たちからしてみれば、ちょうど孫のような年齢の外見であるヴィータは本当の孫のように見えたのだろう。仲良く接していくうちに、ヴィータのほうもすっかり仲良くなってしまったというわけだ

「あ、それって……」

「そう。ちょうど今のフェイトちゃんとエリオ、キャロ、それにゲイル君とおんなじような感じや」

フェイトが気が付いたように言うと、はやても苦笑いしながら肯定する。おそらく、自分の過去を思い出しているのだろう

「それで？ ヴィータちゃんはとうだったの？」

なのはが話の先を促す。フェイトもすっかり聞き入っているようだ。今の自分たちの関係に限りなく近い話に、引き込まれているのだろう

「ん？ なんもないよ？ そりゃ、少しうちに帰ってくるんが遅いときもあつたけど、普通通りや」

「「え？」」

あつさりと出てきた話の落ちに、なのはとフェイトは思わず間抜けな声を出してしまった。はやては、二人を見ながら言う

「家族なんてそんなもんや。フェイトちゃんにとってエリオやキヤロは家族やし、二人にとってお母さんはフェイトちゃんだけや。ゲイル君は、ええとこ近所のお兄ちゃんつてとこちゃうか？」

「ええと、つまり……？」

「フェイトちゃんはフェイトちゃん、ゲイル君はゲイル君なりのかかわり方があるってことや。わかるか？」

「う、うん……」

自信なさそうにうなづくフェイトの前ではやてはもうひと押しと言わんばかりに続ける

「家族以外から影響を受けるなんて普通やし、エリオもキヤロももう10歳や。いろんな人から影響を受ける年ごろやし、このままでもええと私は思うよ？」

「そう、かな…」
「そうや」

そこまで言ったところで、部隊長室に沈黙が広がる。なのはもはやても、何も言わなかった。今は、フェイトが自分で答えを出さなければいけないことだから

やがて、フェイトは吹っ切れたように少し笑顔を浮かべて言った

「私、もう少しこのままでいようと思う。私は私なりのやり方で二人と向き合っていこうと思う」

「それがええよ。ほな、この話は終いでええか？」

「うん。ありがとうね」

「気にしなや。ところで、お仕事の話やねんけど……」

フェイトの結論が出たところで、この話はおしまい、と言わんばかりに仕事の話をはやては始めてしまった。なのはもそれについていく

「（今はこれでいいんだ）」

そんな二人を見ながら、フェイトは考えていた

自分はどこまで行っても自分なんだ。ゲイルにはゲイルの、私には私の付き合い方があるんだ、と

「（あの二人のお母さんになってあげられるのは、私だけなんだ）」

「なあフェイトちゃん。そっちはどう思う？」

「え？そうだね…」

一つ答えの出たフェイトは、そのまま仕事の話へと入っていくのだ
った

「遅くなっちゃったな…」

あたりはすっかり暗くなり、時計も7時を指している。部隊長室ではやてと話した後、シャーリーのところでガジェットの残骸の画像を解析していたところで、ある重大な情報が浮かび上がってきた。それについていろいろ調べているうちに、気が付いたらあたりはすっかり暗くなっていたのだ。それほどまでに、ガジェットから得ることができた

「まさか、ジェイル・スカリエッティが絡んでたなんて……」

ジェイル・スカリエッティ

生命操作や生体改造、精密機械に通じた謎の多い科学者で、数多くの事件で広域指名手配されている次元犯罪者であり、ある理由から、フェイトが長年追ってきた犯罪者でもある。その犯罪者がなぜ、レリック事件にかかわってくるのか、全く見当もつかないでいた。しかし、この戦いが一筋縄ではいかないことは確かとなった

「これまで以上に気を引き締めていかないかね」

一人決意を新たにするフェイトだったが、突然、彼女のお腹からかわいらしい音が響いてきた

「……………
……………
……………
……………
……………」

女性にとってはあまりに恥ずかしい現象に、思わず顔を真っ赤にしてみました。同時に、周りに人がいなかったことに心底安心した

「は、はやく食堂にいこ…」

またなつちやう前に、とフェイトは食堂へと急いだ。夕食をとるには少し遅い時間だったため、食堂には誰もいないだろうと思っていたが、その予想は間違っていた

「あ、フェイトさん！」

「お仕事お疲れ様です！」

食堂に入ると、フェイトを待っていたのは誰もいない閑散とした空気ではなく、温かい子供たちの声だった

「エリオにキャラ？それにみんなも。どうしたの？」

誰もいないと予想していたフェイトは、この状況に驚いていた。エリオ、キャラ、スバルやティアナまでもが食堂にいたからだ。さらに、後ろからも声をかけられた

「エリオとキャラが、フェイトさんにご飯を食べるんだって言って、ずっと待ってたんですよ」

「で、私たちも先に食べるのもなんだったんで一緒に待ってたんですよ」

ティアナとスバルがこの状況をフェイトに説明すると、思わずフェイトはエリオとキャラのほうを振り返った。二人は恥ずかしそうに笑いながら、食事の準備を進めていた

「もう、遅くなるし、先に食べちゃってもよかったのに…」

困ったように笑いながら二人に言うと、すぐに二人から反応が飛んできた

「僕たちが一緒に食べたかったんだから気にしないでくださいよ」
「そうですよ、フェイトさんとはあんまり一緒にいられないから、
こういう時じゃないと」

そういう二人の顔は楽しそうに笑っていた。その笑顔を見ると、朝から悩んでいたことがばからしく思えてくる

「…そうだね。じゃあ、一緒に食べようか」

「はい!!」

二人に声をかけ席に座ると、「じゃあ、私たちはあっちで食べてきますね」といって入れ替わりにスバルとティアナが席を立った

「あれ？二人ともごはんまだなんだよね？一緒に食べようよ」

その行動に驚きながらフェイトが呼び止めるが、それに反応したのはティアナだった

「いや、私たちはもうちょっと待って、ゲイルさんと食べます」
「あれ？ゲイルもいるの？」

ここにいない名前が出てきてフェイトは不思議そうに聞いた。この場にいなかったのもうてつきり食事をとってしまったのかと思っていたのだ

「あゝ、その、なんといいですか…」

「ええ」と、不慮の事故といいますか…」

「????」

歯切れの悪い態度に、フェイトは不思議な顔をしていると、ティアナがあきらめたように告げた

「実は、今日が提出期限の書類がありまして…」

「へ？」

「で、その書類をゲイルさんがすっかり忘れていたそうで、今大急ぎで仕上げているところだそうです…」

ティアナとスバルが苦笑い交じりに告げた理由にフェイトは反応に困ってしまった

基本。フェイトはそういった書類は計画的に仕上げてしまう性格であり、期限もしっかりと自分とバルディッシュで管理しているため、そういうことは今まで一度もないからだ

「（そうそう、ゲイルさんからの伝言です）」

「（ティアナ？）」

フェイトがゲイルのことを考えていると、不意にティアナから念話が飛んできた

「（『たまには二人との時間を大事にするように』だそうです）」

「（！！ うん、わかった。ありがとうティアナ）」

「（お気になさらず）じゃあ、私たちはゲイルさん待ってますね」

「うん。じゃあ、先にいたどうか、エリオ、キャロ」

「「はい！」」

そう言つて、三人は食事を始めた。その光景は、どこから見ても家族の姿だった

「あ、ゲイルさん！」

「おお、ティアナ、スバル。うまくいったみたいだな」

「はい、ばっちりです」

食堂から少し離れたところで、ゲイルとティアナ、スバルは合流した。先ほどのフェイトとティアナの会話でもわかるだろうが、実はこの状況、ゲイルが仕組んだことだったのだ

「三人とも、楽しそうに食事してましたよ」

「そうかそれは何よりだ。あいつら、互いに気を使いすぎだからな」

そう言つてため息を吐くゲイルに、スバルが少しからかうように聞いている

「とか何とか言つて、ほんとにゲイルさんさびしいんじゃないですか？二人とはいつも一緒にいるし」

それに対し、ゲイルは「アホか」と言って説明する

「あいつら、俺に話すことの大半はフェイトのことだぜ？それ聞いたら、たまにはこうやって一緒にご飯食べさせてやるぐらいしてやりたくなるよ」

確かに、エリオとキャロはゲイルになついている。しかし、それでも彼らの中で大部分を占めているのはフェイトのことだ

「あの二人、ほんとにフェイトさんのこと好きなんですネ」

「二人とも言ってたよ。『フェイトさんは自分たちのことを助けてくれた。だから、今度は自分たちがフェイトさんを助けるんだ』ってな」

ティアナのつぶやきに、ゲイルはエリオたちの言葉を借りて答えた
三人は、少し離れたところから食事をしているフェイトたちを見ていたが、不意にスバルのお腹がなった

「スバル、アンタ……」

「あはは、ごめんなさい……」

ティアナが咎めるようにスバルをにらむと、スバルも苦笑いで謝った。それを見て、ゲイルも楽しそうに笑う

「はは、まあ、昼からだいぶ時間も空いてるから仕方ないだろ。さて、俺たちも飯食いに行くか」

「え？でも、今出て言ったら見つかったちゃいますよ？」

「そ、そういえばそうだな……」

もし今出ていけば、フェイトはすぐ自分たちを見つけてしまうだろう。そうなれば、せつかくの家族だんらんを壊してしまう。ティアナの心配はそこだった

「そうすると、三人が終わるまで待つしかないな」

「そうですよね…」

「えゝ？私お腹すいちゃいましたよゝ」

長期戦を覚悟していた三人にだが、そこに神が舞い降りた

「あれ？三人とも何してるん？」

「「「はやて（八神部隊長）？」」「」」

食堂の近くで迷っていた三人に声をかけたのははやてだった。そこで、ゲイルは事情を話す

「実はかくかくしかじかでな」

「いや、それじゃ通じませんから…」

「なるほどなあ、食事にしたいけど、今出て言ったらフェイトちゃんたちのだんらんを壊してしまうと…」

「「通じた！？」」「」

驚いている二人に、はやては「念話や」と種明かしし、ゲイルに話しかけた

「しゃあないな。あんまり遅くならんのやったら、外で食べてきてもええよ」

「いいのか？」

はやてからの予想外の許可にゲイルが驚きながら確認をするが、は

やては「ええよええよ」と言っつて許可を出した。はやても、ちょうど午前中に相談されたこともあり思うところがあつたようだ

「でも、あんまりおそうなつたらいかんよ？」

「了解だ。ほら、スバル、ティアナ、行くぞ。おごつてやる」

「ありがとうございます」

「ごちそう様です！」

「……いや、いいんだけどさ、そこは少しぐらい遠慮しようぜ、別にいいけど」

だが、ゲイルは知らなかった。この提案に、後々後悔することになると

ミッドチルダのとあるレストランにて

「おいしい……！あ、ウェイターさん、ここからここまで、全部持つてきてください！」

「……………」

すでに両脇に皿を高く積み上げながら、まださらに注文を続けるスバルを見て、ゲイルは静かに席を立った

「どうしたんですか？」

自分の食事をとりながらティアナは隣に座るゲイルに尋ねた

「ちょっと金おろしてくる」

「ええ」と、なんか、ごめんなさい……」

この日、このレストランは最高売上額を記録した

一方、ゲイルは一日の食費最高額を記録していた

第十話 休日、悩み、そして家族（後編）（後書き）

と、言うわけでエリキャラ&フェイトの家族のお話でした

さて、ではお待ちかね、ヒロインアンケートの結果発表を行います
全票一気に行きます。なお、最終票の中には作者のリアル友人から
の票も含まれております

それでは、どうぞ！

フェイト 1票

ティアナ 3票

はやて 4票

スバル 5票

以上の結果になりました。よって、ここからはスバルルートで進め
ていきます！

それ以外に投票された人も、もし余裕があればIFなんかも書いて
みたいなあとにあります。まあ、すべては完結後になります

最後になりましたが投票してくださったネガティブ妄想者先生、イ
ツキ先生、マグネス先生、rei先生、軍の狗先生、ありがとござ
いました

ヒロインはスバルになりましたが、たくさんの方が楽しめる作品にしていきたいと思いますので今後ともよろしく願いします

感想、メッセージなどお待ちしております。それでは、次回の更新でお会いしましょう

第十一話 出張、地球、そして海鳴市（前編）（前書き）

久方ぶりの更新です

今回はSS1の出張任務、その出発前までをお送りします

それでは、どうぞ！

第十一話 出張、地球、そして海鳴市（前編）

「う…ん、もう朝か……」

八神はやての朝は早い。

といっても、朝食前に訓練を行っているのはたちと比べれば余裕はある。年相応の少女がやるように、睡眠中にいた汗を流すためにシャワーを浴び、顔を洗う。だが、ここからは普通とは違ってくるまず、管理局の制服に袖を通す。そして、自分専用の端末を立ち上げ、メールをチェックする。彼女の階級のこともあり、その内容はほかの人間には話せないようなものも存在する。

「ええと、今日のは特に重要な…もないな……今日は隊舎での事務仕事やなあ」

どうやら今朝送られてきたメールには、そこまで重要なものもないようだ。少し肩の荷が下りたように軽く伸びをする。すると、彼女の端末が新たなメールの受信を知らせてきた

「新しいメール？差出人は……あら、カリムやないか、朝から連絡来るなんて珍しいなあ」

送られてきたメールをさつそく確認すると、差出人は自分が義姉としたい、機動六課の立ち上げに際してもかなりの協力をしてもらった、聖王教会のカリム・グラシアからだった。個人的な親交はあるし、仕事の関係で会いにいったりもしていたが、早朝から連絡が来

るのは珍しいようだ

「ええっと、内容は……あら？出張任務？こちらはレリック専門のはずなんやけど……」

その内容を読んでいるうちに、はやての顔は最初は驚きに、そして次第に喜びに染まっていった

「むにやむにや……えへへ、もう食べられないですう」

その横では、リインがテンプレのような寝言を言っていた。というか、実際にこんな寝言を言う人間はいないと思われる

魔法少女リリカルなのはStrikers 緋色の風

第十一話

出張、地球、そして海鳴市！

『お呼び出します。スターズ分隊、ライティング両分隊の隊長、副隊長は至急部隊長室まで来てください』

朝の訓練場に、呼び出しのアナウンスが流れている。そこでいった

ん訓練が止まる。それと同時になのはが集合をかけた

「皆、いったん集まって〜！」

「……はい！」「……」

掛け声とともに新人たち、そして教導を行っていた（正確にはアイゼンでスバルをぶつ叩いていた）ヴィータ、ライトニングの回避訓練を見ていたゲイルが集まった。それを確認してなのはが口を開く

「ええつと、みんなも聞いてたと思うけど、私とヴィータ副隊長が八神部隊長に呼び出されてしまったので、ここで抜けます。あとはゲイル君、お願いできる？」

「了解だ」

「……！！！！」「……」

なのはがゲイルに後を託したところで、スバルたちの表情が変わった。一人はやる気に満ちた表情に、二人は楽しみにするように、そしてもう一人は絶望に染まっていた

新人たちの緊張の理由、それはゲイルの教導のやり方だった。普段は教導の締めとして模擬戦の仮想敵^{アグレッサ}をやることが多いが、時と場合によっては今回のように教導を行うこともある。だが、新人たちにとってはこれが鬼門だった

「（ゲイルさんの教導……）」

「（今回もあれをやるんでしょうか……）」

ゲイルの教導は、言ってしまうえば『頭脳訓練』なのだ。スポーツなどでもそうだが、体を鍛えるだけでは勝率は上がらない。大事なのは、訓練でやったことをどう実戦で使うか、である。実戦において

の頭の回転速度を上げること、そのための訓練が、このゲイルの訓練なのだ。なのだが…

「（ま、また頭が痛くなるう〜〜〜）」

頭を使うよりも体で覚えるタイプであるスバルにとっては、この訓練はヴィータとの教導と同等の疲労感を伴うのだ

「うゝし、それじゃあやるぞゝ…って、スバル、なに始まる前から頭抱えてんだ？」

「うゝ、私、あのゲーム嫌いです……」

そう、ゲイルがやっているのはただのカードゲームである。自分の手札にある規則に従って場にだし、一番最初にすべての手札がなくなった人間が勝ち、それだけの単純なルールである。ちなみにライトニングの二人は、この教導がお気に入りである。今まで経験がない分、みんなでゲームするのが楽しいのだろう。ティアナはもとところいったものは得意であるため、そこまで苦にはならない。そうすると、必然的にスバルだけが苦手意識を持つことになる

「まあ、そういうな。自分の持てる技をどうさばくかってのも、大事な練習だぞ？」

「わかってますけど……」

スバルが煮え切らないというように愚痴を言う。いい加減早く始めたいゲイルは軽く脅しをかけることにした

「そんなにいやならF Aの個人スキルに戻るか？俺がぶっ叩いてやるぞ？」

「さ、やりましょうカードゲーム！ほらほら、みんな早く集まって

！」

先ほどまで行われていた苛烈な訓練を思い出したスバルは、態度を一転させた。それほどヴィータの訓練がきつかったのだろう。かくしてゲイルの『頭脳訓練』が始まった。始まったのだが……

「よし、ここで2です！」

「甘いなスバル。ほら、ジョーカーだ」

「な、なんで！？もう一枚で上がれるのにいゝ」

「アンタねえ……今ジョーカー切らないでいつ切るのよ……」

「しかもスバルさん、こういう時残ったカードって大体弱いんですよ……」

「その上ゲイルさん、ちゃっかり今のジョーカーで残り一枚になってますし」

このように、スバルが追いつめられることが多い。なんというか、カードの切り方が下手なのである。結局、一番負け越しているのはスバルということになっているのだ

ちなみに、勝ち越しが多い順にゲイル、ティアナ、エリオ、キャロ、スバルとなっている

こうして、普段とはちょっと違ったゲイルの教導は過ぎて行った

同時刻 部隊長室にて

「出張任務？」

「そうや。緊急出動がなければ、三時間後には出発や」

スバルが訓練場で悲鳴を上げていたのと同じころ、呼び出されていたのはとフェイト、シグナム、そしてヴィータははやてから出張任務を告げられていた。

「あれ？でも、うちはレリック専門なんだよね？」

フェイトが、朝はやてが持ったものと同じ疑問を持った。だが、それをはやてはやりわりと否定する

「そうなんやけど、レリックの可能性も捨てきれんそうや。で、遺失物管理課も機動課も手が離せず、うちに回ってきたゆうことらしいわ」

はやての説明で「なるほど」と納得したのはフェイトだけでなく全員だった。おそらく、なのはたちも疑問には思っていたのだろう。続けてシグナムがはやてに尋ねた

「ところで主はやて、出張任務の行先は？」

「おお、そうやった、忘れとった！！」

ボン、と手をたたき、軽く興奮をしたように行先を四人に告げたその内容に、なのはたち四人は最初は驚いたが、次には朝のはやてと同じ表情になっていた

「そつえば、ゲイルさんのバイクって、ミッドチルダではあまり見ないタイプですよね」

早朝訓練が終わり、午前の書類仕事をしていたゲイルに、ティアナが不意に話しかけてきた

「何だ、ティアナはバイクに興味があるのか？」

ゲイルもこれを邪見に扱うことなく、仕事の手を止めずに返した

「はい、一応免許も持ってます」

「ティア、運転うまいんですよ」

会話が聞こえていたのか、今度はスバルものってきた

「そうだったのか。で、俺のバイクについてだったよな」

「はい。ミッドではあまり見ないタイプだなと思って」

納得したようなゲイルにティアナが再度質問すると、ゲイルは丁寧に答えた

「ああ、あれはミッドチルダで製造されたもんじゃないんだ」

「ああ、だからこっちじゃ見たことが無かったんですね」

ティアナが納得したように言うと、「そういうこと」とゲイルが言った

「でも、ミッドじゃなかったら、どこか別の次元世界で造られたってことですか？」

今度はスバルだ。見たところ仕事が進んでいるようには見えないが大丈夫だろうか

「ああ、第97管理外世界、地球だな」

心配ではあったものの、ここで会話を終わらすのはおもしろくないので、ゲイルはそのまま会話を続けることにした。仕事は最悪後から手伝えばいい。そう考えていると、スバルが何かに気付いたように言った

「あれ、確かそこって、私のご先祖様が…」

「ついでになのはとはやてもその出身だ」

「名前の響きも似てるしな」とゲイルは付け加えた

「ということは、ゲイルさんもその？」

「いや、俺は違うよ」

ティアナの質問には否定で返した。事実、ゲイルの生まれはミッドチルダだ

「あれ、じゃあなんで地球製のバイクに？」

そうなってくると、この疑問が出てくる。地球に住んでいたことがないゲイルが、なぜ地球製のバイクに乗っているのか、そもそもなぜその存在を知っていたのか

「いや、実は一回地球には行ったことがあってな。その時たまたまあれと同じバイク見つけて、スゲーかつこよかったから免許とってすぐに買いにいったんだ」

「なんか以外とミスターな理由ですね……」

「うるせえ。実際乗りやすいからいいんだよ」

スバルの一言に的確にツツコミを入れ、買った当時のことを懐かしむようにゲイルは振り返った

「いやああなときは大変だったよ。こっちでとった免許を地球のと同じ造りにしたり」

「それって、所謂偽造書類になるんじゃない……」

ティアナが的確にツツコミを入れてみると、横から「でも」とスバルが会話に入ってきた

「そのバイクのこともそうですが、なのはさんたちの世界ってどんなところなんですか？」

「それなら、みんなもこれから行くから自分で見てみたらいいんじゃないかな？」

スバルの疑問に答えたのは三人の後ろからの声だった。そろって振り返ると、そこにはなのはの姿があった

「「なのはさん！」」

「やあ。二人とも、お仕事頑張ってる？」

スバルとティアナが揃って声をあげ、なのはがそれに笑顔で答えた。そして、ゲイルにも声をかける

「ゲイル君も、最後任せちゃってごめんね」

「いや、大丈夫だ。それよりも、さっきのはどういうことだ？」

ゲイルが聞いているのは、なのはが言った『これから行く』という発言についてだ。スバルとティアナも、不思議そうにしている。そんな三人なのはは先ほどよりもさらに笑顔になって言いになった

「フォワード一同、これより二時間後に第97管理外世界地球での出張任務に出発します!!」

第十一話 出張、地球、そして海鳴市（前編）（後書き）

携帯からの更新のため、後書きはおやすみさせていただきます

第十二話 出張、地球、そして海鳴市（中編？）（前書き）

みなさんどうも、鯉太郎です

今回も引き続き出張任務編です

ですが、まだ地球にはつきません。いろいろ詰め込んでいたら、話が全く進みませんでした……

第十二話 出張、地球、そして海鳴市（中編？）

「無理やゆつてるやんか！そんな転送ポートで転送できるわけないやろ！」

「だ〜か〜ら〜！そこを部隊長権限でどうにかってお願いしてんじやねえか！『向こうでの移動手段が〜』とか言ったら一発OKだつて！」

ライトニング分隊の二人、エリオとキヤロに出張任務について伝え、自分は少し残った作業をしていたため遅れて屋上に上がったフェイトが見たのは、バイクの横で大きな声で言い合っているはやてとゲイルだった。止めなければ、と思いつつも、原因がわからないのでどうやって止めていいのか迷っていた

「む、テストロッサか。作業は終わったのか？」

「あ、シグナム。作業は終わったんですが……ええつと、これは一体どういう状況なんですかな？」

自分が屋上に上がってきたことに気が付いたシグナムに、フェイトはこの状況の説明を求め、シグナムはそれに応じた

「ああ。まあ、至極くだらないことではあるんだがな」

そう言ってシグナムは説明を始めた

「我々は普通に出撃の準備をしていたんだがな。スカーレットのやつが自分のバイクを向こうにもっていきたいと言い出してな。主はやてはだめだといったんだが、やつが聞かなくてな」

「要するに、言い争いというよりはゲイルのほうがわがままを言っ

てるということですか?」

「まあそういうことだ」

フェイトはそこで一つため息をついた。自分の取りこし苦労だったことに安心したようだ。だがそうすると一つ疑問が残る

「でも、なんでシグナムは止めないんですか? ヴィータも」

「それはだな…」

「実際勝手がいいんだよ。あいつのバイクは。あっちで造られたバイクだから、走ってても違和感ないしな」

シグナムの言葉を引き継いだのはヴィータだった。その説明で、フェイトは「なるほど」と納得し、二人を見た

「私がどうこの問題や無いんや! サイズ的に無理やるゆうてるんや!」

「そんなわけあるかよ! 俺はこれ買ったとき普通に転送してもらえたぞ!」

「ほー! やつたら転送ポートで受け付けてもらえたら持つてつてええわ!」

「よっしゃ! 今に見てろよ! 絶対に持つてつてやるからな!」

どうやら二人の間では決着がついたようだ。そうならば、さっさと乗ってしまったほうがいいだろう

「さあ、みんな早く乗って。出発するよ!」

「「「はい」「」」」

なのはの声で新人たちが順番に乗っていった。それからヴィータ、シマル、シグナムと続き、最後にフェイトが乗り込んだ(ゲイル

とはやては先に乗っていた)

「全員乗りましたか?じゃあ、出しますよ!」

そう言つてヴァイスはヘリを発進させた。こうして、出発前に多少のゴタゴタはあったものの、機動六課は出張任務へと向かった

「ヴァ、ヴァイス!ヘリ戻せ!バイク積むの忘れた!」
「はあ!??たく、何してんだよお前は!」

魔法少女リリカルなのはStrikers 緋色の風

第十二話

出張、地球、そして海鳴市(中編)

「そういえば、ゲイルさんって、出身はどこなんですか？」

転送ポートへ向かう途中のヘリで、キャラは不意にゲイルの出自を訪ねる。と同時に、隊長陣に少ばかり緊張が走った

「キャラ、キャラ？どうしてそんなこと聞くのかな？」

フェイトが恐る恐る尋ねると、キャラは何の疑問も持たず、素直に答える

「前にみんなの出身地の話をしたことがあったんです。それで、ゲイルさんはどこの出身なのかなと思って」

「そ、そう……」

フェイトはそう言ってゲイルのほうを見た。その顔は、「どうするの？」とゲイルに尋ねているようだった。見れば、なのはとはやても同じような顔をしてこっちを見ていた。だが一方で、フォワードの新人たちは逆に聞きたそうにしている。こうなってしまうては、ゲイルとしては拒むことはできない

「実は、俺もよく知らないんだ」

「「「はい？」」「」」

ゲイルの言葉に、四人は驚きの声を上げた。そのまま話を続ける

「実はさ、俺自身自分がこの出身かわからないんだ」

「えと、どういうことですか？」

ティアナの疑問はもつともだろう。エリオのように本局育ちであればそう答えるだろうし、一般の生まれなら普通に出身世界を言えばいいだけのこと。それなに、ゲイルは『知らない』と答えたのだ

「ああ、記憶喪失って言うやつだと思う。最初の記憶は、病院のベッドの上。医者がいろんな検査してたのが最初だ。んで、適性があるってことで管理局入りしたってところだ。」

「そうだったんですか……」

ティアナのつぶやきを最後に、ヘリ内を沈黙が覆った。初めて知った四人はショックを受けていたし、知っていた隊長陣もやはり暗くなってしまった

「ま、まあ！記憶なんて無くっても生きていける。それに魔道士適性があったから、こうやってお前たちと会えたんだ。それでいいじゃないか」

そう言っただけでゲイルは笑った。彼は、この場を収めるためではなく、本心からそう言っていた。それが皆にも伝わったようで、幾分想い空気は晴れた

「ところでリインは向こうでどうすんだ？その恰好じゃ、さすがにまずいだろ」

「あ、そうでした。シャル、持ってきてくれましたか？」

「はい、準備してありますよ」

話題を変えるためにリインに話を振ると、ゲイルの意図を理解したかどうかはわからないがなにやらシャマルに準備してもらっていたようでそれを確認し、シャマルがあるものを渡した。それは、子供の服だった

「子供服？」

「はい、はやてちゃんのお下がりです」

新人たちとゲイルは、心の中で『そんなことが聞きたいんじゃない！』と突っ込もうとしたが、その様子を見てリインが思い出したように言う

「そういえば、ゲイルたちには見せたことが無かったですね。システムスイッチオン！アウトフレームフルサイズ！」

リインがそういうと、彼女は光に包まれ、その光が晴れると、そこには7、8歳程度の大きさになったリインがいた

「っと、一応このくらいのサイズにはなれるですよ」

と、大きくなったリインは自慢げに胸を張ってそう言った

「でか！」

「いや、それでもまだ小さいけど…」

「リイン曹長可愛いです！」

ティアナとスバル、キャロがそれぞれ感想を言っているそばで、ゲイルは一人顎に手を当てて考えていた

「？ どうしたんですかゲイルさん？」

「ああ、ちよつと考えごとしててな」

「考え事？」

エリオが声をかけると、ゲイルはその内容を独り言のようにつぶやいていた

「ああ、こうやって見ると、この世界からロリコンがいなくならない理由がわかるなあと思ってた」

「……………」

たつぷり五秒ほど、再び沈黙が艦内をおそっ

「…あれ、俺なんか変なこと言った？」

ようやく自分が何らかの失言を犯したことに気が付いたことに気付いたゲイルがすつとぼけた声を上げると、「ゲイル…」と名前を呼ばれ、振り返るとリインが頬をそめている

「えと、そのリイン困るです。リインはデバイスですし、それにはやてちゃんのこともありますし…／／／／／／」

「ちよ、リイン！ 何変なことゆうてるんや！？」

この発言で、ゲイルはようやく理解した。自分の発言は『自分はロリコンです』と宣言したようなものであることを

「ち、違う！俺はロリコンじゃない！」

「……………」

必死に弁明するも、周りの反応は冷たい。まだ赤くなっているリインと、先ほどの発言でリインを問い詰めているはやて以外は、全員沈黙を保っていた。心なしか、距離も広がっている気がする

「なあ、なんとか言ってくれよ！」

「ゲイル君の変態」

「キャラに近づかないで」

「近寄るな」

「こつち見んな」

「どんまい」

「撃ちますよ」

「キャラは僕が守ります！」

「ゲイルさん、信じてたのに……」

「ガッデエエエエム……！」

そう叫び、一人隅のほうでorzになっていたゲイルだが、そこに救いの手が差し伸べられた。スバルだ

「大丈夫ですよ、ゲイルさん。私はわかってます！」

「スバル、お前……」

感動でゲイルの涙腺が緩む中、スバルは拳を握り、力強く言い放った

「ゲイルさんはつまりこう言いたいんですね。Yes、ロリータ、NO、タッチと！」

「死んだ！神は今死んだ！」

泣きながら再びorzになってしまったゲイルを見て、「あれ、違

った？」とスバルがおろおろとしている後ろで、他の全員の心中は全く同じだった

「……………（スバル（さん）、無意識でトドメさしてるぞ）
さしてます）」……………」

ちなみに、スバル以外の全員、冗談100%でからかっていたりする

「ああ、でも、ロードと一緒に娶ってもらえば……………」

「ちょ、ライン！思考が飛びすぎやで！しかもなんで私までゲイル君のお嫁さんに!?!」

こっちもこっちで、収束にはもう少しかかりそうである

「誰か、このカオスな空間をどうにかしてくれ……………」

操縦席のヴァイスのつぶやきは、後部の喧騒とヘリのローターの音にかき消され、だれにも届くことはなかった

一方、そのころ機動六課ではちょっとしたトラブルが起きていた

「魔力反応が？」

「うん。大きさはあったんだけど、すぐに消えちゃって」

はやてがいない今、六課での指揮を任されているグリフィスはシャリーからの報告を聞いていた。彼女曰く、リーダーに魔力反応があったが、それがすぐに消えてしまったとのことだった

「それに、反応があった魔力パターンが、ちょっと妙なんだよね」

「どういうことだ？」

「うん。ちょっとこれを見て」

そう言ってシャリーから渡された書類にグリフィスは目を通し、最後まで目を通したところで結論付けた

「多分リーダーの誤作動だろう。この人の魔力パターンが、そんな場所で検出されるわけがないよ」

「やっぱりそう思うよね。ヘリのコースからかなり外れてるし」

どうやらシャリー自身もそう思っていたらしく、この反応は機械の故障ということで片づけられた

「ちょっと、リーダーの調整してくる。部隊長が出てるんだし、できることはやっとかないと」

「そうだね。じゃあ、僕もいっしょに行くよ」

そう言っつて二人は指令室を出て行った

グリフィスのデスクに置かれた書類は、専門的なグラフや用語が並び、素人にはわけがわからないものであった

だが、その中において、最後の一行だけは、誰にでも判別が可能であり、そこにはこう書かれていた

今回検出された魔力パターンは、ゲイル・スカーレット空曹のものと推測される

これが何を意味するのか、わかる人間はここにはいなかった

第十二話 出張、地球、そして海鳴市（中編？）（後書き）

次回、ようやく地球での任務になります

そして、とうとうヒロインのあの方が動き出します

といっても、砂糖をまき散らす心配はありませんのでご安心ください

それでは、また次回の更新でお会いしましょう

感想、評価、ご意見などお待ちしております！

第十三話 出張、地球、そして海鳴市（中編？）（前書き）

出張任務終わりませんでした……

まさかの4部構成となった海鳴出張任務、そこで、ゲイルに起こったアクシデントとは？！

本編をどうぞ！

こうして、フォワード隊ははやてたちに先駆け地球へと向かった

魔法少女リリカルなのはStrikers 緋色の風

第十三話

出張、地球、そして海鳴市（中編？）

転送ポートで光に包まれたゲイルたちが次に目にしたのは、どこかの湖畔のコテージのようなところだった

「どう？ミッドとあまり変わらないでしょ」

そうなのはが言うと、ティアナたち初めて地球に来た新人たちも、その自然を満喫していた。すると、そこに一台の車がやってきた

「なのは、フェイト、久しぶりじゃない！」

「「アリサ（ちゃん）！」」

車から降りてきたのは、ショートカットにした金髪が目立つ、美しい女性だった。年のころは、おそらくなのはたちと同じくらいだろう。フェイトと三人で話しているところを見るとおそらく友人なのだろう。しばらくぼーっとな様子を見ていたティアナたち四人を見て、

フェイトが申し訳なさそうに言った

「あ、紹介するね、私やなのは、はやての友達で、幼馴染の…」

「アリサ・バニングスです」

「……よろしく願います!」「……」

「よろしくね。で、こらそこの赤頭!」

四人とのあいさつを済ませたアリサは、その後ろにいるゲイルを呼びつけた

「赤じゃねえ! 緋色だ!」

「はん! どっちだって同じでしょ! それよりも、ずいぶんと久しぶりじゃない」

「あいにくと、暇じゃないんでな」

「あたしだって暇じゃないわよ! 大学生なんだから」

「学生と一緒にすんな」

ゲイルも売り言葉に買い言葉で、アリサに乗ってしまい、再び四人は置き去りにされてしまった

「ごめんねみんな。あの二人、会うといつもああやって口げんかになっちゃうんだよね」

「でも、あれも二人なりのコミュニケーションの取り方なんだ」

笑顔で説明するフェイトとなのはに、エリオがもっともな質問をした

「あの、フェイトさん。ゲイルさんとアリサさんって、お知り合いなんですか?」

「うん。私たちがまだ海鳴市にいたころ、アリサと、後もう一人友

達を呼んで、ゲイルと一緒に遊んだことがあるんだ」

「そうそう。最初にあった時からあの二人は変わらないよねえ。さあ、そろそろお仕事だよ。準備して。ほら、ゲイル君も。せっかくバイク持ってきたんだから、しっかり働いてもらおうよ！」

言い合っているゲイルになのはが声をかけると、ゲイルもしぶしぶといった様子でなのはのほうに来た

「で、どうするんだ？」

アリサとのやり取りから仕事モードへと切り替えたゲイルは、真面目な語調でなのはに尋ねた。もちろん、これからの行動についてだ

「そうだね、サーチャーの設置と探索だから、いくつかのチームに分けようかと思うんだけど…」

「そうか、チーム分けはもう決めてんのか？」

「ううん、今考えてるところなんだ。グレンには探索魔法は？」

《設定されています》

「ううん、じゃあ、リインは中距離探査を。サーチャーの設置はライトニングに任せて、私とティアナ、ゲイル君とスバルに分かれて移動しながら探索しようか。一応、クロスミラージュにも簡易版だけど探索魔法が積んであるから」

「……了解（ですう）」「……」

「うっし、準備はいいか、スバル？」

「はい、いつでもオッケーです！」

なのはとルートをすり合わせた後、俺はバイクのところで待っているスバルのところへ向かった。あらかじめ持ってきておいた予備のヘルメットをかぶり、バイクの後ろに乗っているスバルは、あこがれのなのはの故郷ということもあるのか、かなり興奮しているようだ

「よし、じゃあ出るか。落ちんなよ？」

「大丈夫です！よくティアナの後ろに乗ってたんで！」

素晴らしい笑顔で言うスバルだが、果たしてそれは自慢できることなのか？

まあ、言ってもしょうがないのでバイクを出すことにした

「グレン、ナビゲート頼むわ」

《了解です》

「よっしゃ、じゃあ、行くか！」

「はい！」

そう言っただけで探索に出発した。だが、今の時間はまだ日も高い。ロス・トロギアに知性があるかどうかは知らないが、自己防衛レベルでも知能があればこの時間に捕まることはめったにないといっていける。そう思いながら運転していると、後ろからスバルが話しかけてきた

「ゲイルさんゲイルさん！」

「どうした？」

信号待ちなので、そこまで大声で話す必要はないのだが、スバルの声はよほど興奮しているようだった。まさか、反応があったのか？

「あそこ！アイス屋さんがあります！」

どうやら、反応したのはスバルのアイスセンサーだったらしい。ていうか、よく見つけたな

「なんだ、よりたいのか」

「はい！」

すげーはつきりとした返事が返ってきた。もしティアナと一緒にいたら、絶対我慢するんだろうなあ

「……あまり時間はとれねえぞ？」

「大丈夫です！ささつと食べちゃいます！」

ここで寄つちまうところが俺の甘いところなんだろうなあ

そう思いながらも、ウィンカーを出して、駐車スペースでバイクを止めた。あまり余裕がないので、車とかに混ざった場所で停める

それから、アイスを買って、しばらく休憩していると、不意にスバルが話しかけてきた

「ゲイルさん、あのバイクって、ゲイルさんのですよ？」

「ああ、そうだけど？」

それがどうしたというのだろうか？

「あたしちょっと動かしてみてもいいですか？」

なんと、動かして見たいときた。まあ、ティアナの後ろにも乗ってみたいだし、興味がわいたのだろう。幸いここは私有地、つまり法律は関係ない

「……ちよつとだけだぞ」

まあ、時間もあるし大丈夫だろう

そう思った俺はバイクに鍵をさし、バイクをスバルの前に持ってきた

「ありがとうございます！」

嬉しそうにバイクにまたがると、俺のしぐさで覚えたのだろう、ちゃんとクラッチを握りセルを回した。だが、ここで問題が起きた

車でもそうだが、ミッション操作というのは意外と難しい。回転数とクラッチを合わせるのが、初心者には難関だ。いくら後ろに乗ったことが多いからといっても、こればかりは経験しないとわからない

「うわ！？と、止まっちゃった！？」

スバルもご多分に漏れず、失敗してエンストを起こしてしまった。

「つととと！？」

そして、運悪くスバルはバランスを崩してしまった

さあ、ここで考えていただきたい

俺のバイクは排気量1300CC、地球（この世界）では、大型バ

イクと言って特別な免許が必要だ。その重さは260?ほど。その重さを、バランスが崩れたほうの片足だけで支えられるだろうか、答えは、否である

「きゃあ!」

「!」

なれた人間なら、バイクを捨てて逃げるのだが、スバルはそれをできなかった。人のばいくということもあつたのだろう

とつさに俺はハンドルにかつたままのスバルの腕を引っ張り、無理やりバイクから引きはがした。次の瞬間、ガシャアーン!と大きな音を立ててバイクは倒れてしまった。まあ、しょうがない。スバルが助かっただけ良しとしよう

「ふう。スバル、大丈夫だった…か……」

そう声をかけようと、俺は腕の中を見た。そう、『胸元にスバルを抱えた腕の中』だ。どうやら、バイクから引っ張った時にそのまま抱きかかえてしまったらしい

「(な、え、えええええええ!?)」

一瞬で俺の思考はフリーズしてしまった。スバルもスバルで、よほど怖かったのか身を縮こまらせて俺の腕の中で目をつむっている。身長差が20?以上あるので、すっぽり収まっている

「う、あ、あれ?」

そこで、自分がこけていないことにようやく気が付いたスバルは、

ようやく目を開け、自分の状況を理解したらしく、俺とは逆に下から見上げる、いわゆる上目使いだ。いままで硬く閉じていた分、その眼は軽くうるんで涙目になっている

「……………／／／／／／／／」

そして、だんだんと頬が赤くなっていく

「（やべえ、超可愛い……………）」

有体に言って、今俺が抱いているスバルは美少女だった俺はどうしていいのかわからず、そのまま固まってしまった

ああ、女の子って、すげーやわらかいんだな……………

うわーどうしよう!?

バイクで転んだと思ったら、次の瞬間にはゲイルさんに思いっきり抱きしめられてて、どうしていいかわかんないよお……………

多分、転びそうになった私を助けてくれた拍子のことなんだろうけど、無意識だからこそ逆に恥ずかしいというか……………

ああ、それにゲイルさんの体、見た目は細いのにすごくがっちりし

てる。やっぱり男の人って、包容力あるんだなあ

pipipi

「「うわあ（うおお）！！」」

そんなことを考えていると、あたしのマツハキヤリバーとゲイルさんのグレンが同時に通信を知らせるアラームを発した。って、もうこんな時間！？

「げ、ゲイルさん、急がないと！」

「ああ、通信も、たぶんなのはからだろう！運転中で気づかなかったことにするぞ！早く乗れ！」

「はい！」

と、そこまで来て私は気づいてしまった後ろに乗るということは、再びゲイルさんに密着するということだ

「何してんだ、急げって！」

さっきまでは普通にしてたのに、一度意識してしまうと、妙に恥ずかしくなってくる。そうだ、普通にしていればいいんだ。そうそう、バイクの後ろに乗るんだから仕方がない、仕方がない

「よし、出すぞ」

「はい！」

そう言っただけゲイルさんはバイクを出した。さっきまでよりゲイルさんが緊張しているように感じたのは、きっとなのはさんに怒られる

と思っていたからだろう

その後、合流地点でなのはさんに怒られた後、なのはさんの実家の喫茶店に行っただけで、さっきのことのせいであまりよく覚えていなかった。途中で、ゲイルさんがなのはさんのお父さん（すごく若く見えた）にどこかに連れて行かれて、帰ってきたらぼろぼろになっていた。しきりに「なのはとはそんな関係じゃないんです。本当です。信じてください。お願いします」ってつぶやいてたけど、何があったんだろう？

「あ、スバルてめえ！それはあたしんだ！」

「甘いですヴィータ副隊長！バーベキューは弱肉強食、早い者勝ちです！ってああ！シグナム副隊長！それは！」

「甘いぞスバル。自分で言っていたではないか、早い者勝ちだと」

時間は流れ、夕食時。合流したなのはの姉の美由紀、クロノの妻であるエイミィ、そしてフェイトの使い魔アルフ、そして、久しぶりにゲイルと再会したすずかとともにはやてが準備した夕食に舌鼓を打っている（というよりは、戦闘を繰り返しているテーブルもあるが）ゲイルに、同じテーブルに座っていたエイミィが話しかけてきた

「それにしても、ゲイルが前線に戻るって聞いたときはびっくりしたよ」

「そうだな。あの事件以来、全く音信不通だったから」

アルフもその話題に乗ってくる。ゲイルは、苦笑いしながらそれに返した

「まあ、その話はご迷惑をおかけしたと思います」

「あはは、いいよおそんなの。むしろ私は安心してゐるんだよ。ゲイルはやっぱり空が似合うよ」

ちなみに、この二人はゲイルが無限書庫に務めるようになった理由も知っている。まあ、アースラに勤めていたので当然と言えるが

ゆえに、彼女たちは嬉しかった。あれほど空を飛ぶことを楽しんでいた少年が、挫折を超えて、空に戻ったことが

「ありがとうございます」

二人の心からの心配が伝わってきたので、ゲイルはもう一度、深くお礼をした

「（出張任務、来てよかった）」

そう思いながら、ゲイルはゆっくりと食事をとっていた
こちらのテーブルは、スバルたちのテーブルと違い、実にゆったりと食事をとることができた

第十三話 出張、地球、そして海鳴市（中編？）（後書き）

というわけで、今回は銭湯前までをお送りしました

今回は、スバルさんにようやくヒロインらしいイベントが！
次回の銭湯編でしっかり弄らせていただきます

次回の更新で、長かった出張任務も終わりの予定です

それでは感想、ご意見などお待ちしています

第十四話 出張、地球、そして海鳴市（後編）（前書き）

ようやく出張任務編完結です

最初に断わっておきますが、作者は変態ではありません。仮に変態だとしても、変態という名の紳士です

それでは、本編をどうぞ

第十四話 出張、地球、そして海鳴市（後編）

「これより、みんなでスーパー銭湯へ向かいます！」

おいしかった夕食を終え、片づけもひと段落したところで、なのはが宣言した

どうやら、このコテージには風呂が無いようで、だからと言って湖で水浴びという季節でもない。そこで、海鳴市にあるスーパー銭湯へ向かうことになったのだろう

「ゲイルさん、すーぱーせんとうってなんですか？」

「俺も知らん。前に来たときは行かなかったからな」

だが、初めて地球に来たエリオたちにはスーパー銭湯なるものがないのかわからなかったようで、ゲイルに尋ねている。しかし、この件についてはゲイルもわからないようだ

「ああ、スーパー銭湯っていうのはね……」

そんな五人の様子に気付いたなのはが説明を始める
いろいろ説明されたが、ゲイルは『でかくていろんな種類がある風呂』と理解しておいた。おそらく間違っていないだろう、とゲイルは思った。何はともあれ、少し楽しみになってきたゲイルだった

魔法少女リリカルなのはStrikers 緋色の風

第十四話

出張、地球、そして海鳴市

「いらっしやいませ〜 海鳴スパラクーアへようこ——団体様ですか？」

受け付けの女性がマニュアル通りの声をかけようとして、すぐに変えた。17人が一気に入店したら、まあそうなるだろう。その女性に、なのはが人数を告げる

「え〜と、大人13人と、子供4人です」

「なのは、子供は5人だろ。エリオ、キャロ、アルフにリイン、それからヴィー」
「なんか言ったか？」
「——なんでもありません、ヴィー
タお姉さま」

なのはに人数の間違いを指摘しようとしたゲイルだが、首元に突き付けられたグラーファイゼンを見てすぐに訂正した

そんなこともあったが、無事全員風呂に入る段階まで来たのだが、ここでまた問題が生じた

「エリオ君、一緒に入ろう？」

「わたしも、一緒に入りたいな」

「え、そ、それは、スバルさんや隊長たち、それにアリサさんたち

もさんもいらっしやいますし…」

11歳以下の男児は女湯に入ってもいい、という決まりを利用して、フェイトとキャロがエリオを女湯に連れて行こうとしているのだ。

エリオは必死にスバルたちがいることを盾にして逃げようとするが、

「私は別にいいわよ」

「ていうか、前から頭洗ってあげようかっていつてるじゃん」

「私たちも別にいいわよね？」

「うん」

「別にいいんじゃない？みんなで仲良く入れば」

このように、全員が全員気にしないという、エリオからすれば絶体絶命の状況になってきた。こうなると、もう勢いで女湯に連行されかねない

「（げ、ゲイルさん）」

「（全く、しゃあねえな）」

エリオの助けを求める念話に、ゲイルが助け舟を出す

「ほら、フェイトもキャロもあんまり言っでやるな。たまには二人で、男同士の語らいでもやらしてくれよ？」

そう言っでエリオの首根っこをつかみ、男湯のほうへと引っ張っていった。後ろのほうでフェイトが何か言っていたが、ここはエリオのためだと無視して男湯の暖簾をくぐった

「ありがとうございます、ゲイルさん」

「なに、気にするな」

二人は入った男湯で服を脱ぎながら話していた

「しかし、惜しいことしたなおまえ」

「何がですか？」

不思議がるエリオに、ゲイルは少し冗談めいたように言う

「なに、もう俺くらいになっちまうと女湯なんて入れないからな、見とけるときに見とくべきだったかもしれんぞ？」

「な、何言ってるんですかゲイルさん！僕はそんなに興味はないです！」

「え、女湯に興味ないのか？それはそれで…」

「そ、そうじゃなくてですね！ああ、もう！」

普段は弄られるほうなゲイルだが、たまにこうやって弄るほうに回ることがある（その対象がほとんどの場合エリオかキャロなので、あまりほめられた光景ではないかもしれないが）

「さ、行くぞエリオ、背中流してやる」

「あ、はい、お願いします」

この後、お互いに背中を流しあいながら、二人はのんびり過ごすのだった。だが、それはキャロという天使《悪魔》によっていとも簡単に打ち砕かれてしまうことになるのだが、ここでは割愛させていただく

さて、ここからは女湯の描写へと移る。そういつた描写に嫌悪感を抱くかたや、（もしいれば）女性の読者は、「あれ？キヤロは？」というセリフのところまで飛ばしていただいて結構である。というか、そうすべきである

所変わって、こちらは女湯

いまのこの場所はもはや一つの理想郷と化していた。その光景を、『詳しく』描写していきたいと思う。そう、詳しく、だ

まずはなのは

管理局内でも、アイドル扱いであるなのは、そのプロポーションも一級品である。ウエストからヒップへかけてのラインは、まさに絶品ともいえる。フェイトのように、ボン、キュ、ボンというような体ではないが、すべての要素が合わさって一つの芸術品となっていた。小さすぎず、かといって小さすぎないそのバストは、サイズこそフェイトに劣るものの、バランスという面では完璧であるといっても過言ではないだろう。8年の局員としての生活体の結果、運動が苦手だったころの名残はなく、無駄なく鍛えられていた

次にフェイト

なのはと同様に管理局内でもトップクラスの人気を誇る彼女は、その比較物的物静かな性格や控えめな言動とは逆に、自己主張の激しいスタイルを誇っている。グラマラスという言葉が最も似合うのは彼女だろう。初対面の人間、特に男性の目を引くであろうそのバストは、もはや絶品という言葉ですら言い表すことができない。触れる

ことができなくても、見るだけで質感の伝わってくるそれを目にすることができれば、それだけでおなか一杯になってしまっただろう

続いてはやて

上記の二人同様、人気のあるはやては、二人に比べてプロポーションがよくないといわれることが多いが、それは決して彼女が劣っているわけではない。むしろ、彼女がもし日本で生活していれば、グラビア誌でトップを飾ることさえ不可能ではない。日本人特有の白くきめ細かい肌は、いやらしい気持ちを持っていなくても頼ずりをしたくなるような魅力がある。三人の中で誰が一番美肌か、という話題になれば、おそらく彼女が一番だろう。比較的大きなおしりは、浴槽のふちに腰かけているためふにやっと歪んでおり、それがまたひどく扇情的である

さらにティアナ

同年代の少女に比べると、いささかほっそりとした印象を受けるティアナだが、決して貧相な体をしているわけではない。出る場所に出ているし、引つ込むところは引つ込んでいる、いわゆるスレンダーな体つきだ。細身の体も肉がついていないのではなく、必要最低限まで絞られており、まさに『機能美』という言葉が似合う体をしており、その美しい脚は『カモシカのような』という表現がピッタリであり、無駄のないその体は彼女の性格がよくあらわれている

最後にスバル

今風呂場にいるメンバーの中では、最年少（ヴィータを除く）の彼女だが、そのスタイルは同年代の標準を大きく上回っている。フロントアタッカーというポジションの関係もあるだろうが、二つ年上のティアナよりも肉感的な体をしている。バストも同年代より大きく成長しており、軽く日焼けした肌やショートカットの髪型から醸し出されるボーイッシュな印象とは対極の印象を与え、女性と少女

の中間にあるアンバランスな魅力を醸し出している

そのほかの女性たちも詳しく描写していきたいところだが、文字数の関係上、非常に残念だが断念せざるを得ないことを心からお詫びしたい

「あれ、キャラは？」

スバルが気が付くと、ティアナもつられて周りを見渡した。確かに、そこにはキャラの姿はなかった

「まあ、露天風呂にでもいるんじゃない？ それよりもスバル」
「??」

「あんた、ゲイルさんと何かあったの？」

「くあwせdrftgyふじこ1p；@：！?！?！?」

「とりあえず落ち着いて、あと人間の言葉でしゃべって頂戴」

ティアナに、今自分の中でもトップクラスの問題であるゲイルのことを聞かれて、あわてまくってしまった

「なんだなんだ？スバルはゲイルのことが好きなのかあ？」

「その話、私も詳しく聞きたいなあ？」

「エイミイさんにアルフまで…」

結局スバルは、三人に押し切られる形で何があったのかを白状させられてしまった

「で、結局好きなのか？」

そんな直球で聞いてきたのはアルフだった。それに対しスバルはあわてて否定する

「ち、違います！そんなんじゃないですって」

「じゃあ、嫌いなのか？」

「そうじゃないですけど……」

ここで嫌いだと言ってしまえる相手ならよかったのだが、あいにくとスバルにとってゲイルはそんな簡単な存在ではなかった。迷っているスバルに助け舟を出したのはティアナだった

「ゲイルさんは優しいし、面白いし、私たちの面倒もよく見てくださるので……」

のろけ、というよりも本心からそう思っているのだろう。顔を赤くしながらそう答える

それは好きなんではないか？と言ってしまつのは簡単だったが、だれもそうは言わなかった。これは、スバルが自分で答えを出さなければならぬからだ

「まあ、いいんじゃない？しつかり悩めば。もし違うならそれでいいし、本当に好きなら応援してあげるわよ」

「ティアナ…ありがとう」

そつぱを向きながら言ってティアナに、素直に返すスバル。ティアナの顔が少し赤いのは、きっと湯のせいだけではないだろう

「うーん、でもよかったなあ。ゲイルも、ちゃんと人づきあいやってんだなあ」

「そうだね。ちょっと安心したよ」

感慨深そうに、アルフとエイミーが言う

「どういうことですか？」

何のことかわからない二人は、不思議そうに尋ねる

「まあ、昔いろいろあつてな。あいつ、ふさぎ込んでたんだよ」

「あのゲイルさんですか！？」

今のゲイルしか知らない二人にとって、ふさぎ込んでいるゲイルというのは想像できなかったのだろう。驚く二人をよそに、次はエイミーが口を開いた

「で、そのまま配置が変わっちゃって、しばらく会えなかったんだ」
「だから、今のゲイルを見て私たちは安心してるんだ」

そう言う二人の顔は、まるでゲイルの姉のようだった

「（ゲイルさんもいろいろあつたんだ）」

その話を聞いて、スバルは素直にそう思った

「（もしまた、なにかあったら、今度はあたしが支えられるくらい強くなりたいなあ）」

裏も表もなく、スバルは素直にそう思っていた

一方、こちらではなのは、さすが、アリサ、そしてはやてがかたまつて浴槽につかっていた

「ところではやて、あんたゲイルとはどこまで行つたのよ？」
「ぶっ！」

アリサの直球の質問に、はやては思わず吹き出してしまった

「な、何ゆつてんのやアリサちゃん？私とゲイル君はそんな関係やないで？」

何とか一言返すと、すずかとアリサはとたんに残念そうな顔をしてしまった

「ねえなのは、はやてつてもしかして……」

「そうなんだよ。まだ告白もしてないんだ。せつかく再会できたのに、一緒に空飛んで終り、だよ」

「なのはちゃん！？何を言ってるん！？」

「はやてちゃんって、意外と奥手なんだね……」

すずかにまで言われてしまい、はやてはもうボロボロである。ここではやては、起死回生に一手を切ることにした

「なのはちゃんこそ！ ユーノ君とはどうなってるんや！？ こないだのお休み（第九話参照）のとき、ユーノ君から通信もらってたいやけど！？」

「にゃゝ?! なんではやてちゃんがそれを!?!」

一瞬にしてアリサとすずかの標的がなのはへと向かった。慌ててごまかそうとするのはだが、もう遅い。根掘り葉掘り、それこそ8年分言わされてしまった。その後ろで、ほっと一安心するはやてだった

「ほな、そろそろあがるか」

そうやってはやてが声をかけると、全員が順番に出ていき、身支度を整えていると、クラールヴィントとケリュケイオンに反応があった。おそらく、男湯では、ゲイルのグレンが反応していることだろう

隊員たちは素早く身支度をする、デバイスを起動させて出撃していった

「頑張んなさいよ」

「怪我しないようにね」

アリサとすずかに見送られ、はやてたちは任務へと向かった

「なんだ、ありゃ…」

「なんといいですか……」
「戦いにくいですね……」

現場についたフォワード＋ゲイルの目の前に現れたのは、何とも形容しがたい生物だった。いや、もはや生物なのかどうかさえも怪しい、弾力のあるシャボン玉のような形をしていた。しかも、一体ではなく群れを成していた

「か、可愛いです！」
「……どこが!?」「……」

キャラの意外な好みが明らかになったが、ロストロギア自体の知能は低く、危険性も低いとのこと。ただ、危険を察知するとダミーをたくさん生み出usrらしい

「なら、とつと全部撃破しまえばいい!!」

「あ、ゲイル君ちよ——」

「ウインドバレット、ファイア!」

ゲイルの掛け声で一斉に発射された風の弾丸は、寸分たがわずすべてを貫き、戦闘不能に追い込んだ、ダミーを生成する力も残っていなかったようで、一体だけになっている

「うっし、キャラ、封印処理を——て、どうした」

ゲイルが振り返ると、全員が「やっちゃったよこの人」といったような表情をしていた。すると、グレンから通信越しでもわかるくらいに怒っているはやての声がした

「ゲイル君、私、ヘリの中でゆうたよなあ? 依頼主から、できれ

は無傷で捕獲してほしいって言われとるって』

「あ」

いまごろ思い出したのか、ダラダラと汗がゲイルの顔を流れる

「む、無傷ですって言えるレベルの損傷じゃね？」

『あんだけガッツリダメージ通しといてごまかせるかドアホー』

「――！」

夜の海鳴市に、はやての叫びがこだました

この後、ミッドに帰ったはやては、ゲイルを連れて依頼主に必死で謝りまくったが、彼はとてもおおらかな性格で、「気にしなくてもいいよ。捕まえてくれてありがとうね」と言ってくれたので、事なきを得ることができた

「だから言っただろ？ 大丈夫だって」

「ゲイル君、土下座とデアボリック・エミッション、どっちがええ」
「超ごめんなさい」

その土下座は、実に華麗でもはや一つの芸術だったと目撃者は証言していた

第十四話 出張、地球、そして海鳴市（後編）（後書き）

それぞれのスタイルについては、完璧な作者の主観ですのでご了承ください

さて、今回は問題のホテル・アグスタ編です

果たして、魔王は降臨するのか！？

次回もお楽しみにしていってください

感想、ご意見などお待ちしています

第十五話 再開、プロジェクト、覚醒（前書き）

四日連続の鯉太郎です

今回からアグスタ編に入ります

あのキャラも出てきますので、お楽しみに

第十五話 再開、プロジェクト、覚醒

この部隊に自分がいていいのか

これが八神部隊長に六課に誘われたとき、最初に感じたことだったけど、自分に言い聞かせた。これはチャンスだ。兄さんがかなえられなかった、今は私の夢である執務官になるためには、この機会を利用しない手はない、と

結局スバルの後押しもあり、私たちは機動六課に入った

それからの日々はとても刺激的だった

なのはさんの教導もそうだし、ゲイルさんとの模擬戦も、今までとは全く違ったものだった

そして、なんとか初出勤もこなして、出張任務も経験した

でも、それもスバルがいて、キャロがいてエリオがいてできていることだ

果たして、本当に私自身は強くなれているのだろうか

魔法少女リリカルなのはStrikers 緋色の風
第十五話

再開、プロジェクト、覚醒

「はい、今日の訓練はここまで！」

日は傾き、空が茜色に染まるころ機動六課の海上訓練施設になのはの
声が響き渡った。それを聞いて、なのはの下でトレーニングをし
ていたティアナはデバイスを待機状態に戻し、スバルやキャロ、エ
リオはそれぞれ訓練と一緒に行っていたヴィータ、ゲイルとともに
集まってきた。そして、ゲイルがなのはに話しかける

「どうした？今日はえらく早いじゃないか。新人たちも、あんまり
疲れてねえみたいだし」

ゲイルの言うとおり、新人たちにはいつもに比べ余裕が見える。い
つもなら、肩で息をし、体力がほかの三人に劣るキャロなどは、う
っかりケリユケイオンをしまい忘れるほどだ

そういうことを考えると、ゲイルの疑問はごく普通だと思われるが、
周りの反応は『何言ってるんだこいつ？』とでも言わんばかりの反応
である

「な、なんだ？俺、なんか変なこと聞いたか？」

あわてるゲイルにヴィータが呆れたように告げる

「バカかお前は。明日は出勤があるから今日は軽めにして上がるって、最初になのはが言ってただろうが。聞いてなかったのか？」

「……………」

「……………」（聞いてなかったんだ）「……………」

ヴィータの言葉にあさつての方向を向いて無言を貫き通すゲイルを見て、なのはと新人たちは心の中で全く同じことを考えていた。彼女たちの目の前では、ヴィータが「やっぱり聞いてなかったんだなこの野郎！」とゲイルに向かってグラーファイゼンを振り回していた。余談だが、この光景は機動六課ではよく見られる光景だ。失敗をした部隊内でも年長のゲイルを、見た目最年少のヴィータが叱るというある種滑稽な状況に、最初は隊員たちも戸惑っていたが近頃では「ああ、またか」といった感じになっていた

「と、とにかく今日の訓練はこれでおしまい！明日の任務については後で送っておくから各自でしっかり確認しておいてね。それじゃ、解散！」

「……………」お疲れ様でした！「……………」

このままでは締まらないとおもったのはが、とりあえず訓練を終了させ、ヴィータとゲイルの仲裁に入っていた。新人たちは、苦笑いでその光景を見ているしかなかった

「今日も副隊長とゲイルさん、面白かったね」

「ええ、そうね」

訓練の後、シャワーを浴び食事も終えたスバルとティアナは、自室にて就寝の準備をしていた。そこで、そこで、スバルが先ほどの光景を思い出して笑っていたのだった。だが、それに対するティアナの反応はひどく冷たいものだった。不思議に思ったスバルは、ティアナに問いかけた

「ティア、どうかした？元気ないよ？」

「うん、ちよつと考え事してた」

「考え事？」

ティアナの答えは、考え事をしていたといったものだった。そのまま、ティアナは続ける

「ほら、いつもはあんなふうになどどこか抜けてたり、おつちよこちよいなところがあるけど、ゲイルさんも凄腕の魔導師…あゝ、ベルカ式だから騎士だったかしら？でしょ？」

「あゝそついえばそうだよね」

ティアナのいうことにスバルは相槌をうつた

普段はバイクでこけたり、伝達事項を忘れていたりヴィータにどつかれたりなど、抜けているところが目立つゲイルだが、普段の模擬戦や出勤などからもわかるように、かなりの凄腕騎士だ。だからこそ、ティアナは気になっていた

「でしょ？なのになんで未だに空曹で、しかもBランクよ？おかし

いと思わない？」

「そういえば…なんでだろうね？Bランクって、私たちやエリオとおんなじだもんね」

言われてみればそうだ、とスバルは思った。あの可変型デバイスのグレンを完璧に使いこなし、そのうえ管理局内でも少ない、『風』の魔力変換資質を持っている。多少いい加減なところはあるものの、自分たちのような階級が下の魔導師に対しても面倒見がいい。そんな彼が、なぜ自分たちと同じBランクに留まっているのか

「まあ、あの人のことだろうから重要な書類を出し忘れたとか、そんなところなんでしょうけど」

「あはは、あり得るねそれ。魔導師ランクは、受けるのが面倒だったからとか、かな？」

割と真面目な疑問だったはずなのに、結論は彼のその人格ゆえの失敗だと予想されてしまった

「まあ、私たちがどうこう言ってもしょうがないことだし、忘れて、もう寝ましょう。明日は出勤なんだし」

「そうだね。じゃあ、おやすみなさい」

そういつて二人は電気を消し、それぞれのベッドへと入った

だが、この疑問は、今のゲイルを形成する大きな要因になっているなど、二人は全く想像もしていなかった

一方、ゲイルは屋上にいた。その口には、普段は吸わないタバコが咥えられていた。手すりに寄りかかり、ぼんやりと上空を見上げて

いる。どうやら、だれかを待っているようだ

「たばこ、吸うんだね」

ひとりしかいなかった屋上に、女性の声を通った。ゲイルが入り口を見ると、そこにいたのはなのはだった

「やめたほうがいいよ。体に悪いし、うちは未成年の隊員も多いんだから」

そう言いながらゲイルの隣まで歩いてきた。あまり喫煙者によりたがらない女性もいるが、なのはは気にしないタイプらしい

「だからこうやって夜の屋上で吸ってるんだよ。それに、めったにすわねえから、そこまで外害はない」

そうやって、ゲイルはタバコの火を消した。どうやら、他人がいるところでは吸わないらしい

「ところで、どうしたの？ 行き成り呼び出して。ひょっとして告白？」

「バカか。お前にゃユーノがいるだろうが」

「にゃゝ？！／／／／／／／／／／」

からかおうとしたのはを、逆にからかってやるゲイル。だが、本題はもちろんこれではない

「お前さ、ティアナのこと、どう思ってる？」

「どつって？」

なのは疑問で返すと、ゲイルは説明を始める

「ああ。ちょっと焦ってんじゃないかと思ってさ。言い方は悪いけど、お前の教導は基礎重視の、割と地味なタイプだ。ティアナみたいに、自分に劣等感持つてるタイプには成果がわかりにくいだろう？」
「……そうだね」

なのはは、素直に認めることにした。だが、一つ、どうしても訂正しておきたいところがあった

「でも、ティアナは優秀な子だよ。劣等感なんて、必要ない」

そう言ったなのはの眼は真剣だった。それはゲイルにもしつかりと伝わっている

「……それは俺じゃなくて、ティアナに言ってやれ。あいつもお前に言われんのが一番うれしいだろうから」

だから、こう一言アドバイスするだけに留めた

「うん。気を使ってくれてありがとね」

そう言って笑うのはだった

だが、ゲイルのこの判断は失敗だった。この時なのはは、「言わなくてもわかってくれる」と考えていた。それが後々悲劇を引き起こすことは、このとき二人には全く想像できなかった

翌日 ヘリの中にて

ゲイルたちは、はやてとフェイトから、この一連のガジェット出現の首謀者と思われる、ジェイル・スカリエッティの説明を受けていた

「こっちの捜査は私が進めるけど、みんなも一応覚えておいて」

フェイトがそう言うともニターが切り替わり、これから向かう任務についての解説となった

それを最後まで聞いた後、ゲイルが確認する

「要するに、ロストログリア反応をレリックと間違えたガジェットが襲ってくるかもしれんから、その対策ってことでいいのか？」

「そうだね。それに、ここまで大きいオークションだと、密輸なんかの隠れ蓑になったりもするし……」

「なるほどね」

納得したようにゲイルがつぶやき、続いてはやてが現在の状況を説明する

「現場には昨夜からヴィータ副隊長とシグナム副隊長、以下数名の隊員が張ってくれてる」

「私たちは建物の中の警備に回るから、前線は副隊長の指示に従ってね」

「……はい!」「」

「あの、シャマル先生」

全員で返事をした後、キャロがシャマルに尋ねた

「さつきから気になってたんですが、その箱は？」

「これ？ 隊長たちとゲイル君のお仕事着」

「え、俺も？」

ゲイルが驚いたような声を上げ、話が見えてこない新人たちは頭に？が浮かんでいた

ホテル・アグスタ ロビー

「全く、シャマルさん何準備してるのかと思ったらこんなもんを…」

そこには、いつもの制服とは違う格好のゲイルがいた

髪型はいつもよりおとなしめにセットされており、その服装も黒いスーツへと変わっていた。背が高いので、ピシッとした着こなしをするとなりに様になっている

《よろしいのではないですか？サイズもピッタリですし》

「だから逆に怖いんだよ。俺、医務室行ったことないのになんでしつかりサイズ抑えられてるんだよ」

《私がお渡ししました。シャマル医務官から頼まれておりまして》
「てめえかこの野郎！」

デバイスとのやり取り、といえば聞こえはいいが、はたから見ればゲイルが一人で騒いでいるようにしか見えない。気づけば、人が多いロビーの中で彼の周囲だけ人々が距離をとっている

「あの、ゲイル？何してるの？」

そうこうしているうちに、着替えを済ませたフェイトがやってきた。こちらにも、普段の制服ではなく黒を基調とした、彼女のスタイルが際立つデザインのドレスを着ていた。バルディッシュは、ハンドバツクに下げられている

「いや、このバカデバイスにお仕置きしようと思ってな。お前も少しはバルディッシュを見習え」

「そ、そうなんだ。あはは……」

乾いた笑いでごまかそうとしたフェイト。それに続き、なのはとはやてもやってきた。それぞれ桃色と白を基調とした清楚なデザインのドレスに身を包んでいる。フェイトもだが、いつもよりしっかりと化粧をしているらしく、その美しさに拍車がかかっていた

「なにを騒いでるんや全く。ほな、そろったところで、三手にわかれて見回りでもいこか」

「そうだな。ふむ……」

「な、なんや、なんかついとるか？」

見回りに行くはずなのに、じっと三人を眺め、ゲイルは言った

「三人とも、なかなか似合ってるぞ。かなり綺麗だ」

「「「?!?!?!?!?!」」」

いきなりの賛辞にどうしていいのかわからず、三人とも慌ててしまったが、とりあえず礼を言うことにした

「あ、ありがとう」

「ゲイルも、その、似合ってるよ」

「あはは、ありがとうな」

それぞれに礼を述べながら、それぞれの担当エリアへと向かっていく。ゲイルの担当エリアは、会場であるホールから少し離れたエンランスだ。一通り見て回り、異常がないことを確認すると、近場にあった椅子へと腰を下ろした。そして、自分の名前が呼ばれているのに気が付いた

「ゲイル!!」

「ん？ おお！ユーノ!!」

聞き覚えのある声に振り返ると、そこには以前の上司にして付き合いの長い親友、ユーノ・スクライアだった

「久しぶりだね。元気にやってる？」

「ああ、まあな。お前こそ、ちゃんと休んでるか？」

お互いに再開を喜びながら近況を確認する。特にユーノのほうはか

なり心配していたようで、ゲイルが騎士として活躍しているのがよほど嬉しいようだ

「ちゃんと戦えてるようで安心したよ。やっぱり君は本の山の中にいるより大空を飛びまわってるほうがいいね。無限書庫にいたころとは表情が全く違うよ」

「そうか？ まあ、ユーノがそう言うなら、たぶんそうなんだろうな」

「ホントだよ……ああ、紹介するね。今日、僕の護衛を引き受けてくださった……」

「初めまして。ヴェロッサ・アコース査察官です」

ユーノは、自分の後ろに控えていた、グリーンの長髪に白のスーツを着こなしたどこかつかみどころのない青年、ヴェロッサ・アコースを紹介した

「どうも、ゲイル・スカーレット空曹です」

「はい、お噂はかねがね」

そう言つて握手を交わすと、ヴェロッサの顔はやんわりとした微笑みを浮かべた

「時にスカーレット空曹、部隊長はお元気ですか？」

「あ、俺のことはゲイルでいいです。それに、年もそう変わらないみたいだし、敬語もなしで行きません？」

「そうかい。じゃあ、僕のことはロッサと。友人は皆そう呼びます」

「そっか。ええっと、はやてだよな。今来てるけど、知り合い？」

お互いの呼び方も決まって、話の内容は共通の知人であるはやての話になった

「ああ、ちょっとしたね。そうか、来てるなら探してみようかな。あと、スクライア先生、そろそろ時間ですよ」

「ああ、そうですか。じゃあ、ゲイル、僕は行くけど、元気でね」

「ああ、また酒でも飲みに行こうぜ」

そう言つて三人は別れ、ゲイルは警備に戻った。もうじきオークションが始まるということでこの場所にはほとんど人がいなくなっているため、ガジェットが襲つてきても、人的被害は無いということもあり、ゲイルは緊張を解く

「外は新人たちやシグナムさんたちが固めてるし、中にまでガジェットが来ることはないだろ」

《甘いですよマスター。そう言っているとアラートが鳴りますよ》

グレン相手に軽口をたたくと、ゲイルも同じように軽口で返す。というか、こういう会話自体がフラグなのだが、冗談で言っている二人はそれに気づかない

「確かになあ。漫画とかでも、こういうときに限って《センサーに反応！ガジェットです！》…ほんとに来たよ」

フラグよろしく、グレンがガジェットの襲来を告げる。ゲイルは、すぐにはやてに通信をつないだ

「こちらハリケーン01、ロングアーチ00、状況は？」

『陸戦？型が35、？型が4機や、シャマルが指揮を執つて、シグナムとヴィータが出てる。新人たちが建物の前で防衛ラインを敷いてる』

「オークションは？」

『開園時間を遅らせるそうや。ゲイル君は逃走経路を確保しつつ、いつでも出れるようにしといて。誘導は私らでするから』

「了解だ！」

はやてから指示をもらうと、ゲイルは頭の中に会場から非常口までの地図を頭の中に描く。昨日のうちに建物の構造は頭に入れてある。大丈夫だ。さつきも見たが、状況が変わっているかもしれない。もう一度、自分の眼で確認しなければ

『ゲイル君、聞こえるか！？』

避難経路の確認をしていると、はやてから通信が入る。先ほど違い少し焦っている。状況が変わったようだ

「どうした！」

『向こうに召喚士がおったみたいで、フォワードたちの目の前に転送されてもった。フォロー行けるか！？』

そう言えば召喚士は転送魔法も得意だったな、とゲイルは思いつつも、状況を整理する

今たたかなければならない脅威は三つに分かれている。

一つは、ガジェット、シグナムとヴィータが相手をしているグループ

二つ目は、新人たちが相手をしているグループ

そして三つ目は、それらを転送してくる召喚士だ

これ以上脅威を増やさないためにも、召喚士は早めに叩いておかなければならぬ

ゲイルは瞬時に決断した

「いや、俺は召喚士をたたきに行く。そいつが生きてたら、またガジェットが増える可能性がある」

『でも、新人たちは？』

はやての心配ももつともだろう。だが、ゲイルはフォワードたちを信頼していた

「あいつらなら大丈夫だ。そんな軟な鍛え方、俺もなのはもヴィータもしてねえよ」

『……わかった。召喚士組はリインが追ってるらしいわ。外の指揮はシャマルに任せてあるから、うまく連携とって！』

ゲイルの判断が正しいと思ったのか、はやてもゲイルの案を採用した

「了解！ハリケーン01、行くぞ！」

《Set Up》

素早くグレンをセットアップし、空いていた窓から飛び出すと、シヤマルから通信が入っていた

「こちらゲイル！」

『ゲイル君？今からリインちゃんの居場所を送るから、うまく合流して！』

「了解！」

シヤマルから送られてきたデータをもとにリインを追うと、ちょうど何かと戦闘に入ったようだ

「ありや虫か！？ まあいい、グレン！」

《モード2展開》

「ウインドバレット、ファイア！」

グレンに命令し、誘導弾を使えるバレットで一気に虫のようなものを撃ち落した

「ゲイル！助かったですう！」

「リイン！ このまま召喚士を捕まえるぞ！」

何とかリインと合流したゲイルは、そのまま召喚士へと向かった。おおよその場所はグレンとリインがすでに予想している

「この辺りです」

あたりを探すと、紫色の魔方陣が光っているのを発見した

「そこか！」

素早く降下し、確認した標的の姿は、おそらくエリオやキャロと同じ年ぐらいの、紫色の髪をした少女だった

「……………」

刀を突きつけられているにもかかわらず、その瞳には恐怖はない。というよりも、感情が全く写っていないかった

「いきなり悪いなお嬢さん。でもさ、その転送陣をしまつて、ガジエットたちを——！？」

そこまで言ったところで、いきなりゲイルは飛び退いた。それとほ

ほぼ同時に、つい数瞬前までゲイルがいたところに槍が振り下ろされた。穂先が地面に埋まっており、その威力がうかがえる

「ッぶねえ」

「ゲイル、大丈夫ですか!？」

心配しているリインを制し、改めて槍をふるった相手を見る。身長は自分とそう変わらないだろうが、はるかにがっちりしている。そして、体全体から出る雰囲気は、彼が只者ではないことを如実に語っていた

「（こいつ、強い）」

直観的にそう感じる。うかつに動けない。あの武器を見る限り、ベルカ式の使い手だろう。遠距離から刺すか？

「その髪——」

ゲイルが男との戦い方を考えていると、おもむろに口を開いた

「その瞳、魔力光、そしてその多重可変型デバイス」

誰一人、リインですら反応しない中、男は続ける

「貴様、プロジェクトSか？」

「《!!!!》」

「?（プロジェクトS?）」

その言葉を聞いた途端、ゲイルは一気に距離を詰め、一撃の威力が

最も大きいハンマー形態のグレンを叩きつけた。男は、余裕をもつてその槍で受け止める

「なんでだ……」

組み合ったまま、絞り出すように問いかけるゲイル

「なんでお前がそれを知ってる!!」

「……………」

「答える!!」

何も答えない男に業を煮やしたゲイルは、距離をとり、最大威力の砲撃を撃つ準備を始める

「ルーテシア」

「…何？」

少女——ルーテシアを呼ぶ男。そして、非常ともいえる指示を出す

「残っている『奴』のおもちやをすべて最終ラインまで回せ」

「『《!!!!!!!!!!》』」

「わかった」

そう返事をする、少女はすぐに転送を始める。当然ゲイルとリインは止めようとするが、男がふさぐ。そうこうしているうちに、転送は完了してしまったようだ。同時に、シャマルから全体通信が入る

『シグナム、ヴィータちゃん、リイン、ゲイル君！ 最終ラインにガジェットが！このままじゃ新人たちは保たないわ!』

悲痛なシャマルの声。この男は、最初からこれを狙っていたのだ

「どうする？ 俺を問い詰めるのはいいが、その間にホテルがどうなっても知らんぞ」

冷徹な男の声。数瞬考え込んだゲイルだったが、やがて決断を下す

「……………クソ！ リイン、引くぞ！」
「はいです！」

そう言うと、二人は一気に離脱した。男も、後を追うつもりはないらしく、槍を収めていた

「ねえ、ゼスト」

すると、先ほどの少女——ルーテシア・アルピーノ——が
男——ゼスト・グランガイツ——に聞いた

「プロジェクトSって、何？」

その疑問は、素直なものだった

「プロジェクトSとは——」

ゼストの説明は、聞き終わったころには感情の薄いルーテシアでさえ眉をひそめるような話だった

『ティアナ！ 四発ロードなんて無茶よ！』

『大丈夫です！そのために毎日朝晩、練習してんですから！』

通信機越しに聞こえてくる声に、ゲイルは一抹の不安を覚えていた

「クソ、グレン、後どのくらいだ」

《もうすぐ視認できる距離です》

「ゲイル、何を焦っているんですか？」

「……さあな」

ゲイル自身、不安の原因はわからなかった。とにかく急がなくては、それだけだった

「見えた！」

そして、ようやく視認できる距離まで来た。スバルとティアナがトップにいる。クロスシフトだ。だが、ティアナの魔力が異常に膨らんでいる。訓練の時の比ではない

「マズい！」

ゲイルはさらにスピードを上げた。直観だった。このままではまずい、止めなくては！

「シューーート！」

だが、そのトリガーは引かれてしまった

最初のうちはよかった。だが、一発。一発だけ、狙いを外してしま
った。そして、その射線上にいたのは――

スバルだった

「え？」

ゲイルは、何が起こったのかわからなかった

目の前では、クロスファイアシュートの魔法弾が、スバルに直撃し
ていた

その距離、１メートル

ウイングロードから落ちていくスバル

「あ……」

そして、脳裏に『あの光景』がフラッシュバックする

「あ……あ……」

少女の腹部を貫く刃

「あ……あ……あ……」

真っ赤に染まる、純白のバリアジャケット
そして

第十五話 再開、プロジェクト、覚醒（後書き）

というわけで、スバルには一度落ちてもらいました。まあ、死ぬわけでもないし、特にけがをさせるつもりもありません

さて、自分の手で唯一無二の相棒を撃ってしまったティアナ

この後、どうなるのか

次回以降をお楽しみに！

感想、ご意見お待ちしています

第十六話 反省、過去、約束（前書き）

最近1話あたりが長くなってきている気がします。もともと短かったのに、いい傾向ではあるんですが

それでは、ホテルアグスタで何があったのか、お楽しみください

第十六話 反省、過去、約束

「ん……………」

気が付くと、自分がおおむけに寝ているのがわかった

「（あれ、私、何してたんだっけ…………？）」

「スバル！目が覚めたのね！」

声のしたほうに振り向くと、安心したように微笑んでいるシャマル先生がいた
なんでだろう？ちょっと涙目だ

「マツハキヤリバーに感謝しなきゃね。とっさに防御魔法であなたを守ってくれたんだから」

「マツハ…キヤリバー……………」

あたし、敵にやられちゃったのかな。そう思って、記憶をたどってみる

ええと、防衛ラインを張ってたら急に敵が増えて、ティアがクロスシフトで……

「……………」

思い出したと同時に、ガバツと起き上がる。そうだ、あたしはティアの流れ弾に当たったんだ。でも、マツハキヤリバーがとっさにプロテクションを張ってくれて、魔力ダメージはなかったんだけど、衝撃で意識が飛んじやったんだ

《起きて大丈夫ですか？ 相棒？》

「うん、大丈夫だよ。守ってくれてありがとね、マツハキヤリバー」
《お気になさらず》

お礼もそこそこに、あたしは周りを見回した。どうやら、私が寝ていたのは担架の上で、まだホテル・アグスタからは撤収していないらしいただ、状況は一変していた

攻めてきたガジェットは、全機撃墜したらしい。でも、その倒され方が異常だった

叩き潰されたり、ハチの巣にされたり、真つ二つになっている。その切断面や銃創は、氷漬けになっていた。いや、よく見れば、氷柱のような氷そのものに貫かれているガジェットもあった

「あの、これ、誰がやったんですか……？」

そばにいたシャルマル先生に聞いてみた

「……ゲイル君よ」

シャルマル先生は、言いにくそうに答えた

その時吹いた風は、気絶する前に比べて冷たかった

反省、過去、約束

「はい、はい、わかりました。意識もはっきりしてるし、外傷もないんですね。じゃあ、とりあえず待機させておいてください。あまりすぐに動かすのも危ないでしょうから。…はい、お願いします」

そこまで言って、なのははつながっていた通信を閉じ、振り返って後ろにいたティアナに優しく声をかける

「スバル、目を覚ましたって。外傷もないし、意識もはっきりしてる。心配ないよ」

「そうですか……」

嬉しいはずなのに、ティアナはすっかりしていなかった。当然だ、自分のミスショットが引き起こした結果なのだから

「ティアナはさ、時々一生懸命すぎることもあるんだよね」

なのははゆっくりと、まるで教師が生徒を諭すようにティアナに話しかけた

「それで、たまにやんちゃしちゃう。今回のことで、それがどれだけ怖いことか、よくわかったよね」

「はい……」

いつものような覇気はなく、ポツリと答えるティアナ

「もう反省してるだろうし、帰ったらゲイル君からお説教があるだろうから私からはあまり言わない。でも、今回のことはしっかり覚えておいて、もう二度と同じことが無いようにしっかり訓練して行こう、いいね？」

「はい……」

ゲイルからのお説教というところで、ピクリとティアナが反応したが、最後は素直に返事をしたのを聞き、なのはは話を終わらせる

「よし、検分も終わったし、帰ろうか。明日からまた、しっかり訓練やるよ！」

そう言って、なのははへりへと向かっていく。その後ろで、ティアナは先ほどの戦闘を思い出していた

緋色の光が晴れたとき、そこにいたゲイルは普段とは違っていた

緋色だった髪は銀に染まり、まとっていた騎士甲冑も、形を変えていた。ちょうど、ラインが着ているものを男物にしているような感じだった。そして、つい先ほどまでそばにいたラインの姿が、そこにはなかった。腕には、気を失ったスバルが抱えられている

「ゲイルさん、その恰好……」

エリオが驚いたようにつぶやく。一緒にいるキャラも、同じような顔をしていた

「ちょっとした裏ワザだ。それより……ティアナ」

ゲイルに呼ばれたティアナが、びくりと肩を震わせる。ゲイルはゆつくりと歩み寄り、スバルを預ける

「スバルを頼む。お前は下がれ」

「はい……」

「あまり気にするな。本当ならミスじゃ済まないが、マツハキヤリバーのおかげで大事には至ってないみたいだ。安心しろ」

そう言うゲイルは振り返り、グレンを構える

「次、同じことをしなければそれでいい。スバルもきつと気にしないはずだ。あと、無茶だけはするな。エリオ、キャラ、行くぞ」

「はい！」

それだけ言い残し、ガジェットへと飛び込んだ

一番近くにいた一機を切り伏せ、次のガジェットへと斬りかかる。

順調に戦っているように見えたが、いかんせん数が多い。殴り倒し、撃ちぬいたりして5機目を行動不能にさせた直後、ゲイルの背後から別のガジェットが狙っていた

「ゲイルさん!!」

キャラが叫ぶとが、ゲイルは振り返らない。だが、ガジェットの攻撃がゲイルをとらえることはなかった。ガジェットの攻撃が放たれるより早く、氷の短剣がいくつもガジェットに突き刺さり、ガジェットは爆発していた

「助かった、リイン！」

ゲイルはリインの名を呼んだが、姿はどこにもない。それを見て、キャラはある結論に至った

「まさかゲイルさん、リインさんとユニゾンを……？」

はたしてキャラの予感当たっており、今のゲイルはリインとユニゾンをしていた。氷の魔法であるフリジットダガーを放ったのは、ゲイルの中にいるリインだ

「さて、そろそろ片づけるか、リイン、いけるか」

『大丈夫です！ 難しい補助は私とグレンがやるので、思いっきりぶちかますです!!』

リインはそう言っているが、そう長い時間はまずいだろう。ゲイルのレアスキル『フォースユニゾン強制融合』は、融合適性を無視してユニゾンできる分、ユニゾンデバイスのほうに大きな負担がかかってしまう。そう

なれば、短期決戦しかない。ゲイルは、残りは一撃で決めることにした

「よし、でかいの行くぞ、カートリッジロード！ グレン、リイン！ 頼むぞ！！」

『はいです！』

《了解ですマスター！》

左手の籠手から、勢いよくカートリッジが4発排出され、ゲイルの魔力が膨れ上がる

「唸れ、疾風！」

目の前に、ベルカ式の砲撃魔方陣が展開され、風へと変換された魔力をまとう

「吹雪け、氷雪！」

さらに、氷に変換された魔力をまとい、まるで吹雪のようになっていた

「ブリザードバスター！！」

放たれた砲撃は、一気に残りのガジェットを包み込み、戦闘不能に追い込んだ

こうして銭湯は終了した。リインは矢張り負担が大きかったらしく、ユニゾンを解除した瞬間気を失ってしまったため、ゲイルは一足先にヘリで六課へ帰ることになった

「（もつと強くないと）」

あの場で一番役に当たっていなかったのは、間違いなく自分だった。それどころか、スバルに負傷を負わせてしまう始末だ。このままでは、兄の名に傷をつけてしまう。それだけはだめだ

「（私も、兄さんも、役立たずなんかじゃない）」

もし、これを口に出して言えば、前にいたなのは「当たり前だよ」と言うだろう。ここにはいない相棒もそうだ。だが、不幸なことにティアナの声はその二人に届くことはなかった

「（ランスターの弾丸は、すべてを貫けるんだ！！）」

ティアナの眼はギラついていたが、それに気付いたものはいなかった

「シャーリー、リインの調子どうだ？」

「あ、ゲイルさん。はい、バイタルはもう安定してます。でも、ユニゾンはしばらく控えたほうがいいのかもかもしれませんね」

所変わって、六課隊舎、デバイスルーム

ゲイルは、リインの様子を見に来ていた。自分のせいで負担がかかってしまった負い目もあるのだろうか

「リイン、調子どうだ？」

『はい、もう大丈夫です！』

ゲイルの問いかけに、リインは元気いっぱいといった様子で答える。どうやらシャーリーの言うとおり、身体的には問題ないようだ

「でも、ゲイルさんはなんでリイン曹長とユニゾンできるんですか？」

シャーリーの疑問は当然だ。無理やりユニゾンすれば待っているのは、融合事故である。特にリインフォースは八神家一家専用といつても過言では無い。シャーリーの疑問は、至極当然である

「ああ、俺のレアスキルだな」

ゲイルもそれはわかっているので、面倒くさがらず説明することにした

「『フォースユニゾン強制融合』つつつて、融合事故を起こすことなくユニゾンできるんだ。その際、ユニゾンデバイス側の魔力変換資質なんかも使える。ただ、無理やりのユニゾンだから、今回みたいに負担がでかいからあまり使いたくないんだよ」

「へえ、なるほど」

シャーリーが感心したように言う。すると、グレンが通信を受け取った。どうやらはやてからだったようで、至急部隊長室に来てほし

いとのことだった

「すまん、俺行くわ。シャーリー、ラインのことよろしくな」

そう言い残して、ゲイルはメンテナンスルームを出て、部隊長室に向かった

《マスター、本当のことをお話になるのですか？》

「さあな。まだ迷ってる」

そうグレンと話しているうちに、気が付けば部隊長室にはついたので、ノックをして部屋に入ってしまった

「お、ゲイル君か。ごめんな、急に呼び出してしもうて」

「いや、気にすんなよ。それよりも、聞きたいことってのはラインとのユニゾンのことか？」

ゲイルは予想していたことだったので自分から聞いてみた

「そうや。あれが、昔言ってたゲイル君のレアスキルか？」

「そうだ。ラインも覚えてくれたみたいで助かったよ」

以前、ゲイルと一緒に行動していたことのあるはやては、ゲイルのレアスキルについても知っていたので、特に驚くことはなかった。フェイトとなのはも同様だ

「悪かったな、勝手にユニゾンして」

「気にせんでええよ。ゲイル君としたからって、私らとユニゾンできんくなるわけでも無いしな」

謝るゲイルに、はやては冗談めいた様子で返す。ゲイルも、つられて笑った

「まあ、そうだな。もういいか？新人たちのほうを見に行こうと思うんだけど」

「あ、待って。もう一つ聞いてええ？」

はやては去ろうとするゲイルを止めた。が、正直はやては迷っていた。これを聞いてしまえば、自分とゲイルの間に大きな溝ができてしまわないか。根拠は何もないが、そう感じていた

「（それでも、聞かないかん）」

だが、彼女の立場がそれを許さなかった。部隊長として、一隊員のことを把握しておく必要がある。意を決して、はやては聞く

「プロジェクトSって何なん？」

瞬間、ゲイルの顔が目に見えてこわばったのが、はやてにもわかった。自分の掌が、じつとりと湿っていく

「……………」

部隊長室を、いやな沈黙が包む。時計の音だけが、室内に響いている

「今は…言えない」

やがて、絞り出すように、苦しそうな顔でゲイルが言った

「その時がきたら、ちゃんというから、もうちょっと待ってくれ」
「あ、ちょ……」

今度ははやての制止も聞かずゲイルは部屋から出て行った。その後姿を見届け、ドアが閉まったところではやては左手を額に当て呟いた

「最低や……」

思いつくのは、さっきのゲイルのあのつらそうな顔
自分の判断は間違っていない。部隊長として最善だったはずだ
それでも、

「私、最低や……」

彼女の表情は、掌で隠れてうかがえない。だが、その声は震え、頬には一筋の涙が流れていた

一方、部隊長室を出たゲイルは、隊舎内を歩いていた。はやてにも言ったように、そろそろ帰ってきているであろうエリオたちのところに行こうとしていた

「やっぱ聞かれるよなあ」

《リイン曹長にすっかり聞かれましたからね》

ゲイルは困ったように、夕日のさす廊下を歩きながらつぶやく。グレンも、主の言葉に反応し相槌を打つ

「まあ、いつかはばれると思ってたけどさ」

《まだ、決心はつきませんか?》

「そうだな。悪いな、心配かけて」

《お気になさらず》

グレンは、六課の中ではゲイルと一番付き合いが長い。その分、ゲ^マイルを心配する気持ちは一番強い

「さて、そろそろあいつらも帰ってくるはず……て、あのへりだな」
《素晴らしいタイミングですね。ちょうど解散したようです》

ゲイルの視線の先では、歩いて来るエリオ、キャロ、ティアナ、そして意識が戻ったスバルがいた

「あ、ゲイルさん!」

「よお、お帰り四人とも」

最初にキャロが気づき、続いて残りの三人も気づき走り寄ってくる

「ゲイルさん!お疲れ様です」

「ん、お疲れ。体は大丈夫か?」

「はい、大丈夫です。ありがとうございます!」

最初に挨拶してきたのはスバルだった。本人の言うとおり、体調は心配ないようだ。話しただけでも、元気いっぱいである

「そりゃよかった……で、ティアナ」

「はい……」

こちらは対照的に、言葉少なである。やはり、今回のミスショットが効いているのだろう

「やつちまったもんはしょうがない。だけど、幸いにもスバルは無事なんだ。次、同じことやらなけりゃいいんだ」

「はい」

「よし！それがわかってりや俺から言うことは無え！」

そう言ってゲイルはティアナの頭を乱暴に撫でた

「ちょ、ゲイルさん！何を……て言うか痛いです！やめてください！」

無理やりゲイルの手から逃げたティアナの顔は、恥ずかしさからか真っ赤になっていた

「悪い悪い。さて、もう今日はしっかり休め。明日からまたハードだぞ」

「……はい」「……」

そう言っただけで四人から離れてすぐに、フェイトから通信が入った

「おう、フェイト。どうかしたか？」

『うん。ちょっとね。話したいことがあるから、来てもらっていい？』

「話し？」

『うん、ティアナの……お兄さんのことについてなんだけど』

「わかった。10分ぐらい待っていてくれ。今からそっちに行く」

そう言っただけで、ゲイルは通信を閉じ、窓から外を見た。外では、ティアナが練習着を着てトレーニングしているのが見えた

「わりい、遅れた」

「ううん、大丈夫だよ。来てくれてありがとうね。ゲイルがいると、話しやすくなると思って」

10分後、とある部屋についたゲイルを待っていたのは、なのはとフェイト、シグナム、ヴィータ、そしてシャーリーだった

「わざわざすまなかったなスカーレット」

「いえ、大丈夫ですよ、シグナムさん。で、話したいことってのはティアナのことだっけ？」

最初はシグナムに、後半は全員に向かって聞いた。それに答えたのはヴィータだった

「ああ。多少の無茶したり、強くなりてえって思うのは、若い魔道士にはよくあることだ。でも、ティアナのは度を越えてる。訓練中から気にはなってたんだ」

「それで、ここに来る前に何かあったんじゃないか、と」

「そう言うことだ」

ヴィータの意をくみ取り、ゲイルはなのはとフェイトに目を向ける。二人は黙ってうなずいた。話してほしい、という意味表示だろう

「ええっと、あれは確か、6年前、俺が無限書庫に勤務しだして、1年たったころだ」

「あれ？」

「？ どうしたフェイト」

突如、フェイトが不思議そうに声を上げた。ゲイルが尋ねると、フェイトはあわてて否定する

「ううん、なんでもないよ、続けて」

「おう、わかった。で、その年の……」

フェイトは、ゲイルの話を聞きながらも、先ほどのゲイルの発言を不思議に思っていた

「（おかしい。なのはが撃墜されたのは8年前。そのすぐ後にゲイルは無限書庫に行っちゃったはずだから、ティーダー尉の事件は、ゲイルが無限書庫に行ってから2年目のはずなんだけど……）」

ゲイルの話そっちのりで、フェイトはそのことを考えていた

「（あの事件は冬だったから、年を越した後の話なのかも。でも、なんか引つかかるな。ちよっと調べてみたほうがいいかも……）」

『フェイトちゃん、聞いてる？』

考えにふけっていると、隣に座るなのはから念話が送られてきた。どうやら、話を聞いていない自分のことを心配していたらしい

『ごめん、考え事してたんだ。今どの辺？』

『ちょうど、魔道士を取り押さえましたってところ』

『わかった。ありがとう』

そうして、フェイトはゲイルの話を聞く姿勢に入った。わずかな疑問を抱いたまま

「で、そんな時の上司のコメントが、ちょっと過激だな。問題になったんだ」

「過激って、どんなふうに？」

ヴィータの疑問に答えたのは、なのはだった

「内容は、陸に助けを求めるなんて、本局の恥だ、とか、死んでも取り押さえるべきだった、とかだよな」

「大体そんな感じだ。正確には『海の事件を解決するのは本局の仕事である。それを怠るとは、何たる恥さらし。命に代えても取り押さえるべきだ。それができないような役立たずは、我が時空管理局には必要ない』だったかな？」

聞いていた5人はもちろん、言ったゲイル本人さえ苦い表情をしている

「で、残された妹のティアナは、兄の力を証明するために管理局へつてとこだろうな。こんな感じでよかったか？」

「うん。大丈夫。ありがとうね」

最後はなのはに確認するように問いかけると、なのははゲイルに礼を言った

「別に、大したことじゃないよ。じゃ、俺は行くわ」

ゲイルは部屋を出た。向かう先は、先ほどティアナを見た場所である

「はあ、はあ、はあ」

訓練を開始して、もう四時間以上が経過している。息は上がり、体もつらい

「（まだ足りない。もっと練習しないと）」

腕を上げ、次のターゲットに照準を合わせた時だった

「まだやるのか？ もうだいぶやってるみたいだけど」

振り返ったティアナが見たのは、ゲイルだった。その表情はいつもよりかたい

「休めつて、なのはにも言われたろ？ 詰め込んでも、いいことなんてねえぞ？」

その声には、心配するような、叱るような気持ちが込められているのがティアナにも伝わった。それでも、今のティアナは止まらない

「それでも、凡人の私は詰め込んでやらないと上達しないんです」

その言葉に込められたのは、決意と信念だった。これだけは譲れない。二人の間に、沈黙が流れる。やがて、先にため息を漏らしたの

はゲイルのほうだった

「……まあ、やるだけやってみな」

「ありがとうございます」

その言葉を許可と受け取ったティアナが、再び続けようとすが、それはゲイルに止められた

「ただし！ 今日もう休め。出勤もあつたし、疲れもたまってるはずだ。けがする前にやめとけ」

「……………わかりました」

ティアナも、ここが折れ時だと思い切り上げることになった

「なあ、ティアナ」

「はい？」

隊舎に帰る途中で、ゲイルは真剣な顔でティアナに話しかける

「自主練するのはいいけど、一つだけ約束してくれ」

「はあ……………」

「絶対に、なのはを裏切らないでくれ。これが約束できないなら、俺はお前を止めなきゃいけない」

そう言ったゲイルの顔は、変わらず真剣である。そのいつもはないゲイルの雰囲気、ティアナはわけもわからず

「はい」

と答えるしかなかった。それが、どういつことかも知らずに

第十六話 反省、過去、約束（後書き）

実はゲイルはなのはとティアナは話し合った後だと思っています。それゆえの最後の約束だったり

こういった行き違いって、表現するの難しいですね

次回は、件の模擬戦に入る予定です。そして、フェイトが見つけた矛盾は？

次回もお楽しみに！

感想、ご意見、アドバイスなどお待ちしています

第十七話 特訓、葛藤、それぞれの一週間（前書き）

今回は、できるだけ登場人物の心理描写に力を入れました

おかげで、エリキヤロほか、出番のない人たちが多数……

ごめんなさい！

第十七話 特訓、葛藤、それぞれの一週間

ホテル・アグスタでの事件の翌日、早朝から、ティアナとスバルは訓練を開始していた。本来、ティアナは一人でやるつもりだったが、スバルの『二人でやったほうが効率よくできる』という言い分に押され、結局二人でやることになった

「で、ティアの考えてることって？」

朝日が指す森の中で、スバルは、ティアナの意図えお確認するように問いかける

「短時間で戦力をアップさせる方法。上手くいけばエリオやキャロのフォローもできる」

「うん。それはわくわくだね」

そう答えたスバルの表情は、その言葉通りに何かをやってやるうという気合にあふれていた

「いい？ まずは……」

説明しようとしたところで、ティアナは昨夜ゲイルに言われたことを思い出していた

『絶対になのはを裏切らないでくれ』

「（結局あれはどういうことだったんだろう…）」

ティアナはゲイルの言っていることがわからなかった。自分で言うのも変なことだが、自分たち四人は、なのはさんに心酔していると言ってもいい。それなのに、裏切るとはどういうことだろうか

「ティア、どうかした？」

スバルに呼ばれ、我に返ったティアナは「なんでもないわよ」といい、自分の考えを説明し始めた。さきほど疑問に思っていたことは、すでにティアナの頭の中から消えていた

魔法少女リリカルなのはStrikers 緋色の風

第十七話

特訓、葛藤、それぞれの一週間

「さあ、今日も朝練始めるよ！」

「「「はい！」「」「」

いつものように、なのはの号令で朝練が始まる。昨日出動があったのだから、少しぐらい休んでもいいのでは、と思うのが普通だろう。実際、朝練に向かうなのはを見たフェイトはそう進言したのだが、なのはは首を横に振った

「昨日出動があったからこそ、今日もやるんだよ。どこに問題があ

ったのか、すぐにチェックしなきゃ」

とはなのはの言だ。これを聞いたとき、フェイトはフォワードの新人たちにちょっとだけ同情したとかしなかったとか

閑話休題

ここで、なのははある異変に気が付いた

「スターズの二人はどうかした？ なんだかご機嫌みただけど？」

「え、ええっと」

「あ、その、なんといいいますか……」

いつもより返事に力が入っているスバルとティアナになのはが尋ねると、二人は言葉を濁した。理由としては、今行っている秘密特訓なのだが、これをなのはに知られるわけには当然いかず、どうにかごまかそうとしていた

「いいんじゃないか？ それだけやる気があるんだし」

「む……まあ、そうだけど」

そんな二人に助け舟を出したのはゲイルだった。ティアナが秘密で特訓していることを知っているゲイルも、ティアナにはある種の期待のようなものがあるのだろう、ここはティアナのフォローに回った。なのはもしぶしぶと言った感じだがそれに納得し、訓練へと向かっていった

「（ありがとうございます。ゲイルさん）」

「（助かりました）」

「（気にするな。しっかり頑張れよ）さあスバル、行くぞ。今日はヴィータがいないから俺が見てやる。うどんの粉みたくなるまでぶっ叩いてやるから覚悟しろ」

念話でお礼を言ってきたティアナとスバルには軽く返しながら、訓練へと向かう。「お手柔らかにお願いします」と言いながらゲイルの後について行った

Side ティアナ・ランスター

「ほらほらティアナ！もっと素早く、もっと正確に！」

「はい！」

もう何百回、いや、何千回も繰り返したこの訓練。出現したターゲットに、適切な弾を選び、的確に命中させる。ただそれだけを繰り返す。でも、

「（こんな、基礎的な訓練ばかりじゃ強くなれるわけがない）」

こんな基礎中の基礎、実戦では何の役にも立たない。こんなことでこんなことで……

「ほらティアナ！スピードが落ちてきたよ！集中して！」

「はい！」

ちよつとでもスピードが落ちると、こつやつてなのはさんからの叱咤が飛んでくる。そうやっていてるだけで、なのはさんがどれだけ私たちのことを考えてくださってるかが伝わってくる。でも、ごめんなさい、なのはさん

「（このままじゃ、私は強くなれないんです）」

私は、私のやり方で強くなると決めた

その日から、私の日常は格段にきつくなった。当然だろう、私はスバルみたいに特別な体というわけじゃない。それなのに、今までより長い時間訓練している。つらくないわけがない。それでもやめるわけにはいかなかった

家族の優しいバックアップと、爆発力が売りのスバル

わずか10歳でBランクと、才能の塊であるエリオ

竜召喚というレアスキルを持ったキャロ

ロングアーチのみんなも、将来の有望株ばかりが集まっている

そして、異常ともいえる隊長、副隊長陣

よくアドバイスをくれるゲイルさんも、レアスキルや魔力変換資質を持っている。凡人の自分のことを本当に理解してくれる人なんて、ここにはいないんだ

その中で、私みたいな凡人が生き抜くためには、練習量しかない。

頭を使って、必死で戦術を立てて、それを練習して行くしかない

証明するんだ、なのはさんに。私はもう次のステップに進めますって。そうすれば、なのはさんも認めてくれる

私だって、できるんだ

この気持ちだけを支えに、私はこの一週間を過ごしてきた。そして、明日の模擬戦で、なのはさんに見せることにした。スバルとのコンビネーションも、すでにしっかりと打ち合わせできている

「アンタも、つきあわせちゃってごめんね」

《お気になさらずに》

私は、手の中にある相棒に声をかけた。思えばこの一週間、一番迷惑かけたのはこの子かもしれない。そう思うと、とてもありがたく思えてきた

「明日の模擬戦が終わったら、シャーリーさんに頼んでフルメンテしてもらおうから」

《ありがとうございます》

そう、すべては明日だ。明日の模擬戦で、すべてが決まるんだ

「（証明して見せるんだ、私の強さを）」

明日への決意を固め、私は床に就いた

この時私は、一週間前にゲイルさんに言われたことなんてすっかり忘れていた

「ようなのは。まだデータのチェックか？」

「あ、ゲイル君」

通常業務の時間はとくに終わり、ティアナが床に就いたころ、なのはとゲイルはたまたま訓練場で遭遇した

「どうしたの？こんな時間に」

なのはが不思議そうにゲイルに尋ねる。こんな時間に、はお前も同じだろうがと思いながらもゲイルは答える

「ちょっと自分の訓練だ。おまえらと違って俺は7年も実戦から離れてたからな。ちょっとでも練習しねえと」

言われてみれば、ゲイルのかっこうはバリアジャケットだ。グレンは胸元にあるので、おそらく空戦機動マニューバの訓練だろう、となのはは結論付けた

「訓練もいいけど、ほどほどにね。体壊したら元も子もないよ」

しょうがないなあ、といった様子でなのはが忠告する。だが、これに対してはゲイルも黙っていなかった

「それはお前だろうが。どうせいつもこんな時間までやってんだろ？ 新人たちが大事なのもわかるけど、自分の体も大事にしるよ」

ちよつと強めに、咎めるように言うと、なのははすこし困ったように笑いながら言った

「そうだけど、あの子たちを一人前にするのが私の仕事だから。しっかり土台を作ってあげれば、それだけ無茶する必要もなくなる。私みたいにならなくて済むから」

『私みたいに』のところでゲイルは軽く眉を潜めたが、なのはは気にしなかった。それほどまでに、彼女は真剣だった

「まあ、無茶だけはすんなよ。またフェイトやはやてたちに心配かけるぞ？」

止めることは無理そうだと悟ったゲイルは、忠告に留めておいた

「ありがとう、気を付けるよ」

そう言うと、なのははまたデータ整理に戻った

その後、ゲイルが訓練を終えるころにはなのはも作業を終えて隊舎に戻っていた。ゲイルは一安心し、自分も戻ることにした。そこで、先ほど自分が口にしたことで、あることに気が付いた

「（そう言えば最近、フェイトはやてと話してないな）」

新人たちの訓練につきつきりだったこともあり、二人と疎遠になっていたことを思いだした。特にはやてとは、プロジェクトSについて話して以降、ともに顔を見ていないし、フェイトも最近会っていない。以前は食事を一緒にとるぐらいはしていたが、日中は隊舎にさえいなかった気がする。訓練も、ライトニングの回避訓練は自分が受け持っていたし、キャロのフリードを用いた飛行訓練もそうだ

「（でも、話しづらいよなあ）」

特にはやてとは、あのような別れ方をしてしまったためなんとなくだが話しづらい。ゲイルからすれば、自分から出て行ってしまったため、余計にそう思えた

「（あしたあたり、何気なく話してみるか。普通にしていや、きつと大丈夫だろ）」

結論を出したが、一つ消えるとまた一つ出てくるのが心配事の常であり、今度はティアナのことが気になりだした

「（あれから一週間か。そろそろ体力的に限界だろうな。たぶん明日の模擬戦でなのはに撃墜されるだろうし……またうまくフォローしなきゃな）」

ゲイルとしては、なのはとティアナは話し合った後だと思っており、こちらはそれほど心配していなかった。ただ、どうフォローしてやるかが懸念事項だった

「全く、損な役回りだな！ もういい！ 帰って寝る！」

そう言いながらも、この後風呂に入ってから寝るまでずっとこのことについて考えるのだから憎めないに男であり、結局そのポジションの仕事はきつちりとこなすのがゲイルがゲイルたるゆえんと言ったところだろう

だがこの時、ゲイルは自分が知らないところである人物が動いていたことを知る由もなかった。事は、同時刻、六課の部隊長室で起こっていた

さて、残業も終わったし、シャワーでも浴びて寝よか、と思っていたところで、はやては自分の端末に通信が入っていることに気が付いた。誰だこんな夜更けに、と少しいらだちながらも通信をとる。相手はフェイトだった

「こんな遅くにどないしたんやフェイトちゃん？ はよ寝んとお肌荒れてまうで」

「うん……」

いらだちを隠すためにも、軽い冗談を交えながら通信に答える。だが、対照的に画面の向こうに映るフェイトの顔は堅い。そして、少し顔色が悪い。なにか、見たくはないものを見てしまったような顔だ

「（これはまずいかな？）フェイトちゃん、まだ外やる？ コーヒー入れて待つとるから、部隊長室においで。暖かくなってきたけど、夜はまだ冷えるやろ？」

「うん」

簡潔に、返事だけするとフェイトは通信を切ってしまった。その表情からすると、よほど重大なことからしい。はやては言った通りにコーヒーを入れる。何か飲めば、フェイトも落ち着くだろうと思ったからだ

コンコン

ちょうどコーヒーができるころ、部隊長室の扉がノックされた。おそらくフェイトだろうと思ったはやては、「どうぞ」と招き入れる。そこにいたのは、やはりフェイトだった。やはり顔色が悪い。手に持った書類が入っているであろう鞆を握る手も、心なしか力が入っていないように見える

「お疲れさんや。まあ、そこに座って。砂糖とミルクはいらんのや
ったっけ？」

「ううん、いっぱい入れて」

これは珍しいことだとはやては思っていた。極度の甘党であるリンディ・ハラオウンと過ごしてきたフェイトは、彼女に特別性の緑茶を進められて以来、飲み物には砂糖とミルクを入れなくなっていた。おかげでコーヒーのブラックがおいしいと思うようになってしまった、まだ若いのにと愚痴っていたのをはやては覚えている

「珍しいな、フェイトちゃんがミルクに砂糖なんて。はいどうぞ」
「ありがとう……ふう」

はやてから入れてもらったコーヒーを一口飲み、小さく息を漏らすフェイト。温かい飲み物を飲んだおかげか、少し血色がよくなつて

きたような気がする

「落ち着いたか？」

「うん。心配かけてごめんね、はやて」

ようやく落ち着いたようで、きちんと会話が成立していた。思えば、通信を受け取ってから、フェイトがきちんとした文章でしゃべったのは、これが初めてかもしれない

「で、どうしたんやこんな遅くに？」

はやてが本題に入ろうとすると、フェイトはまた少し黙ってしまうが、やがて意を決したように口を開いた

「はやては、プロジェクトSって何か知ってる？」

「！……………まさか、フェイトちゃんから聞くとは思わなかったわ」

プロジェクトS

それは一週間前、はやてとゲイルの間に決定的な溝を作ってしまった言葉

「知ってるんだね？」

「名前だけや。内容は知らんよ。それで、それがどうかしたん？」

確認してきたフェイトにそう返すと、おもむろにフェイトはカバンから書類を取り出し、はやてに渡した。読んでみて、と言外に行っているようなものだ

「こないだね、ゲイルとなのは、シグナム、ヴィータ、それからシヤリーと、ティアナのお兄さんのことについて話したんだ」

はやてが読んでいると、そのままフェイトはゆっくりと話し出した。その声は、どこかふだんと違っていた

「その時ね、ゲイルが言ったんだ。『俺が無限書庫に勤務し始めたのは7年前だ』って」

「？　ちよつと待ってや、なのはちゃんが怪我したんは」

「うん。8年前だよ。ゲイルが私たちと会わなくなったのも、あの事件の直後」

それだけ言うと、フェイトはまた少し黙る。先を読んではと言っているようにはやては感じた。続きを読みだすと、フェイトはまた語りだす。まるで、表情を見られているのを隠すようだった

「それでね、気になって私、調べてみたんだ。1年間、ゲイルがどこで何をしてたのか」

「それで最近隊舎におらんかってんな」

はやては軽く返したが、異変に気付いていた。フェイトの声が震えている。涙声だ。必死にこらえているのが、聞いているはやてにも伝わってきた

「……………」

もう部隊長室に声はなかった。はやてが紙をめくる音だけが、定期的に聞こえるだけだ。やがて、あるページではやての表情が驚きに変わり……数行読んだところで声を上げた

「これは…どういつ…ことや」

答える者はいなかった。フェイトは、自分がなくのをこらえるので必死である

はやてはさらに読み進めていく。あるページで内容は変わり。ゲイルの経歴を追ったものからある研究内容を記したものに変わっていた。その内容を、はやては思わず声に出してしまった

「プロジェクトS……」

それだけ声に出すと、はやては資料に引き込まれていった。もう、フェイトが完全に泣いてしまっているのにも気づかない

そして、その研究の核心をついた文章を読んだところで、はやては資料を思わず取りこぼしてしまった。そして、誰にともなくつぶやく

「なんなんや、これ」

「私、調べちゃいけないこと調べちゃった……」

フェイトが泣きながら後悔する声も、はやてには届いていない。それほどもでに、はやては興奮していた

「なんなんや！このふざけた研究は！？」

はやての叫びに答えるものはいなかった

そして、床に散らばった資料のうち、はやてがまだ読んでいない資料の一枚に、こう記述があった

の成功を確認、と

第十七話 特訓、葛藤、それぞれの一週間（後書き）

はたして、はやてとフェイトのみた資料には何が書かれていたのか！？

そして皆様お待ちかね！いよいよ魔王の降臨です！

「魔王じゃない〜〜〜〜！！！」

次回をお楽しみに！

感想、ご指摘などお待ちしています

第十八話 模擬戦、涙、覚悟（前書き）

お待たせしました、魔王降臨です。

第十八話 模擬戦、涙、覚悟

「もう始まっちゃう。急がないと……」

フェイトは訓練場へと急いでいた。今日は分隊ごとで2on1で模擬戦をする予定だったはずだ。そうになると、ライトニングの模擬戦は自分がやらなくてはならない

「最近エリオとキャラロのこと見てあげられてないから、ちょっと楽しみかな」

それに、ここだけの話だが、フェイトはスターズ分隊の模擬戦も自分が引き受けるつもりだった。最近のなのはの仕事量は、明らかにオーバーワークだ。根が心配性のフェイトとしては、8年前の再来となりそうで心配で仕方なかった。それでも、今回は教導官としてのことであり、自分たちもすぐそばにいたので少しは安心できるのだが

「とにかく、急がないと」

そう言っただけでフェイトは訓練場へと向かっていった

「あ、もう模擬戦始まつちやった？」

「おう、今はスターズの番だ」

あの後、フェイトはかなり急いできたのだが、結局間に合わず、ピルの屋上で見学していたエリオとキャロ、ヴィータ、そしてゲイルに合流した。先ほどのやり取りは、ヴィータのものである

「フェイト、仕事は終わったのか？」

「あ、ゲイル…うん、大丈夫だよ」

ゲイルに話しかけると、フェイトは少し口ごもったが返事をした。昨夜のことは、口外はしない、とフェイトとはやては決めていた。なのはには話したほうがいいのでは、ということも考えたが、結局はゲイルが自分から言い出すのを待つことにしたのだった

「どうした？ 体調でも悪いのか？」

「え？ ううん！ なんでもないよ！？」

「そ、そうか。ならいいんだが…」

ゲイルとしては普通に聞いたつもりだが、フェイトは過剰に反応してしまった。なるべく冷静に、普段通りに、と自分に言い聞かせ、何とか平静を取り戻した

「なんだ、お前も仕事のしすぎか？」

そんなフェイトを一瞥して、ヴィータが少し咎めるように言う

「別に私はそうでもないんだけど。て言うか、『私も』ってことは他には？」

「なのはだろ」

フェイトの疑問に答えたのはヴィータではなくゲイルだった。「そうだよ」と言ってその先はヴィータがつないだ

「あいつも最近訓練密度濃いからな。少し休ませないと」

「…そうだね。私も、スターズの模擬戦代わろうと思って急いできたんだけど…」

フェイトも、なぜ自分が急いできたのかを思い出し頷く。その横ではエリオとキャラも同じような顔をしている。二人も、なのはに育ててもらっているということに心から感謝しているのだろう

「模擬戦とかは俺も代わりにやるけど、生徒の心のケアとかは代わってやれないもんな」

「そうだね…なのは、最近訓練が終わると、ずっと部屋でデータ整理とかしてるんだ」

「あいつ、っていうより、教導隊の考え方だよな。『言葉で話すより、模擬戦でたたきのめしてあげたほうが手っ取り早い』だったか？」

その会話で、ゲイルは引っかかることがあったので、フェイトに尋ねてみた

「待てフェイト。ずっとって、ここ最近か？」

「え？うん、ずっとかな。あ、でもシャワーとか食事とかは一緒に行ってるよ？」

当たり前のことなのだが、今ゲイルが聞きたいのはそんなことではない

「んなこたわかってる。それより、最近なのはがティアナと話してるの、見たことあるか？」

「ティアナとなのはが？ ううん、最近は見たことないかな。二人とも、食事の時間がずれてるみたいだし。ヴィータは？」

「あ？ あたしも見たことねーな。ここ最近ティアナが飯食う時間があたしらとどーもあわねーんだ。アグスタの後一回フォロー入れてやろうとしたんだけど、全然こねーんだ。訓練は同じ時間にあがってるはずなのによ。でも、それがどうかしたのか？」

「……いや」

短く返したゲイルだが、二人の言っていることで一つ確信していた

「（なのはのやつ、ティアナと何も話さなかったのか？）」

自分はホテル・アグスタでの出張任務の前に、確かに伝えたはずだ。ティアナと話せ、と。そして、なのははわかったと答えたはずだ。それなのに、二人の言うことが確かなら、ティアナとなのはは話してないということになる

「話しあわなくても伝わると思ってたのか……？」

だとしたら、それは大きな間違いだ。そんなテレパシーのような都合のいいものは、この世には存在しない

「（大事にならなきゃいいがな……）」

そう願うゲイルだったが、運命はもつとも流れてほしくない方向へと向かうこととなる

「お、クロスシフトだ」

ゲイルが重大なことに気付いたころ、スターズの模擬戦も佳境を迎えていた

「うおりゃあああああああ!!」

スバルはなのはのシューターの弾幕を強引に突破しようと、ウィングロードで仕掛ける。この模擬戦で何度も繰り広げられている展開だ

「（スバルの防御がよくなってる。ヴィータちゃんとゲイル君によく鍛えられてるんだ。二人に任せてよかった。でも、）まだまだだよ！」

「きゃあ!？」

なのはは自分の防壁をうまく使い、スバルと距離をうまくとる。スバルがウィングロードに無事着地したのを確認すると同時に、砲撃の準備をしているはずのティアナに意識を配る。こうしてスバルが動きを止め、ティアナの大技で決めるつもりなのだろう

「（砲撃なんて教えてないのに。ティアナ、無茶しちゃだめだよ…）」

負担の大きい技を使おうとするティアナのことを心配していると、再びスバルが飛び込んできた。それも受け止め、注意をする

「こらスバル！ 足を止めたいのはわかるけど、動きが単純すぎるよ！ ゲイル君にも言われたよね、考えて戦えって！」

「ごめんなさい！ ちゃんと防ぎますから！（ティア〜〜〜）」

「！ ティアナは！？」

そろそろ砲撃のチャージも終わるはず。わざわざクロスシフトのキレを落としてまで砲撃をチャージしていたのだ。これで撃てないのでは、とても実戦では使えない。だが、なのはの視線の先で、驚くべきことが起きた

「ティアナが消えた！？」

今まで砲撃の準備をしていたティアナが、その姿をまるで蜃気楼のように消した。得意の幻術だ
姿を消したティアナがどこにいるのか、もうなのはにはわかっていない。スバルが自分の動きを止めているのなら、中距離からのクロスファイアでは火力が足りない。長距離からの砲撃は、今選択肢から外れた。となれば残っているのはただ一つ

「（フィールドを切り裂いて、一撃いれる！）」

スバルが展開したウイングロードを、ティアナはなのはの背後に回るように駆けて行った。なのはの知らない一手、これなら、なのはの意識の外から仕掛けられる

「一撃必殺！　でやああああ！」

カートリッジを2発消費して、銃口から展開したブレードをなのはに突き立てる

「レイジングハート、モードリリース」

《All right》

なのはがポツリとつぶやいたが、それがティアナに届くことはなかった。そして、爆炎が巻き上がる

「おかしいな。二人とも、どうしちゃったのかな？」

「「え？」」

煙が完全に晴れるよりも早く、なのはの静かな、それでいて確かな怒りが込められた声と、スバルとティアナの困惑する声が聞こえた

「頑張ってるのはわかるけど、模擬戦は喧嘩じゃないんだよ……？」

やがて、煙が晴れるとそこには左手でスバルのリボルバーナックルを、右手は上に掲げティアナのクロスミラージユを握っているなのはがいた。右手からは血が流れている。左手も、骨にひびが入っただけでもない。だが、ティアナもスバルもそのことに何も言えない。今なのはが放っているオーラに、完璧に吞まれていた。なのはの独白は続く

「練習の時だけ言うこと聞いて、本番でこんな無茶するんなら、練習の意味、ないじゃない。ねえ、ちゃんとさ、練習通りにやろうよ

…？」

「あ、あの…」

スバルが何かを言おうとするが、それより先になのはがティアナを見上げて言う

「ねえ、私の言うこと、私の訓練、そんなに間違ってる……？」

ティアナが見たなのは顔は、ひどく無表情で、うつろな目をしていた。だが、その奥にあった悲しみはティアナには届かなかった

《Blade erase》

「私は！」

耐えきれなくなったティアナは、距離をとり砲撃の構えをとる

「もう誰も！ 傷つけたくないから！ なくしたくないから！」

吐露したのは、その心。強くなりたい、その願いの根源

「だから、強くなりたいんです！」

それは、ティアナの確かな信念。決して曲がることのない、彼女の
アイデンティティ
自己同一性

「…少し、頭冷やそうか……」

だが、その言葉はなのはには届かなかった。その指先に、魔力が集まっていく

「!!」

「クロスファイア……」

その光景に、スバルが息を飲んだが、なのははまるでスバルがその場にいないように振る舞った

「うあああああああ！ ファントムブレイ……」
「シュート」

ティアナが撃ち出すよりも先に、なのはの魔法が放たれ、ティアナを撃ちぬく

「ティアアアア！ っ？」

スバルがティアナのもとに駆けつけようとするが、その体はすでに桃色のバインドで固定されていた。スバルの耳に、冷徹なのはの声が聞こえた

「じつとして、よく見てなさい」

その指先には、すでにもう一発のクロスファイアがチャージされている

「なのはさん!!」

「クロスファイア」

スバルが必死で止めようとするも、その声は届かない

「シュー……」

スバルは、思わず目を閉じてしまった。だが、いつまでたっても魔法弾が当たる音は聞こえてこない。あまりの恐怖で聞き逃したのだろうか？ 恐る恐る目を開けると、そこには予想外の光景があった

「ゲイル君、どういづつもり？」

「なに、独りよがりな新人さんと自分勝手な教導官様に、ちよつとお説教だ」

スバルが目にしたのは、相変わらず指をティアナに向け、射撃の準備をしていると、その後ろからなのはの首筋に刀を突きつけているゲイルだった。バリアジャケットは展開されていないのは、戦う意思はないということだろうか

「それって、私のこと？」

「他にこの部隊に教導官はいなかったと思うが？」

ゲイルの口調は軽い。だが、そこにはなのは同様に確かな怒りが込められている、とスバルは感じた

「どうして私が自分勝手なの？」

「それがわかってないからだ。スバル」

「は、はい！」

いきなり自分の名を呼ばれ驚くスバルだったが、ゲイルはかまわず指示を出す

「ティアナを連れてこい。なのは、バインドを解いてやれ」

「……」

なのはは無言だったが、スバルのバインドは解かれ、すぐにティア

ナのところへと向かい、意識があるのを確認すると。背中にティアナを背負い戻ってきて、ゲイルの隣に下した

「ありがとう。さて、ティアナ」

「はい……」

「歯、くいしばれ」

次の瞬間、パン、と軽い音が響いた。ゲイルがティアナの頬を張ったのだ

「げ、ゲイルさん!？」

なのはもびつくりしたが言葉を漏らすには至らなかった一方、スバルは思いっきりゲイルに詰め寄っていた。だが、かまわずゲイルはティアナに語りかける

「さっきのはいつから準備していた？」

「……一週間前です」

ティアナは、張られた頬に手を添えながら素直に答えた

「スバルもか？」

「はい。一緒にやってました」

問いかけたのはティアナに対してだったが、答えたのはゲイルだった。ゲイルは気にした様子はないので、どちらが答えるかは問題ではなかったのだろう

「そうか……ティアナ、俺が一週間前に言った言葉、覚えてるか？」

「『なのはさんを裏切るな』ですか？」

「そうだ。今回のことは、裏切ったとは思わなかったのか？」

しばらく考えていたティアナだったが、もうすべてを諦めたかのよう
に話し出した

「覚えてました…でも、強くなれば、わかってくれると思って……」

最後のほうは、もはや涙声だった。それだけ聞くと、ゲイルはゆっくりとティアナを抱いた

「わかった。もういいよく頑張った。でもな、強さじゃ何も伝わらない。今度からはちゃんと誰かに相談するんだぞ？」

「はい。ごめんなさい……グズ……ヒック」

それ以降は、もう言葉にならなかった。ただ、嗚咽だけがその場のすべてだった。このまま落ち着くまで一緒にいてやりたいところだったが、ゲイルにはまだ話さなければならぬことが残っている

「スバル、ティアナを連れて戻ってろ」

「え、でも……」

「悪い、ここからは二人で話したいんだ」

「……わかりました。あの、心配してくださってありがとうございます
ました」

そう言うと、いまだ落ち着かないティアナを連れてスバルは去っていった。そして、ゲイルはなのはに向きなおる

「ずいぶんティアナにやさしいんだね」

「そうか？俺はお前にも優しいぞ？」

二人とも言っていることは軽いが、特になのはは感情がこもっていないかった

「さて、俺がお前に聞きたいことだ。なのは、ティアナと話したか？」

「それは……」

「話してないよな？」

なのはは言いかえせなかった。事実、ティアナとは訓練以外で話していないかった

「ちょっと話すだけでよかったんじゃないか？ そうすれば、ティアナの奴もあんなに思いつめることなかっただろう？」

「話さなくても……」

「教導で伝わるとでも思ったか？ それこそお前の自分勝手な解釈だ」

言葉をとられる形になったなのはは、再び黙るしかなかった。ゲイルは続ける

「確かに、あいつは俺の眼から見ても十分に才能がある。個人戦はもちろんだけど、指揮官向きの人を使う才能だ。お前はそっちを優先的に育ててた。そうだろ？」

「……そうだよ」

CGに必要な広い視野は訓練でつけることができて、指揮官の才能はそう簡単ではない。だからなのはは指揮官に必要な広い視野をティアナに身に付けようとさせていた。個人のスキルを後回しにしても、である

「なら、なんでそう言ってやらなかったんだ？ たった一言『ティア

ナにはこんな才能がある』っていうだけでよかったんじゃないのか」
「でも、教導隊では…」

「『言葉より実戦で叩きのめすほうがいい』だったか？確かにそう
だ。スキルなんてのは、手取り足取り教えられるより、失敗してそ
の中から学び取るほうが身に付く。でもな、言葉じゃないと伝わら
ないものだってあるんだ」

「……………」

ゲイルに、完全に言い負かされる形になったのはだったが、やが
て絞り出すようにポツリと言った

「だったら……………」

「ん？」

「だったら！　なんでゲイル君は何も言ってくれないの！？　なん
で無限書庫にいたかとか、詳しく教えてくれないし！　ユーノ君に
聞いたって、いちやダメって言われてるって言ってた！　それに、
リインが聞いたプロジェクトSだってそうだよ！　ゲイル君こそ、
なんで私たちに何も言ってくれないの！？　私もフェイトちゃんも
はやてちゃんも、ずっと気になってるんだよ！！」

こんどはゲイルが押し黙る番だった。これに関しては、なのはの言
うとおりだ。自分は話すことを押し付けているのに、自分は話さな
い。これでは、何の説得力もない

「（そろそろ、限界か……………」

ゲイルは、そう悟った。いずれはばれることだ、なら、今が言う時
なのではないだろうか

「わかった。俺のこと全部話す」

「え？」

「その代り、ティアナや皆にもちゃんと話してくれるか？　なのは教導の意味、どうして、今みたいに基礎を重視した教導をするのか、とかさ」

「わ、わかった」

なのはは、勢いに押され首を縦に振った

「ありがとう。ちゃんと俺も話すよ。俺のこと」

第十八話 模擬戦、涙、覚悟（後書き）

次回、とうとうゲイルの秘密が明らかに！？

第十九話 謝罪、決心、秘密（前書き）

今回、とうとうゲイルの秘密が明らかになります

第十九話 謝罪、決心、秘密

「ティア、大丈夫？」
「うん」

ゲイルに言われなものはもともとから離れながら、スバルは背負っているティアナを心配していた。だが、それだけで会話が途切れてしまった。やがて、スバルはフェイトたちがいるビルに到着した

「二人とも、大丈夫？」

フェイトが心配そうに尋ねる。スバルは「大丈夫です」と答えるが、ティアナは何も答えない

「ティアナ？」

フェイトが肩に手を置こうとしたが、それよりも先にティアナがその場に倒れてしまった。緊張状態から抜けたことによる安心感で、溜まっていた疲労が一気に襲い掛かってきたのだろう

「ティア！」
「フェイト、医務室だ！ シャマルんとこ連れてくぞ！」
「うん！」

薄れていく意識の中で、ティアナは自分を心配するスバル、ヴィータ、フェイトの声を聴いた

魔法少女リリカルなのはStrikers 緋色の風
第十九話

「なのは、お前も医務室に言っとけ。右手は切れてるし、左手もヒビ入ってるかもしれねえし」

ティアナが倒れてい医務室へ運ばれたというのをエリオから聞くと、ゲイルはなのにも医務室へ行くように言った。だが、なのははそれを拒否した

「だ、大丈夫だよ。こんなの、ちょっとしたらすぐに治るよ」

「だめだ。それでも、早く治るに越したことはないんだからな」

それでも、ゲイルは引かなかった。ちよつとの怪我でも、早く直したほうがいいに決まっている。ゲイルのほうが正論だ

「…わかった。包帯だけもらってくる」

結局はなのはのほうが折れ、医務室へ向かうことになった

「ゲイル君」

「ん？」

医務室へと向かおうとしたところで、なのはが足を止め振り返っていった

「ありがとう。それと、ごめんね」

「……おう」

ありがとうとごめんね

なぜなのはがこの言葉を口にしたのか、エリオとキャロ、スバルにはわからなかった

だが、自分もゲイルさんに謝らなければ、と思っていた

「ゲイルさん！」

「お、おう！？」

かなり近くにいたのに、いきなり大声で呼ばれてゲイルは驚く。それには気づかず、スバルはゲイルに頭を下げた

「ごめんなさい！ あたし、ティアナが無茶してるの知ってたのに……」

強くなればわかってもらえると思っていた。なのはが自分たちをほめて『よく頑張ったね』と言ってくれると思っていた。だが、その結果は悲惨なものだった。もしゲイルがいなければ、もっと酷いこ

とになっていただろう。自分は知っていたのに、止めるどころか一緒になってやってしまった

「あまり気にするな。俺も、もつと早めに寄手を打つとくべきべきだったんだ。お前のせいじゃない」

「あ……」

ゲイルはそう言ってティアナの頭に手を置いた。長身のゲイルにとって、この動作は機動六課に来てからくせになっていた。なので、ことあるごとにスバルも撫でられている

「ゲイルさん？」

「どうした？」

「あ…いや、なんでもない…です…」

だが、いつもとは違う、とスバルは感じていた。いつもは楽しげで、安心感を与えてくれる行為だったのに、今撫でられたときはそうは感じなかった。むしろ、自分自身が落ち着こうとしているような、そんな感じだった

「（どうしたんだろう…）」

思い返せば、先ほどのなのは表情もすぐれなかった。最初は自分たちのせいだと思っていた。もしかしたら、二人の間になにかあったのだろうか

「スバルさ〜ん！ 何してるんですか？」

「あ、ごめ〜ん！ 今いく！」

思考に浸っていたスバルだが、エリオに呼ばれて皆が隊舎へと戻っ

ているのに気が付き、慌てて後を追った

「う…ん…？」

模擬戦終了から3時間ほど後、ティアナは医務室で目を覚ました

「あれ？ 私、なんで医務室に……？」

だが、ティアナは自分がなぜ医務室にいるのかよく覚えていないようだ。まだ目が覚めたばかりでうまく頭が回っていないのだろう

「あ、ティアナ。気が付いたのね」

「シャル先生…」

そんな状態のティアナに、シャルが気付いた。そのまま、診察に入る

「どこか痛いところとかはない？　なのはちゃんの訓練用魔法弾は優秀だから、大丈夫だとは思っけど」

「訓練用…？」

ティアナはまだなぜ自分が寝ていたのかを思い出していないようだ

「覚えてない？　模擬戦でなのはちゃんに怒られたって聞いたんだ

けど」

「あ……」

そこまで聞いて、ようやく思い出したようだった。同時に、申し訳なさそうな顔になってしまったティアナを見て、シャルは一つため息をついてティアナに語りかけた

「なのはちゃんの教導は、ちゃんと意味があるの。まだわからないかもしれないけど、なのはちゃんを信じてあげて」

「はい。ゲイルさんにも言われました。なのはさんを裏切らないでやってくれって」

「そう」

そこまで話したところで、通信が入った。つなぐと、そこにははやての顔があつた

「あらはやてちゃん、今ちょうどティアナが目を覚ましたところよ」

『お、ちょうどよかったわ。ティアナ、大丈夫か？』

「は、はい。もう大丈夫です」

『そか、な」さっそくで悪いんやけど、ちょっと集まってくれるか？ シャマルもいっしょに』

「え、何かあつたんですか？」

問いかけたティアナに、はやては緊張を隠して告げた

『ゲイル君から話があるそうや』

「これでええんか？」

「ああ」

主だったメンバーに集合をかけたはやてが、後ろにいたゲイルに問いかける

「悪いな。時間とらせちまって」

「ん、ええよ。多分、みんなも早く聞きたかったやろうし、なのはちゃんの教導の意味を知るにはちょうどええ機会や」

「そうか」

そこで、沈黙が場を支配した。突然部隊長室を訪れ『自分の秘密と、なのはあの事故について話す』と聞いたときは、はやては心底驚いた。まさか、つい昨日自分とフェイトが知ってしまったことを話すとは思わなかったからだ。自分からプロジェクトSについて尋ねて以来、全く話していなかったので、本当に急だった

「こないだは悪かったな。今日はちゃんと話すから」

「そか。ならいこか」

そう簡潔に返事をして、ゲイルを連れはやてなのはたちの待つ会議室へと歩を進めた

「あ、ティアナ、もう体はいいの」
「あ、はい……」

通信を受けたシャルとティアナが会議室へ向かうと、そこにはもうゲイルとはやて以外のメンバーはそろっていた。呼んだのは、フオワードメンバーとはやて、シャル、たちだ。いち早く気付いたなのはが声をかけると、弱弱しいながらもティアナは返事をし、頭を下げた

「あの、勝手に練習してごめんなさい。これからは、ちゃんということをお願いします」

それを見たなのはは、ティアナに視線をわせるために少し屈みこんで言う

「私のほうこそ、ごめんね。ちゃんと言わなきゃいけないことも、全然言ってなかったから。これが終わったら、ゆっくり話そう?」
「はい!」

どうにか二人の溝が小さくなったところで、タイミングよくゲイルとはやてが入ってきた

「二人とも、仲直りしたみたいだな。もう喧嘩なんかすんなよ」
「はい。ゲイルさんも、すみませんでした」
「いい。それより、座れ。始めるぞ」

ゲイルの一言で、なのはとティアナは席に着く。そして、ゲイルが一番前で全員に向き合った

「最初に言っておく。今から話すのは、嘘や作り話じゃない。全部現実だ」

そう前置きして、ゆっくりと語りだす

「昔、ベルカの戦乱の最初期のころだ。はやて、はやて、有名なベルカの王つつたら、誰がいる？」

「霸王、聖王、それに冥王つてところか？」

ベルカに関して最も詳しいであろう人物にゲイルは尋ねた

この中で、フェイトとはやてはプロジェクトSについて知っているが、それはその概要だけであり、詳細はよく知らない。そのため、二人もゲイルの話に聞き入っていた

「そんなところだな。だけど、もう一人、戦場において敵なしと言われた王がいた。『嵐王』だ」

「嵐王……」

誰のものともつかないつぶやきだったが、ゲイルはそれを無視して話を続けた

「嵐王は幾つもの武器を使い分け、様々な属性の魔法を駆使して戦場を駆け抜けた。そして、いつしかその雄姿をたたえて人々は彼をこう呼ぶようになった『緋色の風』と」

「緋色の風？」

「ああ、彼の風貌は緋色の髪と眼、緋色の魔力光、そして数々の魔法の中でも、一番得意だったのが風の魔法でした」

「ま、待てよお前、それって……」

ヴィータが驚きながらもゲイルに尋ねる。他ののはたちも、気付いたようだ。それを、ゲイルは告げる

「ああ、俺と同じだ」

その言葉に全員が息を呑んだ。緋色の瞳と髪、魔力資質だけなら、偶然もあり得る。だが、魔力光はそうはいかない。一人ひとり、必ず固有なのだ

「じゃあ、お前はその嵐王のクローンだともいうのか？」

いち早くショックから回復したシグナムが尋ねる。『クローン』という単語に反応したものが数名いたが、

「いや、違います。まだこの話には続きがあるんです」

ゲイルはシグナムの発言をあつさりと否定して、さらに話を続ける

「実は、嵐王が得意とする風の魔法やその他の属性魔法は、ある方法によって得ていた力なんです」

「ある方法、だと？」

「はい。そしてそれは、シグナムさん、ヴィータ。そしてはやて。三人も使っている方法です」

「何だと？ まさか……」

嵐王と同じ古代ベルカの騎士であるシグナムとヴィータはすでに見当がついているようだ

「はい。今で言うユニゾンです。本来、融合騎は先天性の魔力変換資質に頼るベルカ式を、より多くの騎士が使えるようにするために

開発されたんです。嵐王がその名をとどろかせたのは、ベルカにおける最初のロードだったからです」

もう、ゲイルの話に口をはさむものはいなかった。全員がこの話の結末を予想していた。そして、できれば外れていてほしいと全員が思っていた

「ほぼ試験騎だったその融合騎の力は絶大でした。並の騎士では使いこなすことができず、逆に彼らの体に乗っ取りほぼ廃人同然にまで追い込んだそうです。今でいう融合事故みたいなもんですね。そして、実験の際、必ず魔力光がその融合騎の色に染まりました。それが、緋色だったそうです」

半分笑いながら言っているが、その内容は決して軽いものではない。だれも笑わなかった

「だけど、嵐王は違った。その融合騎を完璧に乗りこなし、その名をベルカの戦士に馳せた。そして、嵐王の寿命とともに扱える者がいなくなったその融合騎も封印されました」

「え？　じゃあ、問題ないんじゃないですか？」

スバルが思わず声を漏らしてしまった。彼女は、その融合騎こそが目の前にいるゲイルだと思っていた。他の真相を知らない隊員たちもそうだった

だが、ゲイルの話は終わらなかった

「それで終わればよかったんだけどな。ある日、ある次元世界に封印されていたその融合騎を見つけてしまったんだ。そいつは管理局の職員で、この融合騎は使えると思った。さっそく持ち帰って研究

したが、ある欠陥に気付いた」

「強力すぎるってことだね」

これまでの話をまとめ上げ、なのはが言う。果たしてそれは正解だった

「そうだ。男は考え、そして思いついた。『適応者がいないなら、造ればいい』。そう考えた結果、その融合騎の細胞からクローンを造り、その能力の一部を転写することに成功した。それが俺です」

会議室に衝撃が走った。まさか、ユニゾンデバイスからそのクローンを造り出すとは、だれも思っていなかったのだ。そして、ゲイルが言葉を紡ぐ

「古代ベルカ最強の融合騎を使いこなせる人造魔道士を作り上げる。それがプロジェクトSCARLETです。そして、その成功例が俺です」

明かされた真実は、その場にいた全員にとって衝撃的なものだった。誰も言葉を発せない中、ゲイルの独白が続く

「俺がこれを知ったのは7年前。ある事件をきっかけに空から地上に降りて最初の任務だった」

「え？ゲイル君、地上部隊にいたの？」

「そう。それを知ってから、俺は無限書庫に転属になったってところだな。まあ、これが俺の秘密ってとこだ。もっとも、研究自体が違法だったから中止にされたし、融合騎もどつかで保管されてるはずだ。ロストログアとしてな」

ゲイルは、無意識に時計に目をやった。時刻は21時を過ぎている。

そとはもう真っ暗だろう

一応、これで話は終わったのだが、誰一人として動けずにいた。まさき、自分たちの所属している組織がこんな非人道的なことをやっているなどとは思っていなかったのだろう。その中で、ゲイルはやての正面に立って胸元から一枚の封筒を渡した。そこには、『辞表』と書かれていた

「どういふつもりや？」

もちろん、はやてとしては理由もなく受け取るわけにはいかない。ゲイルに理由を尋ねる

「このことが知られた以上、俺はここにはいられないよ。お前やなのはたちの夢、新人たちの未来をつぶすわけにはいかない」

もし今回のことでゲイルのことが明るみに出た場合、管理局は違法研究としてゲイルを拘束せざるを得ないだろう。そうなれば、この機動六課自体が罪に問われる可能性も出てくる。ゲイルにとって、それは許されるものではなかった

「でも！ 私たちはそんなの「俺が嫌なんだ」」

フェイトが止めようとするが、ゲイルの意思は固かった。どうすればいいのか、ここにいる全員がわからなかった。だが、静寂はすぐに破られることとなる。会議室に、アラートが鳴り響いた

『海上に敵影を発見！！ ガジェットです！！』

報告を聞くや否や、ゲイルはへりへと向かって走り出していた

これが、最後の仕事と決めて

第十九話 謝罪、決心、秘密（後書き）

5万PVを記念して、短編のアンケートを行っています。詳しくは
前回の活動報告をご覧ください

第二十話 緋風、帰る場所（前書き）

私は走っていた。まだ約束を守ってもらってないから

私は走っていた。伝えなくちゃいけないことがあるから

私は走っていた。決して受け入れられん、言い返さないかんことがあるから

私は走っていた。お礼を言いたいから

僕は走っていた。このまま、さよならなんて悲しすぎるから

私は走っていた。まだまだ、一緒にいたいから

私は走っていた。望んだから。辛いときにそばにいたいと

私たちは、走った。この思いを、伝えるために

第二十話 緋風、帰る場所

「ドクター、ルーテシアお嬢様から通信です」

ミッドの、とある深い森の中、そこに秘密裏に建てられた、普通に生活する分には全く気付かれないであろう秘密研究施設。男はそこにいた

「おや、珍しいね。つないでくれ」

ドクターと呼ばれた男は、自分と同じ髪と眼の色をした女性にそう言くと、施設の正面にある巨大なモニターに目をやる。するとそこには、10歳程度の無表情な表情の少女が映し出された

「珍しいねルーテシア。君から連絡をくれるなんて。騎士ゼストとアギトはどうしたんだい？」

『別行動中。ドクターのおもちやが飛んでるのが見えたから』

ルーテシアと呼ばれた少女は男の質問に答え、同時に自分が通信をとった理由も明かした

『手伝わなくてもいい？』

そう問いかける少女に男は笑いながら答える

「ああ、あれは言ってしまうば在庫処分だよ。ついでに、機動六課の戦力の偵察でもある。つまり落とされたところでなんら問題はな

「あ、ちょっと！」

指令室に駆け込むなり、ゲイルはすぐそばにいるグリフィスに状況の確認だけすると、すぐに飛び出して行ってしまった

「なんか、ゲイルさんらしくないですね」

「ルキノ…君もそう思うかい？」

グリフィスは、一連のゲイルの行動に違和感を覚えていた。普段はふざけているが、こういう緊急事態では人一倍の落ち着きを見せ、経験の浅いフォワード陣に余計な緊張を与えないようにする。それが、グリフィスから見たゲイルだった。しかし、先ほどの彼はどうだったろうか。いつものひょうひょうとした雰囲気も落ち着きもなく、駆け出して行ってしまった。まるで、早く出撃させると言わんばかりに

『グリフィス君！ゲイル君おるか！？』

思考にふけっていたグリフィスは、はやてからの通信で現実に戻ってきた

「いや、状況だけ聞いてすぐに行ってしまいました。多分屋上かと」
『了解や。それと、私もそっちに行けそうにないからこのまま現状報告お願いできるか？』

「わかりました！」

とりあえず、今は自分の仕事をこなそう

そう思い、グリフィスは自分の職務へと戻っていった

「海上に30機か…フェイトちゃん、どう思う?」

「戦力偵察、かな」

グリフィスから状況を聞き、なのは、はやて、フェイトは屋上へ向かいながら話しあっていた。後ろからは、副隊長たちや新人たちも来ている

「私もそう思うかな。こっちは、遠距離から広域殲滅を放り込めば済むんだけど…」

「それをやっちゃうと今後が苦しくなる。それがわかったからゲイルは一人で行ったんじゃないかな?」

自分は今もういなくなるから

「……………」

フェイトが言外にそう言っているのがそれを聞いていた全員につたつわった。沈黙に包まれる一同だったが、やがて屋上にたどり着く。そこには、今にも乗り込もうとしているゲイルがいた

「ゲイル君!」

はやての呼びかけにゲイルは気づくと、はやてたちに向かって歩いてきた

「どうした。迎撃は俺が一人で行く。グリフィスの奴にそう言っておいたはずだが？」

そう言ったゲイルの声色は、今まで誰も聞いたことがないほど無機質だった。一瞬反論をためらってしまっただが、はやては何とか却下する

「部隊長権限で却下や」

「なんでだ？ 奴らの目的はおそらく戦力偵察だ。できるだけ戦力は抑えたほうがいいはずだが」

にらみ合う両者。そこになのはが割って入る

「それなら、いつも通りのフォーメーションを組めばいいよ。私が後方支援、フェイトちゃんとヴィータちゃんが前衛で」

「だめだ。お前は今回は出させない」

なのはがもつともな意見を出す。だが、すぐさまゲイルに却下される。反論するよりも早く、ゲイルが続きの言葉を紡ぐ

「お前は話さなければならぬことがあるはずだ。そうなったときに、フェイトのフォローもいるだろ？」

「……！」

なのはは、この件を出されると黙るしかない。なんせ、今回の一連の事件はある意味自分の失態から来ているのだから

「つつわけで今回は俺が「アタシは行くぞ」——ヴィータ」

ゲイルを遮ったのはヴィータだった

「アタシは今さら聞く必要もねえし、フォローならはやてとテスト
ロツサがいる」

ヴィータの眼は、断られてもついて来ようという眼だった

「そう言うことなら私も行こう。いてもしょうがないのでな」
「シグナムさんまで」

シグナムまで便乗してきた。こうなってしまうては、どうしようもない、とゲイルは思った

「わかった。はやて、それでいいか？」

一応部隊長であるはやてに確認をとる

「まあ、ええやろ。頼むで、三人とも」
「了解」「」

「ヴァイス、もう出られる？」
「乗り込んでいただければ、すぐにでも！」

フェイトの問いに、ヘリのコクピットから身を乗り出して答える

「じゃあ、行ってくる。なのは、ちゃんと話すんだぞ」
「うん……」

なのはにくぎを打つゲイルだが、そのなのはに元気がない。仕方ないか、と思いヘリに乗り込もうとする

「あの、ゲイルさん！」

だが、それは突如自分の名を呼ばれたことで止まった。振り返るとそこにはスバルがいた

「どうした？ 早く「帰って…きますよね？」——なに？」

早くなのはたちのところに行け、と言おうとしたところでスバルがゲイルに尋ねる。先ほど、ゲイルは辞表を出していた。それは、六課から出ていく事を意味している。それはスバルもわかっているはずだ

だが、彼女はそれでも尋ねた。自分たちのもとへ帰ってきてくれるかと

「シグナム副隊長とヴィータ副隊長と一緒に帰ってきてくれますよね？」

スバルは問いを繰り返す。その姿はいつもの快活さはない

「……はやく行くんた」

だが、ゲイルはそれに答えず、それだけ言ってへりに乗り込んでしまった。呆然とするスバルの前で、へりはハッチを閉じ、飛び立ってしまった

「ゲイルさん……」

泣くでもなく、ただただ呆然とスバルはその場に立ちすくんでいた。しばらく無言だった一同だったが、やがてなのはが戻るように言う

「さあ、みんな、会議室に戻ろう。私も話があるんだ」

なのはが自分から言い出したことに、フェイトは驚いていた。だが、なのはにとっては当然だった

「（ゲイル君は話してくれた。きっと嫌だったはずなのに）」

自分が一方的に感情に任せた要求をしたのに、それでも彼は話してくれた。結果、自ら辞表を出すことになるうとも。それなのに、自分がその約束を反故にするわけにはいかない

「（それに、ここを出て行かせるなんて絶対にさせない）」

「話ですか？」

事情を知らない四人を代表して、ティアナが尋ねた

「うん、私の教導の意味、理由。それから、ゲイル君が言った、『ある事件』。これは全部、一つの事件が発端なんだ」

夜の屋上に、なのはの声が響いた

「おまえ、本当に戻らないつもりかよ？」

ヘリで隣に座っていたヴィータが、語気を強めて詰め寄ってくる

「そうだ。でなきゃ、辞表なんか出しやしないさ」

「それはあの話をしたせいかな？」

「ん、まあそうだな」

あの話は、俺が人間ではない、ということを実証したものだ。造られた存在、それも、兵器として。そんな存在を、自分のそばに置いてほしくないと思うのは当然のことだ。俺だって、はやての夢を邪魔したくないんだ

「俺は、お前らとは一緒にいられない。どんなに人間らしく振る舞ったって、所詮は兵器ってことだな」

「！！！！！」

自嘲気味に言ったとたん、ヴィータに胸倉をつかまれた。いつもの吊り目が、さらにキツくなっている。これ、怒ってるよな

「おい、何でお前が「うるせえ！」」

怒ってるんだ？と聞こうとしたが、それはヴィータの怒号にかき消された

「黙ってきいてりゃ、てめえどういうつもりだ！ 人と生まれが違うってことで、アタシらがお前を避けるんでも思ってるんのか！」

ヴィータが叫んでいるのを聞いている。というか、口をはさめなかった。俺には、なぜコイツが怒っているのかわからない

「ちょ、落ち着けつて。何怒ってるんだ「わからないのか？ スカ―レット」シグナムさん？」

今度はシグナムさんに遮られた。ヴィータのように叫んでいるわけではないが、こちらでも明らかに怒っている

「私は言葉を選ぶのが下手なので、単刀直入に言つてやる。ガキが調子に乗るなよ」

「……んだと？」

シグナムさんが年上ということも忘れ、乱暴な反応をしたまま睨みつける

「一丁前に新人たちの前で大人ぶつて、ちょっと自分に分が悪くなつたらすぐに逃げ出すつもりか。現実を甘く見るなよ。世の中自分に都合のいいことばかりじゃない」

シグナムさんの言っていることは正しい。ガキ呼ばわりされたことは腹が立つが、それはもうどうでもいい。だけど、頭では理解できても、感情では納得できない。だから俺は最低のことを口走っていた

「あなたたちにはわかりませんよ！ 勝手に生み出された命の^{もの}気持ちなんて！——グッ？！」

「貴様、今なんといった？」

気が付くと、シグナムさんに殴られていた。なぜシグナムさんはあ

んなに怒っているんだ？

「造られた命には幸せになる権利がない。そう言いたいのか？ だとしたら、私はお前を許すわけにはいかない」

「どういうことですか」

痛む頬を抑えながら、シグナムに聞き返した

「簡単な話だ。私やヴィータ、シャマル、ザフィーラ、そしてテスト・タロツサもお前の言う造られた命だからな」

そう言うと、シグナムは語りだした。自分たちと、フェイトの出自について

— Side スバル・ナカジマ

「——以上が、私の教導の根幹、基礎にこだわる理由、だよ」

なのはさんの話は、私たちにとって衝撃だった。あの、管理局でもトップレベルのエース・オブ・エースなのはさんが、8年前に撃墜されていたことを知ったからだ。今なら、ティアがなんであんな

に怒られたのかわかる。無茶して大けがしちゃったのはさんだからこそ、同じように無茶したティアを許せなかったんだ

「あの事件から、私たちはなのはにつきつきりだったんだ……ただ一人、ゲイル以外は」

「ゲイルさんも、この事故に関わっていたんですか？」

フェイトさんの捕捉に、ティアナが聞き返す。それを見たシャマルさんが、端末を操って映像を巻き戻す。やがて、映像はなのはさんが撃墜された現場で止まった

「この映像、よく見て」

なのはさんに言われ、私たちはその場面をよく見る

「あれ、あそこに映ってるのって……」

そして、私は画面の隅のほうに見覚えのある影を見つけた。緋色の髪と、一般局員のバリアジャケット。今より小さいけど、面影が残ってる

「うん、ゲイルだよ」

「やつぱり……」

「て言うことは、ゲイルさんはなのはさんが撃墜された場所にいたってことですか？」

これには私も驚いた。私たちの知っているゲイルさんは、目の前で大けがした仲間を放って置くような人じゃない。私は続きがあると思ったので、そのまま黙って聞いた

「ゲイルはね、この事件以来、空戦魔道士として戦うことはなかった。再会した時に聞いたんだ。『人が一人大けがしたのに、それでも何も変わらない空が怖かった』って」

「この事件で体にいちばん大きな傷を負ったのは私だった。でもね、一番心に大きな傷を負ったのは間違いないくゲイル君だった。私はね、8年間の間、ゲイル君から空を奪ったんだ」

もしゲイルさんのことをよく知らない人が聞いたら、きっと嗤っただろう『なんて臆病な人間だ』と。でも、ここにいる誰一人として嗤わなかった。皆知ってるんだ。ゲイルさんが優しい人だって。優しいからこそ、友達が怪我したのに何も変わらない空に恐怖を覚えただんだ

「命がけで無理しないかん場面は、戦つとる限り確かにある」

やがて、部隊長がティアナを諭そうとした。厳しかったけど、優しい声だった

「でもな、そのせいで傷つくのは自分だけやない。もし今回ティアナが怪我しとつたら、一番悲しむんはスバルや。こん時のゲイル君みたいにな」

確かにティアが怪我したら、私はすごく驚いただろう

「あの場面は、それでも撃たないかん場面やったか？」

ティアナは何も答えられなかった

「まあ、それだけ後悔してるんやったら大丈夫やろ。あとはなのはちゃん、頼むで」

「うん。さあ、ティアナ、ちょっとお散歩しようか」

そう言っ、ティアナはなのはさんと出て行っ。これで一件が解
決したとあり、会議室に走っていた緊張が少し解ける

「さて、みんなに質問や」

その空気の中で、部隊長が何かを手にしていた。あれは、ゲイルさ
んが出撃前に渡していたものだ

「今ここに、ゲイル君からあずかつとる辞表がある。私はこれをど
うにかしないかん。さて、みんなはどうしたらええと思う？」

にやり、と笑いながら訪ねる部隊長

「そんなの、決まってるじゃないですか部隊長！」

私は当然のように言っ。他のみんなも、頷いている。フエイトさ
んもシャマルさんもだ。答えは同じだろう

数分後、それは八神部隊長により丁寧にシュレッダーにかけられて
いた

「シグナムさんたちが、人間じゃない？」

シグナムさんから聞いた話は衝撃的だった。まあ、8年前と全然変わっていなかったのとおかしいとは思っていたのだが、夜天の書の守護騎士だとは想像していなかった

「後はテストロッサもな」

こっちもかなり驚いた。こちらは全く想像もついていたので、余計にだった。

「確かに私たちは普通ではない。だが、それがなんだというのだ。そんなもの、ひとたび乗り越えてしまえばどうということはない」

シグナムさんが諭すように言う。今のシグナムさんやフェイトを見れば、それが嘘ではないことは明白だ。だが、それでも……

「だめなんですよ、俺は」

「何でだよ！」

ヴィータが怒るのも無理はないだろう。自分ではつかめた幸せを、

目の前の男はつかもうとしないのだから

「ヴィータたちにははやてがいた。フェイトにはなのはがいた。でも、俺にはいないんだよ。二人みたいに支えてくれる人がさ」

人は誰かに支えられないと生きていけない。何かを乗り越えらなければなおさらだ。だが、俺にはそんな人はいない。いや、いちゃいけないんだ。俺の隣にいるということは、犯罪そのものの横にいるようなものだ。なんせ、違法研究の結果なんだからな

「てめえまだそんなことを――」

言いかけたヴィータを、シグナムが止め、こう切り出した

「スカーレット、賭けをしようじゃないか」

「賭け、ですか？」

「ああ」

まさか、シグナムさんから賭けを持ちかけられるとは思わなかった

「ガジェットを撃墜し、六課に帰った時、出迎えが何人いるか、というのはどうだ？ 誰もいなければ、好きにしろ。先ほど話をした全員いたら、貴様は六課に残る。どうだ？」

中途半端にいた場合はどうなんだ、という疑問はあったが、どうせ一人もいないだろう。俺は賭けに乗った

「イイですよ」

そう言ったとき、シグナムさんが自信にあふれているように笑った

がどうしてもよかった。どうせ、誰も待ってなんているわけないだろうから

「シグナム姐さん、もうすぐ六課ですぜ」

「ああ、ご苦労だった」

時間は流れ、ガジェットの撃破を終え、ゲイルたちは六課に帰っていた

ガジェットは、シグナムとヴィータがほぼ撃破してしまいゲイルは本当に援護しかしていなかった。次あうことがあれば、この二人は絶対に怒らせないようにしようとゲイルは誓った

「オイ、ゲイル」

誓いを済ませたところで、ゲイルはヴィータに呼ばれた

「オメー、さっき自分には支えてくれる人はいないつつつてたよな」
「ああ」

ゲイルは、自分の発言を思い出しながら答えた

「アタシからひとつ教えといてやるよ」

へりは、六課の屋上に着陸した

「支えてくれる人ってーのはな、気付かねえうちにできてるもんなだよ」

ハッチが開く。そこには、先ほど自分の話をした全員がいた

「よーやく帰ってきたな」

はやてが代表して声をかける。ゲイルとしては、何が何だかわからなかった。彼女たちはなぜここにいる。いつもなら、もうとつくに寝ている時間だろうに

「ゲイル君、私はゲイル君に言いたいことがあるんや」

「お、おう」

声色は普通だが、妙に迫力があり、何も言い返せなかった

「あんまり私らを甘く見んといてや！ 生まれが違う！？ そんなもん、だ〜れもな〜んも気にするかい、このどあほ！」

「な、ど、どあほ？」

いきなり言われて、何を言われているのかわからなかった

「ほら、みんなのところに行ってきい！」

「うわ、つとと」

背中を押され、全員が待つところへと背中を押される

エリオ、キャロがゲイルに抱きつく

「どこにも行かないでください」

「一緒にいてください」

声が震えている。泣いているのがわかる

「ごめんな、二人とも」

そう言つてゲイルは二人の頭に手を置く

「ゲイル君、約束したよね、守ってくれるって」

「私、まだゲイルに言わなくちゃいけないこと何も言っていないんだ。これでさよならなんていやだよ」

「なのは、フエイト……」

「いろいろ気にかけていただいてありがとうございます。でもまだ教えてほしいことがあるんです。これからよろしく願います！」

「ティアナ……」

「ゲイルさん」

最後はスバルだった

「私、前にエイミイさんとアルフから聞いたんです。ゲイルさんが傷ついてた時があったって。その時、決めたんです！ 今度は私がゲイルさんを支えるんだって！」

ゲイルは、不意に先ほどヴィータに言われたことを思い出した

『支えてくれる人ってーのはな、気付かねえうちにできてるもんだ』

「（ああ、ヴィータが言ってたことは本当だったんだな）」

自分はなんてバカだったんだろう

支えてくれる人なんて、こんなにたくさんいるじゃないか

「みんな、ただいま」

『お帰りなさい』

第二十話 緋風、帰る場所（後書き）

鯉「以上、魔王降臨編と銘打った『ゲイル暴露編』の終了です」

ゲイル「長かったな。続き物としてはお前の中では最長じゃないのか」

鯉「そうだね。第一章の最終エピソードだったから、気合入れてみた」

ゲイル「第一章？初耳だが？」

鯉「初めて言ったからね。六課に君が合流してから、このエピソードで、本当の意味で六課の一員になるまでが第一章、かな」

ゲイル「ということは、次回から新章突入か？」

鯉「いや、今回は5万PVの特別編が先。このエピソード中で、どうしてmギャグを書く気分じゃなくてね」

ゲイル「久しぶりのギャグ回か。内容は？」

鯉「以前活動報告で案内した、『アルコール・パニック！』だね。唯一票が入った話だからね。具体的には、六課で宴会する話です」

ゲイル「嫌な予感しかしねえ」

鯉「第二章では、どんどん話が加速していく予定です。置き去りに

されていた伏線や、ヒロインであるあの方もとうとう!？」

ゲイル「これからもよろしくお願いします。感想やご意見、リクエ
ストなんかもお待ちしています」

鯉「それでは、次回の更新でお会いしましょう」

番外編 アルコール・パニック！（前書き）

5万PV記念の番外編です

キャラ崩壊に注意

番外編 アルコール・パニック！

「六課のメンバーで宴会やるで！」

とある朝、新人たちの早朝練習をおえ、朝食をとっていたなのはとゲイルは、いきなり放送で呼び出され、先に来ていたフェイト、シグナム、ヴィータとともにはやての宣言を聞く。みな、一様にわけがわからない、といった顔をしている

「主、いったい何をおっしゃっているのですか？」

シグナムが呆れたように尋ねる。当然の反応だろう

「何って、そのままや。六課の、正確にはフォワードのみんなと私らで飲み会やるでって言ってるんや」

シグナムの問いに、さらつとはやては答える。さも自分の主張は当然だともいうように。だが、シグナムたちからすれば論点はそこではない

「いや、ですから。私たちは24時間勤務なのですよ？ そのような暇は…」

そうなのだ。管理局、とりわけ緊急事態に出撃が多い機動課である彼女たちは、いつ出勤がかかるかわからない。そのため、交代部隊を交えての24時間勤務が基本である。本来なら、夜中に外出するようなことは避けなければならない

「ふふ、甘いでシグナム。これ見てみい」
「これは？」

しかし、はやては自信満々であるデータを見せつける。それは、機動六課局員全員の有給についてだった

「人事部からせつつかれ取るんよ。はよ有給消化せえって」

はやてが苦笑い気味に言う。確かに、はやてを筆頭とした隊長たちは有給が有り余っている。いったい何年分をためているのか。ゲイルはため息をついた

「ったく、さぼれとは言わないけど、適当に休めよな…」

「そう言うゲイル君こそ、結構たまってるよ？」

なのはの指摘通り、彼女たちに比べれば少ないものの、一般局員たちから見れば明らかに多い量の有給が表示されていた

「無限書庫は忙しいんだよ。陸も海も、ちょっと困ったらすぐに無限書庫に頼りやがる」

愚痴のように言うゲイルだったが、どこか懐かしむような声だった。忙しくも楽しかった日々を思い出しているのだろう

「とにかく！ スターズ、ライトニングとゲイル君、それに私は明日は休み！ 今日の終業時間になったら隊舎前に集合や！ あ、もちろん私服やで？ 管理局員のカッコでお酒飲むわけにはいかんかなあ」

心底楽しみなのだろう、はやては笑いながら言った。それに対して、

今度は誰も異を唱えなかった。全員、なんだかんだで息抜きがしたいと思っていたのだろう

「さて、おいしくお酒を飲むために一生懸命お仕事や！」

まるでどこかのサラリーマンのようなことを言い出すはやて。今日も、新しい一日が始まる

魔法少女リリカルなのはStrikers 緋色の風
5万PV記念番外編
アルコール・パニック！

「え？ 飲み会ですか？」

「ああ。はやての提案だ。フォワード陣は強制参加だそうだ」
「て言うか、私たち未成年なんですけど…」

デスクワークをしていたスバルとティアナのもとにやってきたゲイルは、先ほどはやてから伝えられたことを二人に伝える。すると、当然のツツコミがティアナから入った

「ああ、もちろんお前らには飲ませないよ。ただ、一緒に行って楽しく騒ごうってだけだ。六課に入ってから、ろくに休んでないだろ？」

「それはそうですね…」

今回の目的は、溜まった有給を消費することでもある。ゲイルの言うことは間違っていない

「それに、行くのは酒だけじゃなくて料理もうまい」「行きます！絶対行きます！」———「お、おう」

料理、と言った瞬間にスバルが参加を決める。色気より食い気、というほどでもないが、いったいあの体のどこに入るのだろうか、とゲイルは考えてしまう

「（やはり、胸だろうか）」

そう考ええると、ついつい年の割に豊満な胸に目が行ってしまう。というか、この部隊の女性たちは異常にスタイルがいい。はやてのことだ、採用基準にスタイルでも入っているんじゃないだろうか

「ゲイルさん？ ぼけーつとしてどうしたんですか？」

「いや、なんでもない。ただ、人体の不思議について考えていた」

「？ そうですか」

スバルには意味が通じなかったようで、首をかしげていた。ティアナは隣で呆れたような顔をしていたが

「ごはん、じゃあスバルは参加つつうこといいな。ティアナは？」
「せっかくだし、私も参加します。て言うか、あのなのはさんたちがお酒を飲むとどうなるのか気になりますし」

ティアナが読者の方々の総意を理由に参加を表明する

「おし、じゃあ、ぱっぱと仕事終わらせるぞ」

「はい！」

そう言つて、ゲイルも仕事に取り掛かった。だが、一つ気になることがあった

「（ティアナが言つてたこと、確かに気になるな）」

ゲイルが気にしているのは、先ほどティアナが言つていた「なのはたちが酔うとどうなるのか」ということだった

10歳前後でなのはたちと別れたゲイルは、当然彼女たちが酔うとどうなるのかということは知らない。もしかしたら、とてつもない酔い方をするのではないだろうか

「（一番ひどいのはやっぱりやてだろうな。いや、普段がおとなしい分フェイトもすごいかな）」

旧知の人間の酔った姿を想像しながら、ゲイルは仕事を消費していった

「で、時間は過ぎてすでに夜である」

「だれに説明してんですか？」
「さあ」

日が落ち、自分たちの業務も終わり、ゲイルと新人たちは六課の入り口で隊長たちを待っていた。新人たちの作成したデータのチェックのため、隊長たちは少し遅れている

「て言うか、エリオとキャラも来るのな」
「はい。せっかく皆さんと食事できる機会なので」
「楽しみです」

酒が入るので、スバルやティアナはともかくこの二人が来ても大丈夫なのか、と少し心配になるゲイルだった

「（ああ、どうか大事になりませんように……）」

「ごめん、お待たせ」
「あ、なのはさんたちだ！」

心配していたゲイルのところに、隊長たちとシャルが来た。みな私服を着ているので、野暮ったい制服よりもはるかにきれいに見える。これで街を歩けばすれ違う男たちが全員振り返ることになるだろう

「さあ、今日は無礼講や！」
「みんな、今日は楽しむよ！」
「「「「おおー！」「」「」」

はやてとなのはが囃し立て、スバルたちもそれに乗っかる

「え、あの、みんなあまり羽目を外しすぎないようにね？ 特に四人はまだ未成年なんだから、あんまり無茶しちゃだめだよ」

そのよこから、フェイトが注意を促す。何はともあれ、一行ははやてが予約してあった店へと向かうのだった

「へいらっしやい！ っと、こりや八神さん、いつもごひいきに！」
「お世話になってます。予約してあるはずなんやけど…」
「ああ、聞いてるよ。二階の座敷が抑えてある。１１人でいいんだよな？」

店に入ると、威勢のいい店員がはやてに声をかけてくる。どうやら、顔見知りのようだ

「次の日仕事がないときなんかはよく飲みに来てたんよ」
「なんつつか、１９歳の発言じゃないよな……」

ゲイルのツツコミを一同は華麗に無視し、それぞれ座敷へと座り、メニューを覗き込む

「ねえティア！すごいよ、全部頼み放題だつて！ すごいね！」
「あんた、少しは落ち着きなさいよ」
「よかったねキャラ、ジュースもたくさんあるみたいだよ」
「うん、たくさんあるね、エリオ君」

新人たち四人は、初めてくる空間に興奮していた。スバルをなだめていたティアナさえ、少し声が弾んでいる

「ええつと、とりあえずみんなは何飲む？」

「何ゆうてるんやなのはちゃん。最初はビールで乾杯と決まってるやろ」

「え、私あんまりビールは好きじゃないかな…」

「諦めるテストロッサ。これも一つの付き合いだ」

「オイ、ゲイルもそれでいいよな？」

一方、隊長たちは慣れたものだった。席に座ると、注文の確認をする。ゲイルもユーノや、たまたま時間が合えばクロノとも来ることがあるので、慣れている

「俺もそれでいいよ。て言うか、ヴィータは大丈夫なのか？」

「このマスターは顔なじみだ。て言うか、今あたしのことを子供扱いしなかったか？」

ギロリ、とヴィータが睨み返すが、運よく店員が注文を取りに来たので難を逃れたゲイルは隣で一人ニコニコと様子を見ているシャマルに話しかけた

「はやては、よく来るんですか？」

「そうね、六課が運転を開始するまでは、たまに来てたわね。私たちも、仕事がないときは一緒に来たりしたわ」

そのまま他愛もない話をしていると、全員の飲み物が来たらしく、はやてが乾杯の音頭を取ろうとしていた

「ええ、みなさん、日ごろの厳しい訓練やキツイ仕事はいったん忘れ、今日は楽しみましょう！ 乾杯！」

「「「「「「「「乾杯！！」「」「」「」「」「」

一気に全員がグラスをあおり、見る見るうちに中身が減っていく

「ぶはあ！ 久しぶりやとやっぱおいしいな！」

「え？ もう飲んだの？」

最初に口を開いたのははやてだった。その手のグラスは空、つまり一気飲みである。その光景に、ゲイルは驚いた

「そうだね。私も、久しぶりに飲んだかな」

そう答えるのはなのは。こちらも空っぽである

「うっ、苦い……」

苦しそうにうめくフェイトのグラスも、すでに空である。よく見れば、シグナム、シャマル、ヴィータのグラスも空だ。一方、ゲイルのグラスには半分ほど残っている。その横では、シグナムがはやてのグラスにピッチャーからビールをなみなみとそそぐ。泡3：ビール7。完璧な比率だ

「ええっと、ペース早すぎない？」

「「「「「何言ってるの？ 最初の一杯は一気って決まってるんだよ？」」「」「」「」

そんな決まりは聞いたことがない、と思いながらもゲイルは一気にグラスをあおる

「ささ、どうぞ。ゲイル君」

「あ、ありがとうございますシャルさん」

グラスを開けると、すぐにシャルがそそぐ。それを一気に飲む。シャルが注ぐ。一気飲み。注ぐ。以下エンドレス

「って、きつすぎるわ!」

思わず立ち上がって突っ込む。だが、急激にビールを飲み続け、一気にアルコールが回ったゲイルの体は、バランスを失いシャルの横にふらふらと倒れこみ

もにゅん

「あんっ」

「あ」

隣にいたはやての胸に右手をついてしまった。やわらかい感触が、程よい大きさの果実から伝わってくる

時が止まった

騒いでいた新人たちも、その光景に息を呑む。誰も、何も言えなかった

「……じゅ、ごめんはやて!」

いち早く復活したゲイルは、素早くはやてに謝る。普段他人の胸を
もんでいるのだから自分も平気だろうなんてことは思わなかった。
自分は男、はやてが女性の胸をもむのとはわけが違う

「／／／／／／／／」（涙目）

はやても何も言えず、顔を真っ赤にしていた。はやて自身、自分が
もまれる日が来るとは思っていなかった（半分以上事故なのだが）

「貴様スカーレット！主に何たる非礼を！」

「いや、今のは事故！」

「問答無用「待つんやシグナム！」——主？」

怒り狂ったシグナムを止めたのははやてだった。ゲイルに向き直り、
顔を赤くしながら言う

「で、どうやった？」

「え？」

「だから、私の胸揉んでないやつた？」

酒の力か、誰でも気付けるほど恋する乙女になっているのははやてだっ
たが、同じく酒の力で思考力が弱っているゲイルはそれに気づけな
い。素直に感想を言ってしまう

「うーん、もう少しポリウムがあつたほうがふべらっ！？」

「最低や！しばらくそこで死んどき！」

デットボール。オウンゴール。セーフティ

考えうる限り最低の答えを返したゲイルを待っていたのは、腰の入

った素晴らしい右ストレートだった。はやての宣告通り、ゲイルはその場で動かなくなっていた（ただ気絶しただけです）

「さあ、みんな飲むで！ 店員さん！ この店のお酒全種類持ってきて！」

「は、はやてちゃん、落ち着いて……」

なんとかはやてを落ち着かせようとするのはだったが、逆に火に油を注ぐだけの結果になってしまった

「これが落ち着いてられるか！ ほら、なのはちゃん、グラスが開いてるで。私がついだる！」

「え、でもこれは今……」

「部隊長の酒が飲めんっちゆうんか！？」

タガが外れてしまったはやては、もはやシグナムですら止められなくなっていた。グラスが開いていると、すぐに酒を注ぐ。もちろん自分も飲む。もしこの光景をはやてにあこがれる局員が見たら、卒倒するだろう。内輪でのことで、本当に安心した

「さあ飲むで！ シヤマルお酒や、お酒を持ってくるんや！」

「はいっ」

なぜかノリノリなシヤマルを連れ、はやては飛ばしまくっていた

一方、その光景を新人たちは何とか平静を保ちながら見ていた。そして、心の中は皆一致していた

「（ゲイルさん、あなたはなんてことをしてくれたんですか）」

「あ、すいませ〜ん、ここからここまで、全部お願いしま〜す」

訂正、一人全く気にせず料理に舌鼓を打っている少女がいた

「あんた、ほんとによく食べるわね…」

「だって、せっかく食べ放題なんだから。それに、一個一個が量が少ないからたくさん頼まないと」

飲み屋の料理は、あくまでつまみなので量はそれほど多くない。スバルの胃袋を満たすには、全く足りないようだった

「それに、たくさん食べておっぱい大きくしないと！」

「敢えて目的は聞かないでおくわ。てか、アンタそれ部隊長に聞かれないようにしないと」「残念やったなティアナ。もう聞こえてるで？」——ぶ、部隊長？」

スバルのぎりぎりアウトな発言を、はやては聞き漏らしていなかった。ティアナが注意するよりも早く、彼女たちの後ろに回り込んでいた。両手には、酒瓶が握られている。顔も先ほどとは違った意味で赤くなっており、酔っているのが丸わかりだ

「ぶ、部隊長！？ さっきのはですね、決して部隊長の胸が小さいとかではなくて、ゲイルさんの好みは大きいほうがいいんだなという私個人の意見を基にですね——」

必死で弁明するスバルの目の前に、はやては黙ってスッと何かを差し出す。酒瓶だった

「飲むんや」

「え、でも、私たちはまだ……」
「飲むんや」

ずずい、と顔を近づけ、酒を押し付ける。見れば、横ではティアナがシャマルに酒を押し付けられていた。助けは見込めなかった

「スバル、どうしたんや？」

「えっと、あの……」

目の前のはやての顔と、手元の酒瓶を見比べ――

「い、いただきます！」

一気に煽った。ぐびぐびと飲み干す。そりやもう、某管理外世界のサラリーマンたちもびっくりの飲みっぷりだ

「ツブはあ。 あれ、意外とおいしい？」

「ふ、とうとうスバルもお酒のおいしさに目覚めたようやなあ」

はやてが飲ませたのは、女性でもおいしく飲めるように作られたウオッカベースの酒だった

「はい、おいしいです！ もっともらっていいですか？」

「ええで、じゃんじゃん飲むんや！」

そうなれば、おいしい物好きのスバルが避けるわけがない。はやてからあるだけもらい、なのはたちと同様に呑み始めた。ティアナも、抵抗しつつもなんだかんだでシャマルとなのはから注がれる酒を飲んでる。今、ここは無法地帯と化した

「……ここはなんて地獄だ？」

目が覚めた俺が見たのは、まさに地獄絵図だった

アルコール組とノンアルコール組をテーブルで分けていたはずなのに、今ではそんな境界はなくなっており、あちこちにビンと料理とグラスが散乱していた

「だから！ 単体の大きさより全体のバランスが大事なの！ シグナムさんはわかってないの！」

「甘いなのは。男にとってはでかいというだけで十分なのだ。それだけで、男どもは夢を持つことができる。そうだろうエリオ？」

「え？ 僕は、え」と……

「シグナムさんその聞き方はずるいの！ エリオこっちにおいで、バランスの大切さを教えてあげるの」

「え、いや助けてフェイトさ〜ん」

なのはとシグナムさんの議論にエリオが巻き込まれていた。よくいる、酒を飲むと無意味に何かを熱く語るタイプの人間がいるが、どうやら二人はそのタイプらしい。巻き込まれたエリオは最後にフェイトの名を叫びながらなのはに抱きしめられていた。若干いらつとしたので、放っておくことにした

「うええん、ヒック、グス…私なんて、私なんて…」

「じ、自信持ってくださいフェイトさん！ フェイトさん、きれい

だしスタイルもいいし、大丈夫ですって」

「でも、この年まで恋人いたことなんていないんだよ？ 告白だってされたことないし…私、このまま売れ残っちゃうんだ…」

こちらでは、フェイトは泣きながら何かを言っており、それをキャラが慰めるというおかしな光景が広がっていた。いわゆる、泣き上戸いうやつらしい。酔ってでも内向的なのは、フェイトらしいというかなんというか。余談だが、フェイトが告白されないのは別に人氣がないわけじゃない。彼女本人が告白されていることに気付かないのだ。俺は知ってる。昔無限書庫によく来ていた執務官が漏らしてた。「付き合ってくださいといったら『え？今から？もう夜中だよ？』と返された」って。もう少し人の気持ちに敏感になろうぜ、フェイト

「ぐるぐる〜」

「ほらヴィータ！ 飲むんや！ まだまだお酒は残ってるで！」

普通によっているヴィータと、それに絡むはやて。やはりというか、はやては絡み上戸らしい。そんなところまで普段の性格を反映しなくともいいのに

「うふふふふ」

「あなたはなんでそんなニコニコしてんですか」

シャマルさんはいつも通りだった。どうやら、酔っても普段とはあまり変わらないタイプらしい。目の前のテーブルに並べられたグラスが、どれだけ飲んだかを物語っている

「あら、ゲイル君あまり飲んでないみたいね？」

「まあ、気絶してましたからね」

そう言う、シャマルさんがお酒を注ぐ。カシスオレンジなどのよ
うな甘い酒ではなく、平気でビールを注いでくるところなど、シャ
マルさんがいったいどんな飲み方をしたのかをものがたっている

「あははははははははははは！」

一人ぶっ壊れたように笑っているティアナはスルーすることにした。いつも眉間にしわ寄せてスバルのしりぬぐいばかりしているのだ。彼女だって、たまには羽目を外したいだろう。だが、グレンに命じて動画を残しておく。他の連中の分もだ

「ゲ〜イルさん♪」

「うわっ」

グラスを傾けていると、後ろから誰かに抱き着かれた。釘に手を回さ、体が密着している。声から判断して、おそらくスバルだろう。今まで姿がなかったのはトイレか？

「おいスバル。コップ持つてる人間に後ろから……」

注意しようと振り返り、そして慌てて視線をそらし、スバルから離れる。おかしい、今俺の視界は、明らかに肌色の占有率が多かった。

「どうしたんですか？ ゲイルさん？」

いつもの快活な彼女に、どこかトロ／＼した雰囲気加わっている。心を落ち着かせ、もう一度振り返る。やっぱり着てない。今スバル

が身に着けているのは、上下1枚ずつの下着だけだった

「スバル。なぜ服を着ていない？」

顔が赤くなるのを自覚しながらも、何とか平静を装って問いたただす

「だって、熱いじゃないですかあゝゝ」

こいつ、いわゆる脱ぎ上戸か。作者のサークル以外にもいたとはびっくりだ

というか、そんな理由でいちいち脱がれたらたまらん。俺だけじゃなく、エリオだって。そうだ、あいつは今なのは胸の中だった

「あれゝ？ ゲイルさん恥ずかしがってるんですかあゝ」

ニタリ、いつもははやてが浮かべるような笑いを浮かべ詰め寄ってくる。ええい、前かがみになるな！ 見える！

「ゲイルさんだったらゝ、いくら見てもいいんですよゝ？」

恥ずかしげもなくとんでもないことを言い出すスバル。誰だこいつに酒を飲ませたのは！

「私や！」

「お前かコラ部隊長！」

まさか法の守護者と呼ばれる管理局の一部隊の長が未成年に酒を飲ませるとは

「ゲゝイゝルさん！」

「まそつぶ！？」

いきなり抱きつかれ、変な悲鳴を上げてしまった。というか

「ちょ、当たってる当たってる！」

やわらかいものが二つ、背中に当たっている

「ふふふ、当ててるんですよ。うれしいでしょ？」

「嬉しくない！」

「嘘だ！！」

「お前は黙って笑ってる！」

我ながら、無茶な要求だったと思う。しかし、俺にはそんな余裕はない。このやわらかい感触に負けないようにしなければ

「むう、それなら、今度は前からだ！」

「ふぶつ！？」

体を反転させられ、思いっきり頭を胸の谷間に押し付けられた。ヤバイ。これは、ヤバイ

「ふぁ、ふぁらへ（は、はなせ）！」

「アンっ、もうしゃべらないでください。意気がくすぐったいです」

抗議の声を上げるも、色っぽい声でスルーされる。これは、本格的にヤバイ。俺の理性も限界である。いっそ、本能に任せてこのままノクターンに行つてやろうか。本気でそう考えた

「何してるんやスバル！」

だが、何とかそれを止めてくれたのははやてだった。フエイトあたりが止めに来るかとも思っていたが、どうやら眠ってしまったようだ。キヤロと一緒にになって横になっている。見渡せば、議論を繰り広げていたシグナムとなのは、巻き込まれたエリオ、先ほどまで元気だったシャマルも、そこらへんに転がっている。まあ、ティアナだけは笑い続けていたが

「はやて、たすかつ「そんなもん、生乳でやらないやろ！」
——あれ？」

礼を言おうとするが、様子がおかしい。というか生乳って。親父がお前は

「もうええ！ 私が手本見たる」

はやてはそう宣言すると、自分も脱ぎだし、いつの間にか下着一枚になっていた。その脱ぎっぷりの、男らしいこと

「ゆ、ユーノ！ 助けて！」

『え？ 何ゲイル、どうしたの？』

だが、ここで流されるわけも行かず、何とか通信をつなぎユーノに助けを求める

「「ゲイルさん（君）！ 行きますよ（行くで）！」」

「うわ、ちょ、あああああああ！！」

『え、ちよつと、どうしたのゲイル？ゲイルー！？』

その声を最後に、俺の意識は途絶えた。というより、ここから先の

ことは覚えていない。ただ、やわらかい感触に包まれていたのだけは覚えている。あと、ティアナの笑い声も。あれはかくホラーの域に入っていた

「何これ？」

数十分後、逆探知からゲイルの居場所を割り出したユーノが見たのは、フェイトから保護したと聞いている少年を抱きしめて眠る自分が恋い焦がれるなのは、涙の後を顔に残したままピンクの髪の少女を抱きしめ眠るフェイト、並んで眠るヴィータとシグナムとシャル、なぜかほぼ裸でゲイルに抱きついたまま眠るはやてとスバルに、苦悶の表情を見せるゲイル、そして、ケタケタと笑い続けるティアナの姿だった

「ええつと、僕は今、地獄へと踏み入れちゃったのかな？」

その呟きに答ええるものは誰もいなかった

後日、六課の規則に「禁酒」の文字が加えられたのは言うまでもない

番外編 アルコール・パニック！（後書き）

今回の教訓

酒は飲んでも吞まれるな

作者のサークルにいる脱ぎ上戸の奴は、残念ながら男です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4544t/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS 緋色の風

2011年10月31日16時09分発行